

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

萬延元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」(紙数五十三枚)の記載あり〕

一七八 参考 樺山資之日記鈔

安政七申年三月十八日、万延元年十
改メ、閏三月朔日布告

正月

十三日

關太郎殿〔白鷹郡〕田布施高橋ノ蔵へ差越候、一宿、

十四日

片浦ノ様差越候処、手前ニテ〔新納立夫旧名〕兄君へ行逢候間、夫ヨリ

加世田〔加世田郷〕釐鮫島新兵衛殿へ差越ヘクトノ事候ヘトモ、大

世田〔世田郷〕崎ノ内ニ泊り候、

十五日

飯屋ノヤウ差越、踊見物イタシ候、近々〔土懸〕

太守様御参詣ノ由ニ候、鮫島氏へ差越泊り候、

十六日

西宗右衛門殿所へ差越候テ刀見候、中略ス

廿三日

谷元氏〔存右衛門乎〕用向ニテ加世田ノ様被帰候間、帰リニ番所ニ寄

り、一乘院ニ差越什物拝見候、忠昌公〔川辺郡〕日新公〔忠良〕龍〔義〕

伯公ノ御筆有之候、下略

二月 欠〔家紀並日誌〔東大本〕には、朔日・
十五日・十六日・廿六日の記述あり〕

三月

廿三日

急キノ飛脚着候処、去ル三日井伊掃部頭ヲ討チ候由、〔第一報〕

關太郎殿ヨリ承り候、

廿四日

有村氏へ差越候、葬式有之候、旁々思ヒ合セテ言語ヲ

断候〔有村雄助前夜帰家、即夜命ニ依リ自刃ス、大久保利通
日記参照〕

閏三月

閏三月

朔日

母上様多年ノ御煩ヒノ処、近比ニハ御快ク被為成候、
中略ス

十八日

今晚寺師善殿所へ饒別ニ差越、九ツ時分ニ帰ル、
(余道旧名)

十九日

今朝有川十右衛門殿所へ差越候、夫ヨリ(孫兵衛)樺山直
八殿へ暇乞ニ参リ候、八ツ時分ニ帰候、今晚大山三左
衛門殿へ差越候、堀仲左衛門殿モ被参候、明日江戸へ
(伊地知貞馨旧名)

出立ノ御届申上候(樺山自身ヲ云フ)

今晚客来有之候、岩下(方平旧名)佐次右衛門殿・後醍院殿其外被
参候、有村武次殿被参品々被送候、奈良原氏野村氏へ
(海江田信義旧名)

寄り帰り候、有村氏伊集院金殿被下候間、行キ帰り候
テ直ニ出立、母上様市來へ御入湯中ニテ今晚御別レ申
(日鷹郡)
上候、下略ス

四月 欠

五月

五日

下ノ關ニ滞、舟宿ニテ節句ノ興賑々敷催候、

何となくものそ悲しき故郷の

空さへけふは恋しかりけり

をもふ事忘れもやらぬ旅なれと

しはしこゝろの慰れけれ

十三日

大坂へ着キ候、満水ニテ堤へ上リ、虎屋へ一宿候、中
略ス

月清き難波の浦の柳かけ

あかても夏の夜そ更にける

郡山大介(無隠旧名、京撰探訪者第二卷参照)殿当分上已
後ノ形況聞合ノ為メ滞坂ノヨシ、致面会候、旁ノ咄承
候、中略ス

六月

六日

晴

程ヶ谷ヨリ横濱交易場見物ニ廻リ、諸所番所杯有之、
当分町家造作中ニテ、彼是ト堪兼候故ニ、舟ヨリ神奈
川へ渡リ、暮ニ旅宿ニ着候、

七月

七日

前田十殿迎ニ被参候、
夜入過ニ御屋敷へ着イタシ候、品川天王祭ニテ賑々シ
ク候、下略

下略

四五日過候テ三原・前田同道、コフジ町ニ雲州ノ産長
信ト申創作ヘ差越候、西向御邸ヘ日下部伊三次家内已
前ヨリ知人ニテ、見舞ニ差越候、旁ノ事承リ頻リニ待
タリトノ事ニ候、

十日

肥後ノ津田氏被參候、先日同藩ノ木原氏ノ由、(補志) (被參候節咄モ聞置候)
(山三郎)
(家紀並日誌八月十日の日附分にて補誌)

十九日

三原氏出立ニ付、送リニ差越候、(辰風) 發田傳兵衛殿着ノ由
ニテ見舞候、

七月 欠(家紀並日誌には、朔日・十日・十三日・
十七日・十八日・十九日の記述あり)

八月

十五日 晴

日下部氏ノ家内ヨリ月祭リノ品トモ被遣候間、(伊三次父子) 椎原與
(兼旧名) 三次殿・森岡善介殿モ招候テ、(昌胤旧名) 緩々咄イタシ候、今晚
月見ノ約束イタシ置候間、(清綱旧名) 黒田嘉右衛門殿ヲ誘ヒ、(京都市北区) 廣
尾ノ百姓屋ニ行キ、前田氏杯被待居候、

月清く今宵は殊に故郷の

ものゆかしくもおもほゆるかな

廿七日

(金生當時在番明題) 關山糺殿ヘ椎原氏同道差越候、(備誌) 肥後藩ノ津田氏都筑ノ

両士ヨリ書籍届候事、

夜八ツ半時分ニ銅御門ヨリ浪人三十七人入り来候処、

田町御屋敷ヘ被召置候、御丁寧ニ被成下候、都テ水戸

人ニテ趣意ノ程モ書付ヲ以テ申上候由(書付第 卷ニ記
ス)

ス

九月

九日

前田十郎殿出立、

十七日

關山氏ヘ熊本ノ津田氏被參、段々ノ物語リニテ、水戸
(兼柳) 藤田又ハ越前ノ鈴木ノ咄トモ承リ候、感心ノ事ニ候、
(兼松) 戸田氏ハ五十三才、藤田氏ハ五十一才ニテ、兩人ナカ
ラ大地震ノ節被相果候、越前ノ鈴木ハ前年ニ被終候ヨ
シ、肥後ノ長岡氏ハ四十二才ノヨシ、高名ノ士被相果
候、歎息ノ至リナリ、津田氏ノミニテ此ノ人四十一才
ニテ候由、寛仁ノ質兼テノ話ニ、酒会ノ興ヨリモ同志
ノ人ト談話程面白キコトハ無之、静ナルヲ好マレ候故
至極同意ニ覚候、四ツ過マテ咄候テ明日出立帰国ノヨ
シ、当分ハ浪人被召置、御門六ヶ敷故差越候事モ不相
叶候、先度大坂ニテ逢候土浦ノ藩大久保要モ、(觀者) 昨年ノ

暮ニ世ヲ過シヨシ、悉ク人物絶果候、ケ様ノ衰世恨敷事ニ候、

武蔵野の野辺の草々かれ果て、

悲しき秋になりけるかも

十月 欠〔家紀並日誌には朔日三日・六日・十一日・十二日・十三日・十四日・十五日・十六日・十七日・十九日の記述あり〕

十一月

二日

〔東京部中央区〕京橋ノ脇茶屋へ差越待居候処、水藩大野氏被参、外ニ

同道ノ人ト承候故、無遠慮先年ヨリ知己ノ野村弊之助〔弊之助卿亮〕

殿ニテ候間、久々面会、上巳ニ井伊騒動ノ節名前モ聞

候故、其後不相分定テ如何ト案入候処、面会ノ事思ヒ

モヨラストテ、互ニムカシヲ語合ヒ候テ、四ツ時分マ

テ咄シ候テ帰候事、

十五日

雪積リケレハイロイロ忍レテ述懐

ふり積る雪にも色のかわらぬは

いよ／＼松のみさほなるらん

上巳ノ節親シキ人々ノ志ヲ思ヒ出シテ

武蔵野の雪まにみへし俤の

ものしのはれて悲しかりけり

イヨイヨ世ノ中タノミナクコ、ロナレハ、夕ニ雪ノ積ルヲ見テ

武蔵野の尾花もかれてこの夕

はきてかなしき降れる雪かな

廿七日

今朝義老〔伝兵衛在勤藩庁筆者〕へ詳細演候得ハ、尤欽無限、書面川上大夫〔式部〕

見来趣モ有之、遣置又、

廿八日 晴

昨日飛脚立、御国へモ細々申越ヌ、八ツ過ヨリ湯入ニ

差越、日入過ニ帰候処、田十太郎トノ被参、暮過ニ被帰

候、水戸ノ大野被参候、武田〔正生〕・大場〔景徳〕・岡田是迄蟄居イ

タシ候処、又々被召出家老職被申付候段承リ、少々快

ク存候、

十二月

二日 雪降

今日大脇彌五殿出立ニテ、ギョテツ茶屋迄友達同道、

暮前送へ差越、五ツ前ニ帰、雪降事甚シク候事、

三日 雪積ル

今日ハ大野約束ノ事、日下〔目下部伊三次〕へ趣于今来承、緩会、尤馳

走トモ被致、汾陽〔光遠〕へモ承候一条モ有之、田中〔太郎〕へ参リ都

合計り、暮時分ヨリ太郎同道ニテ、御留守居方木屋ニ

テ暫談合ニ及、夜入過ニ帰候事、

雪も深く積りぬれハ

打わたすミなしろたへの山みれハ

あさめつらしき雪の明曉

夜前雪の降積る音のさひしかりけれハ

燈火の影もかすかにつれくと

音さひしくも積る雪哉

冬の夜の心しつかに小夜更て

この葉に積る雪のおとかな

山深く軒端にかゝる雪の音を

浮世の人にしらてしものを

五日 晴

四ツ過ヨリ(芝居別邸)西向へ立寄、僕ヲカリ候テ日下部ナル(白金)廟所

へ参り、隣ト云モオロカナリ、早ムカシナリシ事共シ

ノヒカネテ、

はかなくもうつはうらめしあわれなる

落る泪を手向にやせん

夫ヨリ高輪亭へ差越、七ツ過ニ引取、永山同道ニテ通

丁辺へ致歩行、暮ニ帰候事、

七日 晴

八ツ後ヨリ伊牟田同道ニテ、水野小蔵へ差越候処、他

出ニ付暫待居候テ、遅刻ニ相成、終ニ不逢引取申候テ、

暮過ニ帰候事、

八日 晴

四ツ過ヨリ細川藩木原楯太夫先比見舞候処、其後絶テ

不得逢、今日臺ノ邸へ差越、彼是古物共見セ被申候テ、

酒ナド被出、早時刻モ過候故、八ツ前ヨリ相嘶、夫ヨ

リ高輪亭へ差越、七ツ過ニ引取、湯ナド入候テ、西向ヨ

リ可参トテ今朝被申越候故立寄候処、年内ノ祝トテ飯

ナドノ馳走トモ有之、夜入過ニ帰侍ル、

十二日 晴

今夜閑静ニモ候ハ、義臣傳徒然ト見読致ケルニ、サ

マサマイマノヨウニオモワレ、近ク有村ナドノ事トモ

マタツクツクトシノハレ、涕泣ニ堪カネケル事モ有ケ

レハ、

夢に似て夢にもあらぬ世の中に

なにをうつゝに頼へきやは

かわり行よはの夢もうつゝにて

あわれはかなきものにそ有ける

花見ても又なくさむるたひにたに

猶俳そしのはるゝかな

見ては猶聞もかなしきよの中に

おもふこゝろのうらめしきかな

絶へすのみ語りしむかししのはれて

涙くみせぬひまなかりけり

十三日 晴

八ツ後岡部氏所へ差越、彼是ノ事モ有之、茶店ノコト

クオモムキ、暮前ニ帰ヌ、

十四日 晴

大野参候段御留守居方ヨリ参、八ツ後ヨリ泉岳寺へ参

詣、夫ヨリ大圓寺へ参候(東京都港区 現在杉並区にあり)テ小出氏へ差越候得共、故障

故逢事不叶、帰掛ニ西向田中所へ差越、太郎ノ趣モ承

り、日下氏へ鳥渡赴候中ニ暮ニモナリ候得ハ、右ノ仁

八帰リヌ、又々汾陽氏へ参様承り、田中モ差越居候故

参り、夫ヨリ太郎殿同道ニテ帰ヌ、今晚義臣傳読方企

置、(宗達)寺師氏ヲ始メ外ニ兩人モ参り、読方トモイタシ候、

面白事共ナリ、

十五日

三回忌ノヨシニ聞テ、

なか／＼に心尽しの一筋を

しのふ泪に袖を濡れける

十六日 晴

八ツ後ヨリ伊牟田同道南部邸へ差越候処、外出候テ不

逢取、日下ノ廟所へ参り、帰リニ西向へ立寄、色々ノ

馳走ニテ夜入過ニ引取、夫ヨリ椎原氏へ差越、九ツ過

ニ帰侍ル、

一昨日泉岳寺にて述懐

うちなきて涙手向ぬ大丈夫の

たまのありかをとハマしものを

また、昨日日下十三回忌の事

おもひのあまりに、

なか／＼に心つくしの一筋を

しのふ涙に袖そぬれける

きのふ廣尾辺へ歩行いたし、おもわす草庵へ立

寄、殊の外閑暇風雅の住ひとおほし侍リテ、

長閑にと春めきぬれハ鶯の

声なつかしきこゝちこそすれ

十七日 雪降

(東京都港区)高輪迄差越、帰リニ西向へ立寄、暮過ニ帰ヌ、

十八日

雪積ケレハ、(善悪) 寺師ナルカタニ書テ遣シ侍ル、

ふり積るみねの白雪踏わけて

恋しきいもにあわましものを(あわさらめやハ)

十九日

八ツ後ヨリ湯へ差越、夫ヨリ神明前(買物ノ方巻) 迎取物ニ参リ、帰

ニ西向へ立寄候テ暮前ニ引取、關山(金生) 糺殿ヨリ可参トノ

事故差越、五ツ時分ニ帰候事、

廿二日 晴

八ツ前ヨリ椎原・森岡・伊牟田同道ニテ、東郷(医師) 岱玄子

誘候テ、廣尾草庵へ出張、一興相催シサマサマ面白カ

リケレハ、

憂事も更に忘れてけふよりハ

のとけき春のまたれつる哉

日モカタフキヌレハ、暮過ニ帰ヌ、

廿三日 晴

八ツ過ヨリ致歩行、古今集・万葉カナノ本見出シ、珍

敷敢求置ヌ、帰ニ中途ニ柴田(東五郎) へ行逢、茶店へ参リ、

彼是ト承リ暮ニ帰候事、

廿四日 晴

四ツ過ヨリ椎原・内田同道ニテ廣尾へ差越、カネテ約(政風)

束ノ事モアリヌレハ、寛々談和ニ及ヒ、座興ノ趣キニ

マカセ、

敷島の大和心やますらをの

ともに嬉しきけふにも有哉

ヲシカリシ心ニモ、日モ傾キケレハ帰ヌ、西向へ立寄候

得ハ、トシノ祝トテ餅ナトノ馳走有之、暮過ニ帰ヌ、

廿五日 晴

八ツ過ヨリ西向へ差越、太郎相待候得共終ニ不被参、

貞吉参庁訴訟ノ事トモ聞侍リ、暮ニ帰候事、

廿六日

薄雪積ケレハ

見るに猶なかもつきぬこのあさけ

とふ人もなき庭のしら雪

廿七日

相藩岡部士国許へ帰候トテ請招ニマカセ、八ツ前ヨリ

用向ニ寄、西向へ立寄差越候処、伊牟田ナト外ニ兩人(益満)

参居、暫相嘶馳走ナトモ有之、夫ヨリ同道ニテ料理店

へ赴キ、暮ニ帰リ、關山氏へ差越候事、

廿八日

昼過ヨリ湯入、婦ニ西向へ參リ、太郎モ來候テ暮過ニ引取、椎原ノ所へ用向有之、立寄候テ歸候事、

廿九日

八ツ過ニ湯入、神明前辺取物ニ差越、暮ニ歸候事、

晦 日 雨天

七ツ過ヨリ三田湯ニ入、暮前ニ歸ヌ、今晚雨降事甚敷、

今年モサマサマニ暮シ侍リヌ(万延元年庚申終)

(權山資之家紀並日誌(東京大学所蔵)にて補註)

一七九 史料調査ニ関スル意見

市來四郎談話速記

吉木竹次郎 速記

(広寛)

明治二十八年八月二日午前十時一同着席、市來四郎

君臨席

市來君(四郎) 今日御話申スコトノ趣旨ハ、積年諸君トカラ尽シ、維新前後ノ史料蒐集ニ就ヒテ、今後御互注意セネハナラヌト申ス問題デゴザリマス、其問題ニ就テ取敢ヘス話ノ抛リトコロトスル書類ヲ携ヘマシタ、則此三個ノ書類デゴザリマス(此時書類ヲ示サル)、偕此三個ハ御覽ノ通、同事件デゴザリマスルガ、各精粗ハ勿論事実カ大ニ違ヒマス、文章ノ精粗、或ハ長短等

ハ素ヨリ指シテ咎ムベキコトデハゴザリマセンケレドモ、事実ノ違ヒマスルハ看過シ難キコトデゴザリマス、仍テ御互討究致シテ何レカ真、何レカ偽ト確メ置カナケレバ、御互史家ノ本分ニモ叶ヒマセヌノミナラス、後世ニ伝リ大切ナル国史編纂ノ材料トナルヘキ貴重ナルモノナルニ対シ、相済マサルコト、存ジマス、故ニ先ヅ取敢ヘス這ノ三書類ノ事柄ニ就テ、其事実ノ一端ト、私カ当時見聞モ致シマシテ記憶スル所等ヲ合セテ御話致シマシテ、三書類ノ精粗或ハ差誤遺脱、或ハ當時天下一般ノ形勢・人情等ヲモ察シテ、何レノ書カ真カ、偽カト云フコトヲ認定致シ度存ジマス、此三書類ノ外同事件ノ書類モ種々見マシタコトモゴザリマスルガ、是コソ正確ナ書類ト思フノハ寡フゴザリマス、又此書ノ事柄ハ、維新歴史上重大ナル關係アルハ無論デゴザリマスルニ因テ、正確ナル事実ヲ挙ケテ後世史家ノ材料ニ供ヘナケレハナラナイト存ジマス、就キマシテハ維新前後ノ史料ハ御互積年力ヲ尽シマシタ故、相應ニ蒐リマシタカラ、是ヨリ後蒐メ得マシタ文ケ種々ノ史料ノ誤謬遺脱ヲ補正シ、或ハ書類中諸説ノ真偽、或ハ精粗等ヲ講究鑑定シ、或ハ當時ノ形勢・人情ヲモ酌量討究

スルコトヲ努メタイト考ヘマス、則チ此三書類ニ就テ、同事件ナルニ事実ノ違ヒアリマシテハ、後世何レノ書カ真カ偽カト疑ヲ起スハ必定デゴザリマス、夫ニツイテハ当時ノ形勢・人情或ハ政略ノ奈何シモ察シナケレハナリマセント存ジマス、諸君飽マテ御見聞ノ如ク、旧幕府代ニハ上下共ニ表面・裏面ノ所為カ多々コサリマシタ、一口ニ申スト、表面ヲ塗装シテ目前ヲ繕ヒタル事柄カ寡カラヌデコサリマシタ、則チ此書面ノ届書ハ塗装ノ書デゴザリマス、萬延元年庚申三月三日井伊直弼侯カ櫻田街上ニ横死サレマシタニ就テ、有村雄助(兼武)カ自刎致シマシタ始末ヲ、江戸留守居ヨリ幕府ヘ届書デゴザリマス、倍此届書ト事実ハ大ナル相違デゴザリマス、因テ此三書ニ因テ表面ト裏面トノ差異アリシコトヲ証明致シマス、然ルニ後世ニ至リマシテハ、此届書ハ時ノ政府ニ差出シタモノダカラ、正実ノモノデアルト認メマスト、事実トハ大ナル相違デアルハ無論、後世史家ノ疑惑トナル訳デゴザリマス、這ノ大久保日記(利通)ハ、親シク有村雄助カ屠腹致スマテノ談話ヲ記シタモノデゴザリマス、私ハ関係ハシマセナンタガ、見聞致シタ事柄デゴザリマス、亦這ノ海江田信義カ口授ニテ、西

川稱ト云フ人ノ記サレタル實歴史傳ト申書ニ就テ、有村ハ海江田カ実弟デゴザリマスルニ依テ、事実ノ簡短ナルハ細話ニ忍ビザルニアリシナラントモ察セラレマス、然ルニ届書ト大久保日記及ビ實歴史傳ニ記シタル事実カ、斯クノ如ク相違ガアリマシテハ、後世何レヲ事実ノ真ナリトスルカ迷フ次第ト存ジマス、又此事ニ限ラス、同様ノ事柄ガ多々アリマスカラ、願クハ是等大切ナル事柄ハ、後世疑ヲ生ジナイ様ニ史料ノ調査ヲ尽シタイト切望致シマス、故ニ今日ハ取敢ヘス先ツ此三書ヲ携ヘマシテ、問題ニ致シマシタデゴザリマス、今後御互蒐集ノ書類ニ就ヒテ誤謬遺脱ヲ補正シ、真偽ヲ鑑定スルヲ必要ト存ジマス、私共カ取調べマスル島津家ノ史類モ、此様ナ事実ト表面ノコト、大ヒニ違タコトガ沢山アリマスルニ依リ、追々考証訂正ニ懸リテ居リマスルガ、是ハ容易ノコトデハゴザリマセヌ、一事デ數十日ヲ費シ、数百卷ノ引用書ニ涉獵シナケレハナラヌ事柄ガ多々ゴザリマス、ソウ致シテモ書類マデバハ弁識シ難キコトガアリマスカラ、兎角実歴者ニ質問シテ、初テ真偽ヲ得テ発明スルデゴザリマス、如此討究シマスルニ、書類ニハ輕淡ナル事柄モ、実歴者ノ親話ニハ

深重ナルコトモ寡カラヌデゴザリマス、故ニ書類ノミデハ真ノ事実デハナイト存ジマス、亦当時深重機密ノ事柄ハ、書面ニハ輕淡ナルカ如キモ寡カラヌデゴザリマス、或ハ機密ナル事柄ハ必ス書類ニハ丸デナク、仮令ヒアルニモ、必ス簡短或ハ隱語略詞等ヲ用ヒ、無関係ノ者ハ解得セザルモアリ、或ハ其蘊奧ヲ尽シ得サルカ如キモ往々寡カラス、或ハ機密ノ事柄ハ、假令ヘハ島津家ニハ全ク書類モナク、口碑ニモ伝ハラヌ事ガ、他家ニハ書類モアリ、伝ヘモアルト云フ様ナコトガ沢山ゴザリマス、則チ故齊彬ノ困事ニ尽力致シマシタ書類モ随分多数蒐集致シマシタガ、ソハ皆諸家様ヨリ御示シニ預リマシタノデ、島津家ニハ書類ノ控ヘモ丸デナイデゴザリマス、是全ク御互取調致ス一大利益デ、千万金ノ宝トモ云フベキデゴザリマス、今後尚ホ発見シ得ナクテハナラヌ事件モ多々頭ワレマシタ、又事柄ニ依リ当時ノ人情・形勢ト申スハ歴史上必要デゴザリマスカラ、史家ハ主トシテ採集セネハナリマセヌ、又書面ニ限ラス其実況ヲ識得センニハ、実歷者ニ質問スルヨリ外ハアリマセン、然レハ予テ御互主張致シマスル如ク、実歷者ノ世ヲ去ラサル内ニ質疑討論スルニア

ルハ多言ヲ要シマセヌ、尚一層進ンテ此事ヲ急カナケレハナラナイト存シマス、私ニモ早ヤ七十年ト申スモ一兩年ニ迫リマシタカラ、今ノ内急キタイト思ヒマス、未タ三四十年前ノコトハ見聞致シタコトモ、少シハ記憶ノコトモアリマス、亦全ク見聞シナイコトモ今ニシテ初メテ承リマシテ、成程ソウデアツタロウトカ、或ハソウデハナイダロウト云フ様ナ感シカアリマス、中ニモ形勢・人情或ハ巷説或ハ謡歌等ノ如キモ、今ニシテ成程ト感スルコトガ多々アリマス、之ヲ以テ推考シマスルニモ、実歷者ニ於テモ忘失シタコトモ、當時ノ談話ヨリシテ引起シ、ケ様デアツタト申サル、コトカ寡カラヌハ、是マテ御互実歷者ノ談話中ニモ多々アリマス、茲ヲ以テ最モ至急ヲ要シマスルハ、実歷者ニ質問ノ必要デゴザリマス、斯ノ如ク書類ノ蒐集ト、実歷者ニ質問スルトハ維新史料蒐集ノ要点デ、一日モ忽ニスベカラザルコトデゴザリマス、故ニ今日ハ取敢ヘス此三書ニ抛リテ、今後御互取調ノ方針ヲ一層擴張セムコトヲ冀望スルノデゴザリマス、

寺師君(宗徳) 此書ハ諸君御承知之通、有村雄助、同次(兼清)左衛門ノ兄弟カ、実兄海江田信義ノ口授ニ依リ、西川

稱ト申ス人ノ著ハサレマシタ實歴史傳デゴザリマス、
此中ニ有村雄助カ自衄ノ事実丈ケヲ朗読シマス、

前文略シマスル、是ヨリ先キ浪士等相議シテ曰ク、

計画既ニ定マルト雖モ、奸ヲ除ヒテ其事由ヲ朝廷ニ

奏セズンバ事務局ヲ了セサル者アリ、夫レ金子孫次郎

ハ我党ノ年長者タルヲ以テ、佐藤鐵三郎ヲ伴フテ宜

ク上京奏聞ノ勞ヲ執ルヘシ、而シテ之カ奏聞ヲ為サ

ンニハ、必ス近衛公ノ斡旋ヲ煩ハサズンハ不可ナリ、

然ルニ公ハ元ヨリ島津家ノ縁故浅カラサルヲ以テ、

幸ニ有村兄弟ノ内一人金子ト共ニ是勞ニ当ルニ於テ

ハ、百事頗ル便宜ナリト、有村兄弟曰ク、余輩固ヨリ

兄弟分離スルヲ好マサルノミナラス、斬奸ノ現場ニ

会セサルカ如キハ、最モ余輩ノ素望ニ違フ所ナリ、衆

皆曰ク、計画既ニ決シテ今日ニ至レリ、斬奸甚タ難カ

ラズ、只奏聞ノ一事ニ至リテハ、恐クハ無難ヲ期シ難

ク、責任却テ輕カラサルナリ、是ヲ以テ衆皆之ヲ足

下兄弟ノ内ニ倚囑ス、冀クハ復タ拒ム勿レト、乃チ

雄助ヲ指選ス、蓋シ兄ノ故ヲ以テナリ、雄助モ亦拒

ムヘカラサルヲ了シ、終ニ之ヲ許諾セリ、然シテ三

月三日事ヲ挙クルニ及ンデヤ、雄助ハ金子、佐藤ノ

二人ト品川駅ニ会シ、黎明ヨリ密カニ斥候ヲ派シテ
事ノ成否ヲ伺ハシメ、其全ク成ルヲ認め、即時ニ西

上ノ途ニ就ケリ、是時途上常ニ佐藤ヲシテ槍ヲ担ハ

シム、蓋シ當時ノ俗タル槍ヲ持スルノ士ハ、箱根・

新井等ノ関門ニ抵ル毎ニ、容易ニ通過スルヲ得ルニ

由ルナリ、三士ハ昼夜兼行シテ石部駅(石部州)デハコ

サリマセス、四日市ナルコトハ後ニ御話申シマスニ達セ

シカ、金子太タ疲労ノ状アリテ進行頗ル困タリ、

乃チ雄助ニ謂テ曰ク、京師ニ入りテ志ヲ遂クハ正ニ

明日ニ在リ、庶幾クハ是駅ニ一宿シテ、疲労ヲ養フ

モ亦可ナラン歟ト、雄助モ亦金子ノ情ヲ憐レミテ之

ヲ許セリ、而シテ三士共ニ熟睡ニ落ルヤ、何ソ料ヲ

忽チ薩邸ノ追捕ニ罹ラントハ、是時三士各々切齒

シ且ツ呼テ曰ク、我京師ニ抵リテ事ヲ遂クルハ僅カ

ニ明日ニ在リ、明日果シテ事ヲ遂ケナハ、死シテ悔

ナキヲ決センナリ、今僅カニ一夕ニシテ事皆徒設ニ

属ス、豈遺憾ニ勝フヘケンヤト、而シテ雄助ハ直チ

ニ藩地ニ護送セラレ、着藩ノ即夜斥命ニ依リテ自屠

シ、金子及ヒ佐藤ハ幕吏ノ手ニ交付セラレキ、是ヨ

リ先キ雄助品川ヲ發スルノ時、一价ニ賃シテ書ヲ薩

邸ニ投ス、其意ニ曰ク、這回意志ヲ陳セスシテ邸ヲ
辭去スル所以ノ者、一止ムヲ得サルノ事情ニ遭遇
セシニ由ルナリ、然レトモ敢テ主君ニ背クノ意ニ非
ス、是レ邦家ノ為メニナサント欲スル者アレハナリ、
他日必ス僕カ微意ノ在ル所ヲ知ルヘキ者アラン、庶
幾クハ寛暇セヨ云々と、顧フニ薩邸ヨリ追捕ヲ發セ
シモノ、蓋シ是書ニ依リテ、始メテ雄助モ亦一挙ニ
同盟シアルヲ察知セシニ由ルトソ云々、

斯様記シテゴザリマス、此レカラ大久保利通カ日記ヲ
読ミマス、

一 三月二十三日ノ記ニ曰、田中直之進罷下候後、去ル

二月十九日、關鐵之助ト申者江戸表へ出府、勅書

差出候一件ハ、水戸之奸物側用人久木直次郎・桑原

何某兩人ニテ、是非 勅書差出候方可然申奉候故、

彼藩有志之者共三四十人申談、去ル二月十四日ニ久

木直次郎カ罷下り候ヲ、中途ニ待伏討果候、依之同

十八日之朝彼藩評定所ヨリ關鐵之助・金子孫次郎・

高橋多一郎・野村彝之助・矢野長九郎・住江虎之助
六人エ御用被申渡候処、矢野・住江兩人而已罷出、
外人數ノ儀ハ追々江戸へ出、或ハ潜居ノ由、

（久木・桑原ヲ云乎）
此条両姦罷下り候ヲ中途ニ待伏討取候由、警固三
百人位有之候得共、有志五十人ニテ一人モ不損仕
濟シ候由、凡テ高橋計ヒト被聞候（市広日鈴木大日
記及ヒ桜田始末参考）

一 關鐵之助儀、去ル二月十九日江戸へ着、同廿日ニ有
村へ致面会、前件ノ趣巨細ニ雄助承届、是非近々決
挙可致ト之趣ニ御座候由、

一 去ル二月廿五日金子孫次郎江戸へ出府、同廿六日之
朝雄助御長屋へ参り、江戸中幕府ヨリ探索弥嚴密ニ
付、何卒雄助御長屋へ潜居之儀ヲ無勘及相談候ニ付、
雄助ニモ是迄天下之事及示談、殊ニ有志ノ情義難默
止御長家ニ潜置為致候由、

一 三月二日ニ野村彝之助儀江戸へ出府、此者ハ奸賊ヲ
討取候上四方有志之諸藩へ布告、江戸ノ所置ヲ付候
賦ニ御座候、尤布告之文面モ持居候故相待居候由、
彼表弥切迫ニ付、同月三日ニ井伊掃部頭カ登城ヲ待
伏可討取致決策候段、金子孫次郎ヨリ雄助へ引合候
由、尤御国元弥義応相違無之哉之旨分テ承り、当時
先君遺志相統勤 王之志有之、上下無相違段相答候
処、別テ敏ヒ弥決心ノ由、

一 金子儀ハ 京師へ罷登、右之形行ヲ奉達 叔聞度、

左候テ 勅諭ヲ申受、四方有志之諸藩へ告ケ、奉守護

天朝度、尤御国元(薩州)人数モ最早 京師へ出張之筈ニ付、

右エ示合、幕府跡之処置以此奉 皇室御興復之処相

謀度、有村へ是非致同行呉候様承候ニ付、何分斬奸

ノ主意一凶ニ思込候儀故、此場ヲ迎シ(速力)候義、不本意

ニ存シ相断候得共、跡之処大事ニ付、是非其通致納

得呉候様、一同ヨリ無抛承不得止同意イタシ候由、

三月二日ノ晚有村次左衛門・佐藤武兵衛・黒澤忠三(兼徳)

郎・大關和七郎・廣岡子之太郎・山口辰之助・森五(直)

郎・杉山彌一郎・蓮田市五郎・齋藤監物・鯉淵要(兼徳)

人・廣木松之助・稲田重蔵・増子金八・關鐵之助・

海後崎之助右之人数愛宕山へ屯シ、同三日井伊掃部(經徳之介宗親)

頭カ登城ヲ待伏討取候決策ニテ御座候由、雄助義ハ(水戸)

為ニ物見ノ者兩人程差出置候由、然処無程右物見之

者馳参リ、只今櫻田御門外ニテ掃部頭ヲ討取り、彼

方屋敷之者モ聞付ケ馳付ケ相サ、候得共、人数丈

ケハ悉ク討取、水戸人数ノ内ニ三人程手負有之候由、

尤掃部頭カ首ヲ持越候義難叶時宜候得ハ、主意巨細

相認書面結付置賦候得共、首尾如何様共不相分、然ル

ニ印ハ見事ニ討取、凱陣ヲ唱へ引取候儀無相違段承

置、早速三人打立候由、(居乎) (金子、有村、佐藤三人ヲ云之)

一三鳥駅ヲ過候節、掃部頭家来之者四人早駕籠ニテ罷

登リ、兩人ハ国元へ罷越、兩人ハ京師へ罷登リ候賦

ニ御座候由、雄助慥ニ承届候 (変事注進ナラン、四日

五日頃ナラン) (三重県)

一同十一日晚、四日市ニ致一宿(市広日、海江田信義カ史

歴史伝ニハ石部駅ト記セリ、世ニ伝フル所多クハ四日市ト

ス) 寝入居候処、夜九ツ時分ニテモ候哉、肝煎坂口

勇右衛門外ニ足輕六人参リ、有村初金子・佐藤之兩

人へモ繩ヲカケ、相捕へ候ニ付、有村ヨリ何様ノ訳ニ

テ詞ヲモ不掛無体ニ繩ヲ掛ケ候哉ト申候処、ケ様騒

動ニ乘シ御屋敷ヲ出去リ候ニ付、万一幕府ノ手ニ被

捕候テハ不相濟候ニ付、私共へ差越無事御帰国ノ様

可差下旨、承知仕候ニ付、右次第ニ相及候段承リ、

然ラハ繩ヲ懸候義、何様ノ訳ニ候哉ト申候処、混雜

ニ紛レ此通ニ及候段申候付、足輕共之籠忽カ、御手

前ノ下知不行届ノ訳カト申候処、全ク私ノ行届カサ

ル処ト申候、仍テ雄助陳述イタシ候ニハ、御屋敷ニ

於テモ乍憚天下ノ形勢ニ暗キ故如此ニ及候半、拙者
杯義主意ケ様ノニテ、天下之大事奏達ノ為上京ノ
訳ニ候間、是非繩ヲ解候様申諭候処、坂口低頭シ無
詞、再三申候テモ無益ニ候故、拙者義ニ於テハ兎モ
角モ候得共、外兩人へ恥辱ヲ掛候義難心得、不容易
大義ノ御方ニ候間、是丈ニテモ早々縛ヲ解候様申入
候、一存ニテ難決、汾陽次郎右衛門殿石薬師へ被罷
居候ニ付、彼方へ相同上差図次第可致トノ事候由、
左様ナラハ金子・佐藤兩人へ是非面会致度候間、暫
時繩ヲ解候様申候処、面会丈ハ致承知候段坂口ヨリ
承、夫ヨリ坂口義ハ何共不申、石薬師之様差越候、
左候テ面会丈之処不苦ト足輕共ヨリ承乍、双方繩付
ノ俣致面会候処、金子申候ハ誠ニ残念至極無此上恥
辱ニ逢候、最早致方無之候ニ付、舌デモ喰ヒ切り相
果ルト申候ニ付、雄助申候ハケ様ニ御恥辱ヲ奉懸候
義何共言語モ無之、御決心之程御尤候得共、輕卒之者
共全ク子細モ不存、無止ニ此始末ニ及候義ニ候間、
其故ヲ以テ死シ候テハ、近頃遺恨千万ニ御座候、命
ノ限り是非上京主意ヲ果度候間、暫ク恥ヲ御忍被成
度ト頻ニ死ヲ止メ候ニ付、御尤ノ事ト金子モ其意ニ

同シ、何分ニモ坂口へ可追付ト差急候処、土山(滋賀)駅ニ
テ坂口へ追付、猶亦金子・佐藤へ繩ヲカケ置ク可キ
訳無之、及再応有村ヨリ坂口へ理ヲ尽シ申諭候処、
漸ク繩ヲ解候由(市広日當時一般縛シタルヲ不当ト論シ
タリ)

一同十二日ニ伏見迄差越候ニ付、雄助主意是非汾陽へ
面会大義ヲ説諭シ、如何様共シテ難ヲ遁レ、奏達ノ
事ヲ謀度存候間、面会ノ義坂口へ相談イタシ候処、
坂口申候ハ、汾陽ハ最早大坂へ罷下候トノ事ニ御座
候由、尤伏見御仮屋守有川藤左衛門へ汾陽ヨリ申置
候由ニテ、坂口ヨリ有村へ達候訳ハ、早々大坂ノ様
罷下候様ニトノ事候由、有村ニモ大ニ力ヲ落シ、左
様候ハ、有川へ致面会度旨申候得共是以不相調、何
分早々発足ヲ進メ候ニ付、有村ヨリ坂口へ申候ハ是
迄天下之大事ヲ謀リ致同行、金子・佐藤ノ安堵ヲ不
見届候テハ一人難罷下段申候、左様候得ハ致方無之、
万一幕府ヨリ手ヲ付候得ハ、御身ハ夫切りト相心得
候様坂口ヨリ承候ニ付、其義ハ固ヨリ覚悟之前ニ候
得ハ、少シモ不辭段申切、翌朝十三日金子ヨリ申候
ハ、一ト先ツ潜居度候ニ付、同行ハ出来申間敷哉ト

承候ニ付、有村ヨリ坂口へ其段及相談候処、坂口ヨリ京都御留守居方へ申出候処、御国元迄ハ難相成候得共、中途迄ハ差支有之間敷候ニ付、可致同行トノ事候段坂口ヨリ返答承候由、尤金子・佐藤一所ニ大坂へ下候テハ、万一幕ノ手ニ掛候得ハ、水戸浪人ヲ此御方ヨリ御抱之訳ニモ相当リ、以後御難題可相成ニ付、少シ引分レ前後ニ罷下可然トノ事ニテ、同日ノ七ツ時分有村ハ伏見ヨリ大坂へ下候処、翌朝坂口へ京師御留守居方ヨリ問合参リ、金子義ハ有村出立後ニ幕府ヨリ手ヲ廻シ、伏見御仮屋ニ於テモ却テ嫌疑ヲ受ケ、兎角致方無之時宜ニテ、水戸ノ御屋敷へ引合候都合ニ付、有村義ハ早々大坂出立イタシ候様申来候由、尤汾陽義ハ最早大坂出立相成候ト申事ノ由、雄助義都テ計策ニ落チ候義残念ニ存候得共、無是非次第ニテ、且帰国之處夢々非本意候得共、君公飛久、忠義公御名御発駕之由慥ニ承候ニ付、御中途迄ハ是非生ヲ忍ヒ形行遂言上、速ニ人数御繰出御奉護相成候様相謀度決心イタシ候、依之七ツ時分大坂致出帆候由、船中ニテ初テ縛ヲ解キ候由(市広日、汾陽等カ所為ノ不当ナルヲ論難シ、殊ニ有志連中ノ憤懣最モ甚シカリキ)

一同十九日小倉着、二十日晚瀬高(松崎ノ郷)へ太行申出候処、坂口ヨリ御家老座書役岩山八郎太へ形行申出候處、八郎太ヨリ相達候ハ、誰ニテモ逢義不可然事候間、下着之上巨細申出候方可然存候ニ付、其段有村へ可相達旨、坂口致承知候旨達候由、然共奈良原御供ニテ有村通行之段承リ、則面会是非主意相達度、奈良原ヨリ兒・谷・岸三士へ形行及談合候處、三士面会(兒玉雄一郎(村妻之助)岸良珍一郎)次第承候上可及言上トノ事ニテ、奈良原同道ニテ差越筋ニテ候處、是非押し、岩山氏ヨリ屹度承知之事候ニ付、一ト先ツ相伺候間相待呉候様、絶テ申事ニテ相扣居候、然処坂口罷帰奈良原へ岩山ヨリ御用談有之トノ事ニテ罷出候處、段々伺ヒ掛候趣有之、且有村余人へ面会ノ義不相成候ニ付、委細ノ主意奈良原承届、取次ヲ以相達候様可致トノ事故、不得止奈良原ヨリ三士へ巨細形行申演候處、最早及深更候ニ付、明朝早目可達 御聴トノ事候由、雄助義御国元へ変事一左右次第人数御差出之御治定相成候ニ付、何分早目駈下リ、形行相通シ候方可然トノ段承候ニ付、何ク迄モ主意ヲ果シ度所存ニテ、夜中早々発足イタシ、其俣ニ御国元へ罷下候、

一右之趣於水上委細承り候(水上下ハ地名デアリマス、鹿兒島城ヨリ西ノ方半里程デアリマス) (大久保ハ有村ヨリ親シク聞ク)

所ナリ、三月廿三日、然共坂口初メ輕卒共付添居候(定規)

二付、大抵九ツ時分引取、野生ニハ右之趣意寸時モ(夜)

早相達度、新納(番頭兼軍役奉行)へ差越、得ト形行演説イタシ候処、

委細聞届候ニ付、早速明日ハ左州(家老、島津左衛門)へ突掛ケ候トノ事、(備前)

一大抵八ツ過有村方へ差越候処、親類御届之者共不罷(夜中)

帰、無心元存シ下会所迄差越候処、只今親類承知ニ

テ罷歸候段承り、直様有村方へ差越候処案内ノ敵命(下町ニ在リ)

下り、最初本田彌右衛門・梁瀬源之進宅へ罷越候処、(親類旧名、有村親類ナリ)

大切ノ御用向御一人へハ難相達候ニ付、只今親類兩

人へ御用申渡候間、会所之方へ罷出候処、兒玉喜藤(雄一郎)

太・境田善助御用ニ候へ共、病氣ニ付名代兒玉喜藤(勇之助)

太二男罷出候ニ付、兩人へ御裁許掛土師吉兵衛ヨリ

相達候趣ハ、此節有村雄助義、於關東表一挙之義主意

ヲ果シ候義ニ付テハ、潔キ次第ニテ、对御国家不忠ト

申訳合ニハ不被思召候得共、不容易御国難ヲ醸シ、

既ニ幕府之追手モ踏入候時宜彼是難黙止、自ラ当人

ニハ最初ヨリ決心ノ苦候ニ付、乍不憚モ致切腹御断

申上候様、左候テ着、直ニ自尽之処、何ツ迄モ無相

違相見得候様無之候テハ不相濟候ニ付、氣ノ毒之義

二候得共、介錯杯之習モ有之事候得共、此節雄助義

ニ付テハ、決テ左様之義無之様、乍併自身夫丈之処不

相叶、無抛手ヲ添候義ハ何共我々共ヨリ難申候ニ付、

能々親類共右之趣相合候様ニトノ事ニ候由、

一右之次第同盟中一同承知、案内之仕合ニテ、中々於(大久保等ノ一党)

情義難忍候処ニ無之、一同必死ヲ決定シ死ヲ共ニシ

テ可奉歎願種々及議論候内、短夜之義既ニ鶏鳴ニ及

ヒ、皆々進退究り候次第、乍併於是如何様噴願仕候

テモ、彼是上ノ勢推察致候ニ、迎モ御取用有之処六

ヶ敷、尤表向之御決定監察前之処置ニ相成候上ハ、兎

角延引スル内返テ催促ニモ預り候義必定、一同噴願

之処モ御取用ナキ而已ナラス、犯上之名ヲ以テ御処

置ニ及候義モ顯然タル訳ニテ、最初ヨリ一命ハ決定

ノ事ニテ不及論候得ハ、既ニ大事眼前ニ差掛候ニ、(市立日京師御警衛ヲ云)

無故事ヲ破り候テハ、輕重ヲ失ヒ候義ハ勿論、雄助

本意ニモ不相叶訳ニ可有之候間、兎角於是ハ命ヲ奉

シ跡之主意ヲ受ケ継キ、万死ヲ以テ尽候処肝要ナル

ヘシト、不得已致決定候、於本人ハ初メ帰國ノ事サ

ヘモ背本意候次第ニ候得ハ、前条ノ主意ヲ以テ無抛

罷下り候訳、依テ帰着ノ上、直ニ兄武次(信義旧名)へ心附(告力)ヲ受ケ

候趣ハ、此節罷下り候儀、(雄助ノ言) 夢々私之本意ニ無之候へ

共不得止候、則人数御差出相成、右へ相加候得ハ大幸ニ候得共、万々一御延引ニモ相成候得ハ、私ニハ

余人ト相變リ、可存命訳無之候間、自殺イタシ候決定之趣潜ニ相嘶シ、武次ヨリ篤ト申諭趣有之タル由

候得共、表向承知之形ニテ心伏之体ニ無之由、夫故右之嚴命ヲ蒙リ泰然トシテ申述候ハ、固ヨリ覚悟ノ

事ニテ、於私ハ更ニ安心ノ訳ニ候、此上ハ跡之処此機ヲ以人数御差出相成主意相達候様云々相託置、改

服シテ東方ヲ拜シ、(原莊是京師ヲ遙拜ノ意ナルヘシ) 父祖ノ廟ニ拝礼シ、盟中一同へ長別ヲ告ケ、從容不迫トシテ及臨終候、

行年二十嗚呼天平命乎一同愁傷憤激不可言、
斯様ゴザリマス、

近世雜録トデモ申シマスカ、(マ) 最ウ一ツノ書ヲ讀ミマス、

(島津茂久、薩州藩主) 松平修理大夫家来差出ス書付

修理大夫家来有村雄助事、於四日市駅召捕、国元へ差下候処、右ハ御用有之者ニ候間、詰役人差出早々呼寄候様、三月十二日伏見奉行所ヨリ彼地詰役人之者へ御達有之、則其通取計候処、大坂表ヨリ申越其段

(召捕ヘ国元ヘ差下シ云々) ハ、先達テ御届申上置候通御座候ニ付、右ニ付テハ

大坂両町奉行所ヨリモ、御組之衆海陸二手出役相成候ニ付、雄助義国元へ到着致候ハ、早々差出候様

大坂表ヨリ申越候処、同廿三日国許へ相達、城下ヨリモ目付役兩人并下役共多人數相附、急速差出候処、

雄助事到下之中途筑後高瀬宿辺ニテ、夜中透ヲ計ヒ遁去リ、領内薩摩国出水郷ノ内崎淵村山中ニテ致自

殺候処ヲ見当候ニ付、死骸へ兩人警固付置、右兩御組之衆へ、肥後於佐敷駅事実及引合、去月三日平山熊

太郎殿・渡邊織之助殿・佐川千代太郎殿・嘉木力之助殿御見置相濟、死骸之儀ハ何分御差図迄之間仮埋

申付、嚴重ニ格護為致置候段、於大坂・伏見夫々及御届候旨此節申越候、此段御届申上候、以上、

松平修理大夫家来
四月十八日
(江戸留守居) 西 筑右衛門

市来君 御聞ノ如ク、此三書類ハ各異ナルデゴザリマス、中ニモ藩吏ノ届書ニハ如斯デゴザリマス、大久保日記

トハ雲泥ノ違ヒデハコサリマセヌカ、幕府ノ帳簿ニハ此届書ヲ事実トシ、公簿ニ記載シテアリマス、若シ此届書ヲ以テ、事実トシテ後年歴史編纂ノ材料トスルア

ラハ、當時政府ノ公書デアルカラ、是ヲ事実トスルカモ知レマセヌ、然ルトキハ事実ハ全ク抹殺セラル、デアロウト存シマス、此西筑右衛門ト申スハ、當時江戸邸留守職デアリマス、留守役カ時ノ政府ヘ届書タカラ、後世ニナリテハ是ヲ真正ト認メ、大久保日記ナトニ記シタルハ偽書トカ何トカ云フニ至ルハ必定デアリマセウ、又此外ニモ這ノ事ヲ記シタ紀事・日乗ノ類多々アリマスルヲ私モ読マシタガ、事実ナリト思フ者ハ此大久保日記ニ止リマス、實歴史傳ハ簡短ニシテ事実ヲ尽サス、一ト通り題目ノミヲ記シタト申スヘキノミナラス、捕縛サレタ地名四日市(三重県)ヲ、石薬師(同上)ト記シテアリマス、然シ地名ノ誤リ位ハ深ク咎メセヌ、海江田ハ骨肉ノ弟カ今ニ自衄スト云暫時ノ談話デコサリマスカラ、悲歎ノ情況今更想像スルニ、聞キ誤リノアルモ無理ナラヌデコサリマス、又口授ノ密且精シカラサルモ無理ナラヌ訳デコサリマス、大久保日記ノ如ク、着魔ノ途中水上ト申ス所ニ於テ親シク談話致シタ事実デコサリマス、其時マデハ大久保ハ再ヒ細談ニ及ハントカ、或ハ藩庁カ至急自衄ヲ命スルニハ至ルマシトノ思考デ、新納刑部(久徳)ヲシテ、島津左衛門ト申ス家老ニ謂ハシムル手

順モ立マシタト見ヘマス、然ルニ豈ニ凶ラン、即夜屠腹、加之介錯セス自衄セヨトマテ内諭致シタデコサリマス、如斯ノ事実デコサリマスルニ、三書類各事蹟カ違ヒマシテハ、後世テハドチラカ事実カト疑惑ヲ起スハ必定ト考ヘマス、又此事ハ有村カ自衄ノ一事デコサリマスケレトモ、井伊殿カ横死セラレタルハ、幕府衰亡ノ発端ト申スヘキ一大事件デコサリマスルニ依テ、此連帶ノ事柄ハ一些事ト雖モ誤謬遺脱ノナカラムヲ要シマス、中ニモ島津家ノ史伝ニハ一大事件テコサリマスル、亦後世国史ヲ編纂スルニハ必ス記載スルノ要点ト存シマス、私ニモ當時ハ鹿兒島ニ居マシテ、諸事見聞モ致シタコトヲ今ニ少シハ記憶シテ居リマス、藩主カ參府ノ途中ヨリ病氣ト称ヘマシテ、引返シ帰国致サレマシタ故、非常ノコトデコサリマシタカラ、國中一般鬻眉致シテ其事実ヲ聞知セムト、貴賤トモ耳目ヲ注キマシタ、加之這ノ企凶ハ安政戊午ノ疑獄起リタル頃ヨリ、鹿兒島ニ於テハ、稍公然秘密ト云フ程デコサリマシタ、私ニモ企凶ノ概略ハ、大山綱良其他有志連中ヨリ密ニ聞知シテ居リマシタ、或ハ當時ノ国老島津登久包ト申シタ人ハ懇交デコサリマシテ、前比ヨリ大久

保等一派ノ輩ガ、京都御警衛出兵或ハ三奸鋤退ナトノ説モ、藩庁ニ於テ心痛セシコトモ聞及ンテ居リマシタ、或ハ当時藩庁ハ江戸・京攝等ノ形勢探訪モ怠リナク其報告ヲモ密聞シ、或ハ藩庁ニ於テ評議等ノ一端ヲモ窃ニ承リ、或ハ同人カ意見トシテ庁議ニ呈出シマシタ事ニモ、密ニ容喙シタ程ノコトモ多々アリマシタカラ、庁議ノ奈何ハ日々夜々ニ洩レ聞タテコサリマス、有村ニ自唄ヲ命スル庁議モ前ニ洩聞シマシタカ、其庁議ニ幕府ノ捕吏カ国内ニ蹈入ルコトニナルト、（大久保等ノ党ヲ申シマス）壯年ノ輩カドンナコトヲ仕出スカモ知レナイカラ、（内カ）困入ニ這入レナイ様ニセナクテハナラナイト云フコトヨリ、自唄サセテ介錯ナトセナイ様ニト云フコトヲモ、庁議ニ決シタト云フコトヲモ密ニ洩レ聞ヒタ程ノコトデゴサリマシタ、又自唄云々ヲ刑事掛ノ目附役カ論達致シマシタコトハ、大久保日記通りデコサリマス、死屍検査ヲ受ケルコトモ前以テ決議ニナリタコトダソウデス、然シテ自唄後数日ニシテ死屍ヲ発掘シテ、肥後国境出水郷（市広百、路程二十五里）ノ関外マテ担キ行キ、（市広凡十餘日カト覚ユ）届書ノ如ク検査ヲ受ケタソウデス、幕吏ヘハ賄賂ヲ与ヘ、異議ナク検屍ヲ了ヘタソウテス、其庁議予定ト申スハ、有村カ自唄ノ前頃坂口勇右衛

門カ、何日ニハ着スト云フコトヲ報告シマシタカラ、藩庁ニ於テハ予メ待設ケ、着シタラケ様ニ処分セヨト決定シタコトデ、丁度大久保日記ノ通、裁許掛目付土師吉兵衛ナド申モノガ、有村カ親類ヲ呼ヒ出シテ自唄云々ヲ達シマシタソウデス、斯ク自唄云々ノ達ガ、則チ幕吏ノ検屍ヲ受ケヨウト予メ議定シタ訳デ、則此届書ノ如ク、肥後国境関門外デ死屍発見シタト云フコトニ取繕ヒマシタデゴザリマス、其実ハ前ニ御話申シタ通、鹿兒島ノ自宅ニ於テ三月廿三日ノ夜自唄致シタデコサリマス、私モ其時分ハ同村内ニテ、有村ノ宅地ヨリ三四丁程モ隔リタル所ニ居住シテ居マシタカラ、翌朝屠腹シタト云コトヲ聞キマシタ、臨終モ大久保日記ノ如ク、寔ニ落付ヒテ呉々モ後事ヲ朋友等ニ托シテ立派ニ自唄シタソウデス、ソコデ幕吏カ不日国境内ニ入り来ルト云フコトデスカラ、死屍ハ有村カ墓地ニ仮り埋ヲ命シマシテ、幕吏カ肥後地ニ来ルヲ俟チ、死屍ヲ担キ行ヒテ国境ニ持チ行キ、届書ノ如ク検査ヲ受ケタソウデス、鹿兒島ヨリ二十五里ノ所ニ担キ行クコトデ、随分手数ノ懸ツタコトデコサリマス、幕吏カ検屍ニ就テモ、寡カラヌ賄賂ヲ与ヘマシタ故カ、異儀ナク検査

ヲ了シタソウデス、其賄賂ノ品物モ私ハ右島津ヨリ聞
キマシタ、金・銀及ヒ国産反布ノ類数多デゴザリマス、
幕吏ハ大ニ得付キタソウデス、御承知ノ通幕吏ハ上下
共ニ賄賂苞直ハ公然ト受ケルモノデ、役恩ナト、唱ヘ
タ程ノコトデゴザリマシタ、各藩ニ於テモ稍御同様ニ
承ルコトデゴザリマシタ、如斯ノ事實ニシテ、斯届書
ハ全ク取繕デゴザリマス、然ルニ此届書ハ過日旧幕府
ノ帳簿中ニ発明イタシマシテ、其事実トハ雲泥ノ相違
デコサリマスカラ、後世ニハ届書ノ公文ナルヲ以テ事
実ト認メルニ於テハ、大久保日記・實歴史傳等ノ書ハ
偽記ダトカ、作説トカ申シテ、事実ハ丸デ消滅スルカ、
將タ届書ガ偽書タトカ、否ヤ真実ナリトカ、何レカ史家
ノ疑議ニ亘ルニ違ヒナイト考ヘマス、這事ハ後世指シ
テ龜鑑トモナルベキコトデハナイカラ、真偽ノ間ニ打
チ置ヒテモ宜シヒトハ申サレマセヌ、若今日ニ確メス、
違ヒノ俛ニ投捨テハ、維新前後内外多端ノ事實ニ於テ
ハ、後世ノ龜鑑トスヘキ歴史ノ価値ヲ失フノミナラス、
御互心力ヲ尽シテ取調ニ從事シマスル史談会ノ名義ニ
モ関係ヲ及ボシ、或ハ史談会員ハ種々ノ書類ヲ蒐集シ
タルノミニテ、真偽ノ弁識ヲモナサス、筆耕者見タ様

ナ会員ダトカ、或ハ書塵ニ等シキモノダトカ云フ譏り
ハ免レマスमित存ジマス、初メニ御話致シタ通、尚
ホ一層勉勵イタシマシテ、書類蒐集ハ無論、其書類ノ
誤謬遺脱ヲ正補シ、或ハ事実ノ真偽ヲ討究シ、或ハ當
時ノ形勢人情ヲモ酌ミ、此届書ノ如キハ、形勢如斯キ
タカラ、箇様取繕ヒタ書ヲ以テ事ヲ了シタト云フコト
ヲモ加記シテ置カナケレハ、後世ノ疑ヒヲ解クコトニ
ハナルマイカト考ヘマス、依テ是ヨリハ御互ノ責任ト
シテ、其真偽鑑定等ノ考証ヲ努メタウ存シマス、亦御
互我々旧藩主ハ、畏クモ嘉永癸丑以來国事鞅掌ノ始末
ヲ取調ヘ上申致スヘシトカ、又ハ秘密書類モ無洩呈出
スヘシ等ノ御沙汰ヲ奉セラレ、御互ニ其取調委員ヲ忝
フシ、今日ニ至ルマテ從事シテ居リマスルニ就テ、旧藩
主力責任ノ重キハ、御互我々委員ノ負担ニアル訳デコ
サリマスカラ、若シ粗漏輕忽ノ調ヲ致シテハ、其責任ニ
對シ、旧藩主力奉勅ノ重キニ對シ相濟又訊ナルノミナ
ラス、後世史家ノ惑ヲ生スルニ就テモ、輕カラヌ責ノア
ルコトデコサリマス、加之御手元ヨリ年々ノ御補助、
或ハ会席御貸渡シ等鄭重ノ御取扱ニ對シ、旁厚ク注意
シ、完全ナル史料ヲ蒐集シ、奉呈セネハ相濟ヌコトテ

コサリマス、然ルニ維新ノ偉業ハ前古未曾有ノ盛業ニ
 テ、我国史中多端繁縷ノ事柄ニテ、海外各国ノ歴史ニ
 モ関連シタル広汎ナル事蹟デアリマスカラ、一事蹟ノ
 調査ニモ数十家ニ亘リ、亦ハ直接間接脱也多数ノ人ニ関シタル
 訳デアリマスカラ、成ル丈ケ汎ク心ヲ用ヒ、洽ク手ヲ
 延シ、実蹟ヲ質疑討詢セネハ完全ナル史料ヲ調へ上ケ
 ルコトハ出来マセヌト存シマス、何分至急ヲ要シ一日
 モ忽ニスヘカラサルハ実歴者ノ存否デアリマシテ、一
 日モ後レナイ様ニセナケレハ、再ヒ得難キ史料ヲ失フ
 訳デコサリマス、是迄御互実歴者ニ就テ質疑討詢ニ因
 リテ、在来ノ書類外ニ好史料ヲ得マシタルコトハ多々
 寡カラヌデコサリマス、中ニモ島津家ニオキマシテハ
 公文書ハ素ヨリ機密ノ書類モ皆無トモ申ベキデコサリ
 マス、其皆無トナリマシタハ四回ノ焚亡ニテ尽キタデ
 アリマス、第一ニ齊彬ノ臨終ニ山田壮右衛門為正ト申ノ
 ニ目ヲ閉チタラ、江戸邸納戸蔵ニ納メ置タ文庫ト、手
 許ニ在ル一函ハ大事ナ書付入レ置タカラ、直ニ焼捨ヨ
 ト申付マシタソウデス、ソコデ無程逝キマシテ、翌日
 城内浩然亭ト申外庭ニ出テ焼キ捨マシタソウデス、此
 事ハ久光ヘモ知ラセズ、山田等カ遺言ヲ奉シテ焼キマ

シタカラ、後デ久光モ聞カレタソウデス、此事ハ私ハ
 編纂ニ就テ、安政四年ノ春先帝密宸翰ヲ賜リマシタト
 云フ伝ヘニ就テ尋ネマシタ時、久光モ遺憾ノ咄デコサ
 リマシタ、此二函中ニハ定テ機密ナ書類、御懇交ノ諸
 侯方ノ御往復書類モ種々アリタロウト考ヘマス、諸家
 様ノ内尾張・水戸・越前・宇和島・福岡其外様ニハ、
 齊彬ノ指上ケマシタ機密ノ書類御保存ニナリテ居リマ
 スカラ、夫ニ対シタル御返書ハ必ス島津家ニ伝ル訳デ
 ゴザリマスケレドモ、全ク伝ハラヌヲ以テ考ヘマスレ
 ハ、江戸又タハ国許デ焼イタ函中ニ納メアリシナラン
 ト考ヘマス、則安政二年先帝ノ御歌ニ添ヘラレマシタ
 宸翰モ伝リマセン、唯勅詠ト近衛殿ノ御詠ノミ伝ハリ
 テ居リマス、第二ニハ慶應三年十二月江戸邸ヲ庄内藩
 其他カ幕命ヲ受ケテ攻撃ノ際、家宅・倉庫ニ至ルマテ
 悉皆焼カレマシタカラ、其時分帳簿類モ同時ニ鳥有ニ
 掃シマシタソウデス、留守役杯モ行衛不明トナリマシ
 タカラ、帳簿ノ始末処テハナカリシトオモハレマス、
 京都・大坂ノ邸モ、戊辰正月ヨリノ兵乱ニ皆無ニ散逸
 シマシタ、第三ニ明治五年ノ春、故大山綱良カ県知事当
 時権参事デアリマシタ、鹿兒島人ハ旧習ガ抜ケナイト

云フ事ヨリシテ、藩庁及ヒ監察局用部屋其他ノ帳簿類
二三ノ倉庫ニ納メアリシヲ悉皆焼捨マシタ、數百年來
夥多新古ノ書類デコサリマシタ、其燒棄シマシタハ私
モ親シク見聞モイタシテ居リマス、是ヲ一掃ノ時ト申
スヘキデゴサリマス、第四ニハ明治十年西郷等擾乱ノ
際、旧藩主邸内ニ在ル倉庫（家宅焼ケル）ノ類兵火ノ為ニ悉皆燒亡シ
マシタ、此時旧藩主カ手許ニアリシ書籍書類モ悉皆燒
ケマシタ、其時鹿兒島城下ハ燒ケ野ノ原トナリマシテ、
旧藩士其外ノ家宅・倉庫モ燒失シマシタカラ、書類等
モ皆燒亡或ハ散逸シマシタ、其時分聊カ残リマシタハ
久光ガ手許保存ノ書類ノミトモ申ベキデコサリマス、
且藩土中避乱ノ際土中ニ埋メ置ヒタトカ、携ヘテ避ケ
マシタトカ申スモアリマスケレトモ、過半以上ハ燒カ
レマシタ、私モ相應書類モアリマシタケレトモ、過半以
上燒カレマシタ、唯家族共カ少々携ヘテ避乱シマシタ
書類ノミ現在シテ、幸ニ古紙同然ノ書記類カ残リマシ
タカラ、夫ヲ史料トイタシテ居リマス、如此三四回ノ
災殃デ、史料ト申スヘキモノハ皆無トモ申スヘキデコ
サリマス、然ルニ御互書類ヲ交換調査スル事ニナリマ
シテ、第一齊彬ノ諸公ト御往復書類追々手ニ入りマシ

タノハ、誠ニ幸慶ト申スヘキデコサリマス、箇様御互
ニ取調ベ致サス、旧藩内ノミノ調査ナレハ、齊彬ノ事蹟
ノ重要ナルコトハ丸デ頭レヌテコサリマシタ、実ニ事
蹟ノ明瞭ニナリマシタノハ、島津家千載ノ初メヨリシテ、
リマス、御承知ノ通齊彬ハ海内多難ノ初メヨリシテ、
國家ノ為メ尽力致サレマシタノニ、其証跡湮滅ニ帰シ
マスルハ、当主忠義・忠濟ニ於カレマシテモ甚タ遺憾
トセラルノミナラス、孝道上欠点テコサリマス、且久
光ニ於テモ、齊彬ノ事蹟ハ遺脱ナク頭ハサムトノ志望
テコサリマシタカラ、概シテ祖先ノ勲蹟ヲ頭章スルハ、
子孫ノ本懐テコサリマス、斯様ノ訳柄デアリマスカラ、
尚以テ私共ニ於テハ、粉骨碎身調査ノ外他事ナキ次第
デコサリマス、殊ニ維新ノ大業ハ宇内各国ニ轟キタル
前代未曾有ノ盛業ナルハ無論ノ事ナレハ、國家万世ノ
後ニモ正確ナル歴史ヲ伝ヘ、海外各国ニモ汎ク知ラシ
メナケレハナリマセヌ、然ルニ現今出版書ノ如キ其事
實ノ誤謬遺脱ノ多キ、或ハ前ニ御話申タ如キ表裏相違
ノ書類杯ニ扱リテ編纂シタル史伝ハ、今日文化ノ世ニ
ハ甚タ可恥コト、存シマス、因テ猶一層御互勉勵致シ、
後日正確ナル事実ヲ調ヘ得マシテ、各家ト俱ニ奉呈イ

タシ、後世子孫ノ龜鑑ニ供センコトヲ冀望致シマス、諸君尚ホ御考案モ伺ヒタウ存シマス、

又大久保日記中ニ、京都二人數ヲ出スト云フ事ハ、鹿兒島デハ安政五年四五月比、故齊彬ノ西郷ニ密命致サレテ、其計畫ヲナシマシタ遺旨ニ依リテノ事デアリマス、齊彬カ京都警衛ノ為メ出兵ノ計画ハ、恐多クモ御讓位或ハ他所ヘ遷行ヲ促シ奉ラントスル説ニ就テ、畏クモ密勅ヲ賜リ、御依頼アリシニ起因シタル事実デアリマシテ、其計畫ハ西郷等ヲシテ有志ノ諸侯ニ密牒致サセマシタルニ、不幸ニシテ病没致サレ、此事ニ限ラズ百事俗吏ノ為ニ瓦解ニ帰シマシタルヲ、大久保等ノ有志者ハ憤慨ニ堪ヘマセン際、幕府ハ益々暴威ヲ逞フシ、中ニモ井伊殿カ大老職ニ出ラレ、間部殿ヲシテ宮堂上及ヒ庶士ノ有志者ヲ捕ヘマシタコトハ多言ニヲヨヒマセム、其時分ノ世説ニ御讓位又御遷行説一層唱ヘルニ至リマシタ、夫ヨリシテ井伊殿・安藤殿及ヒ高松侯^應ヲ三奸ト唱ヘマシタ、高松侯ハ水戸烈公ニ関シタ訳デ、水戸ヘ賜リマシタ勅書返還ノ事件ヲ初メ、水戸有志者ノ種々論スル所デゴザリマシタ、又鹿兒島ニオイテ高松侯ヲ惡ムノ源因ハ、水戸ノ天狗党中ト親交イタシ

テ居リマスカラ、夫ヨリシテ高松侯ヲ惡ミタル訳デアリマス、今日デ申スト皆一方口ヲ聞ヒテノ事カト存シマス、就テ今更考ヘマスルニ高松侯ハ幕府ト水戸トノ中間ニ立ラレテ、余程御困シノ御立場デアッタロウカト察シマスル、如何トナレハ其時分ハ幕威モ未タ衰亡ノ形勢ト云フ程ノ事ハ頭ワレナイカラ、幕命ノ嚴ナルニ対シ、水戸有志者ノ挙動ニ就テ、其中間ニ立ラレ困苦ナル御立場ナリシハ多言ヲ俟タサル訳デ、一口ニ申スト御無理ナ訳モナキニハ非サリシカトモ今ニシテ考ヘマス、然ルニ當時三奸トマテ唱ヘ、井伊・安藤ノ二侯ト比ヒ唱ヘタルノミナラズ、櫻田ノ一挙前ニハ三奸一同ニ為サントマテ、有志者中計畫ヲ為シタト見ヘマス、中ニモ鹿兒島有志者、即チ大久保等モ水戸有志士ノ言ヲノミ聞ヒテ、同シク三奸ト唱ヘテ惡ム事甚シキニ至リマシタ、私ニモ聞及ンテ居リマスノミナラス、諸書ニモ三奸ト云ヘハ、右ノ御三人ヲ申シマス次第デコサリマスカラ、史料ハ幾多ノ書類ヲ蒐メマシテモ、當時ノ形勢人情ヲ第一ニ取り、或ハ右ノ如ク片言ヲ聞ヒテ記シタモノヲ丸デ信スルカ如キ事デハ、適々心力ヲ尽シタ詮モナク、後世デハ疎漏偏見ノ譏ハ免レマセ

又、後人ノ疑惑ノ種トナルハ必定デコサリマスカラ、前ニ御話申シマシタ如ク、時勢人情ノ無形ヨリシテ、事實ノ有形ニ及ボシ、高松侯カ水戸幕府ノ中間ニ御立ナサレ、一方ノ有志者中ヨリハ悪マレ、又一方ノ結城党ト唱ヘル連中ヨリハ頼ミニイタシ、互ニ私憤トカ私情トカラ達セムトスルノ場合ニ臨マレ、実ニ困難ナル御立場カト察セラレマス、剩ヘ御宗家ニ立入ラレンノ野心アリシトマテ唱ヘタト見ヘマス、箇様ニ六ヶ敷御立場デコサリマスカラ、其間ニハ御無理ナ説モ立ラレタヲ、夫形ニ記シタ書類後世ニ伝ハリ歴史ノ材料トナリマスルト、御当主様ニオヒテ、御孝道上濟サセラレヌノミナラス、又國家ニ取リテハ其事實ヲ調査セザリシトノ譏ヲ免カレヌト思ヒマス、充分事實ノ御調査アラマホシト存ジマス、

川瀬君(教文) 其事ハ、至ツテ大切ナコトデゴザリマシテ、私ノ方デモ材料ヲ蒐メマシテ調ヘルコトニ致シマシヨウ、佐藤鐵三郎^(教寛)ハ当時関係ノモノデ、是レハ全ク金子ノ僕ニナリテ深い機密ニハタツサハラヌ様デゴザリマスガ、承レハ金子^(教孝)子等ノ縛セラレマシタハ四日市デゴザリマス、大久保サンノ日記ト私ノ方ノ書類ト参照

致セハ符合致シテ居リマス、

市來君 此レモ御藩ノ天狗組ノ説ヲ今ハ全ク正説トシテ居リマス、其中ニハ無理ナ説モアロウカト考ヘマス、大久保ハアレ丈ケ有名ナ人物デゴザリマスカラ、彼ノ日記ハ後世ノ証拠ニナリマスケレドモ、一方ノ片言ヲ採ツタノデコサリマスカラ、其コトヲ牧野君ニ御話申シマシタデアリマス、書類ハ幾ラモ集メ確カメテ、是ハ片言ダ、是ハコウダト云フ弁解説明ヲ加ヘ、史料ニ遺シマスルヲ必要ト存シマス、前ニ朗読シマシタ届書ハ、島津家ニハ伝リマセヌ、之ヲ発見シマシタハ過日旧幕府ノ帳簿中ニアリマシタ、箇様ニ諸書ニ就テ調べマスルト、手許ニハ亡失シタモノモ見出シマシテ、其事實ノ如何ンモ弁明致シ、史料ニ纏メルハ御互ノ目的デゴザリマス、島津家ハ右通度々ノ災ニ罹リマシテ、材料ニ乏フゴザリマシタケレドモ、幸御互取調ヲナシマシタニ就テ、重要ナル書類モ沢山得マシテ、今ハ數千卷蒐リマシタ、其中ニハ未タ諸家様又ハ各^(備)人ニ就テ調ヘナケレハナラヌ事柄カ沢山デゴザリマス、此三通ノ書類ノ如ク幾多ノ書類ニ抛リテ考証シ、事実ト表面装繕ノ事柄、或ハ誤謬遺脱ヲ匡校補正セネハナラヌ、

コノ事ハ寔ニ緊急デコサリマス、今目前ニ顯レタル分ニテモ、數百ヶ件モ確メネバナラヌコトガ現ニアリマス、實ニ前途甚ダ多端デコサリマス、之ヲ書類ノ俣ニシテ置キマスルト、後世ノ疑惑ハ素ヨリ、国史編成ニ當リテ大ナル障碍ト我々ノ粗漏ノ譏ハ免カレマセヌ、夫ハ扱置、重キ勅命ヲ奉シマシタ旧藩主ノ名義ニ大関係ヲ及ボシ不輕事デゴザリマス、諸君ニ於テモ御同然ノ事デコサリマシヤウ、前ニ御咄致シマシタ通り故、久光ノ申サレマシタル如ク、華族ハ廢藩後ハ国家ニ尽スヘキ當職モナケレハ、座食逸遊トモ云ワルヘキ身分ダカラ、維新前後聊カ尽シタ事実ヲ網羅シテ、国家百年ノ龜鑑ニ供セント云ハレマシタ言ハ、實ニ至當ノ言ト存シマス、諸家様ニモ御同然ノ御事ト存シマス、故ニ今後御互ニ猶一層勉勵致シテ正確ナル史料ヲ編輯シテ、奉呈セン事ヲ努メナケレハナリマセムト存シマス、

寺師君 井伊家ノ遭難ニ就テノ御届書ガ、此書ニ出テ居リマス、其レモ全ク表面虚飾デゴザリマス、則チ此通り朗讀致シマス、

今朝登城掛ケ、外櫻田松平〔親良、件繁藩主〕大隅守門前ヨリ上杉彈正〔有兼、米谷藩主〕大弼辻番所迄之間ニテ、狼藉者鉄砲打掛ケ、凡二十

人余リ拔連、駕籠目掛ケ切込候ニ付、供方之者共防戦致シ、狼藉者壱人討留、其余手疵深手等為負候ニ付、悉ク逃去申候、拙者義捕押方等指揮致候処、怪我致シ候ニ付、一ト先帰宅致シ候、尤供方初即死手負〔手負死人也〕之者別紙之通りニ御座候、此段御届申達候、以上、

三月三日

井伊掃部頭

斯様ナ届ケデゴザリマス、

川瀬君 見舞ニ一番先キニ来タハ横山主殿デ、是レハ病氣ノ訊ニセネハ後々事ニナルカラト、一番先キニ病氣ノ見舞ニ出タト云フ事デゴザリマス、マダ混雜ノ最中デゴザリマシタト申スコトデアリマス、

寺師君 其レハ横山一己ノ見識デ言ハレタコトデゴザリマセウカ、

川瀬君 横山一己ノ見識デコサリマセウ、

岡谷君〔繁実〕 彦根ノ届書ハ閣老カラ内示ガアツタト云フコトデアアル、サウスルト決シテ心配スルニ及バス、本領モ安堵デアルト云フ懇々ノ論シデアツタ様子、

佐田君〔白茅〕 水戸機リト云フ書ガアリマス、其レニ届ケラシタガ、此届ケデハイケヌト言ツテ、届直セト云ツタモノモアツタソウデス、

市來君 今日御話ハ此マデニ致シテ、尚ホ後日此様ナ書類モ沢山私共方ニモアリマスカラ、今日ノ如ク御互ニ持出シテ、其事実ト裝飾或ハ誤謬遺脱ヲ正シ、或ハ私心ヲ以テ曲筆シ、或ハ阿媚ノ文飾等ノ類ヲ匡正スル事ヲ初メンコトヲ冀望致シマス、又有村カ自衒云々屈書ノ如キハ、何等ノ事情ヲ以テ虚飾ノ届ヲナシタカト云フニ就テハ、当時藩内ノ形勢、或ハ幕府ノ事情、或ハ各藩ノ事情、或ハ一般ノ形勢等モ箇様デアルカラト云フコトヲ説明シナケレハ、後世怪ム処トナルハ必定デアラウト考ヘマス、此届書ニ就テハ、御咄シ申シタ通ノ事実デゴサリマスケレドモ、当時藩内ノ事情形勢ハ別ニ記シタモノモアリマスルニ因テ、後日御覽ニ入レルコト、シマシヨウ（一同立礼）

〔史談会速記録第三十八輯に所載〕

万延元年 (1860)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
萬延元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料
(紙数五十九枚)」の記載あり〕

目録

水戸浪士井伊直弼ノ奸曲ヲ脇坂侯ニ訴フ
 松平修理大夫家来差出候書付
 本多主膳正家来差出候書付
 幕府目付黒川左中ニ京都警固及大坂兵庫堺等ノ海岸巡視
 ヲ命ス
 琉球人召連参府伺
 松平修理大夫家来大和守宅へ差出候書付

外国人ヲ芝新堀端ニ要殺スルモノアリ

天童領主織田兵部少輔白雉ヲ幕府ニ献セントス

村上侯安積良齋へ尋問

文武奨励掛ニ特命ス

安田助左衛門日記

白石正一郎日記

吉田矩方大原三位ニ呈書

庚申轉蓬録日録 関侯之介日記

鈴木大日記鈔(マ) 本書参照

以上十五条

一八〇 水戸浪士井伊直弼ノ奸曲ヲ脇坂侯ニ訴フ

一八〇ノ一
安政七申年三月三日

謹テ脇坂侯執事ニ奉言上候、執事御儀御賢明被為在、

天下之御政道無邪御取計被遊候儀(トカ)ニ奉存候、(間脱カ)軍卒之我

々共申上候、(ハカ)モ恐入候得共、存詰候儀無腹臆別紙相認奉

入高覽候、追々御大老井伊掃部頭殿所業ヲ洞察仕候処、

權威ヲ恣ニ致シ我意不叶、忠誠厚キ人々ヲハ、御親藩

ヲ初公卿衆・大小名・御旗本ニ不限讒訴致、退隱幽閉

被仰付候様取計、就中外虜之儀ニ付テモ、(ハカ)虚喝之猛勢

ニ乘シ恐脚致シ、神州之大害ヲ醸シ、不容易事共指

許シ、御国体ヲ穢シ、乍恐奉懼

叡慮、勅意等モ奉違背候事而已ナラス、

御讓位之儀ヲ企奸曲之至リ、天下ノ大罪人ト可申奉存

候、右罪状之儀ハ委細別紙ニ認メ候故、御懇寛御賢慮

之程奉願候、扱右等之奸賊御座候テハ、此上

將軍家之御政道ヲ乱シ、夷狄之奸賊ニ被制、禍害ニ成

候儀眼前ニ有之、実ニ天下之安害ニ抱リ候儀ト奉存候

故、此度天誅誠ニ替リ候心得ニテ、誅戮仕候事ニ御座

候、毛頭 公辺へ御敵対申上候儀ニハ無之、且全ク我

々共忠憤之余ニ、天下之為ヲ存詰候テ之事ニ御座候間、

敵刑之御所置被遊候儀御恨不申上候、依テハ元主人家

誹責ヲ蒙リ候儀ハ無之様奉願上候、扱此上ハ天下之御

政事向正道ニ復シ、忠邪御弁別被遊、殊更夷狄之御取

扱ニ至リ候テハ、祖宗之御明訓御斟酌被為在、華夷内

外之余得ト御勘弁被遊、御国威ヲ落シ不申様仕度御判

談之程奉渴望候、此段罪不顧万死奉申上候、恐惶頓首、

申三月

水戸殿家来

五人

〔水戸彰考館所蔵写本、桜田義孝録下欄にて補註〕

一八〇二 御預ケ被仰付候者ヨリ申立候趣

掃部頭殿ヲ及殺害候儀ハ、国民安穩ヲ相計候事ニテ、

私共狂気乱心者抔ト思召候テハ心外之事ニ御座候、

徳川御役人御暴政之筋有之、依テ御役人ヲ奉恨候事ニ

御座候、私共申立候次第篤ト御聞取被下度奉願上候、

其条目如斯、御暴政之御廉相調書差出候、右条目御不

審之次第有之候ハ、逐一可及御答候、右条目之外旧

年鶉飼幸吉儀、古来無法之御仕置甚残念ニ存候、右等

之御仕置和漢之歴史ニモ無之、御邪政ト存罷在候旨申

立候、右条目之中一二ノ余ハ、上 天子ヲ始下万民之

困窮ヲ不救是暴政也、夷狄神奈川表ニ於テ跋扈、輕蔑

ヲ極メ剛慢ニ寡候ヲ討伐不被為在候段是暴政也、私共

申上候儀ハ、乍恐 神君様御定之御政事ニ復度事而已

希候、然ル上ハ我々如何様之罪ニ被行候テモ不苦ト被

存居候、

徳川家御政事ニ付、主人前中納言殿是迄数度建白モ致

候得共、更ニ御用無之、然ル処外夷我俣ヲ極メ、御

国体ヲ乱シ候儀ト相聞、且水戸表ニテ農兵共徒党致劍

撃之沙汰ニ及候モ、全御上ノ御政事不宜故之義ニ御座

候、何卒従是ハ御改革被為在度希候、右等之次第柄故、

卑賤之私共如何様書取申度候トモ、御用ヒ無之ハ必定之事ニ付、不得止事彦根候奉殺害候、私共身命抛テ御政事向之義申上候間、得卜御思慮被下度奉希上候、
一私共申合三十八人之内、十六人ハ彦根候へ差向、十六人ハ高松侯へ差向、六人ハ国元へ掛合ニ遣シ、御用筋有之候ハ、私共可及御答候、

申三月

一八一 松平修理大夫家来差出候書付

〔島津茂久、薩州藩主〕
修理大夫家来有村雄助事、〔三重県〕於四日市駅召捕、国元へ被差下候処、右ハ御用有之者ニ候間、詰役人差出早々呼寄候様、三月十二日伏見奉行所ヨリ彼地詰役人之者へ御達有之、則其通取計候処、大坂表ヨリ申越、其段ハ先達テ御届申上置候通御座候ニ付、右ニ付テハ大坂両町奉行所ヨリモ、御組之衆海陸ニ手出役ニ相成候ニ付、雄助義国許へ致到着候ハ、早々差出候様大坂表ヨリ申越候所、同廿三日国許へ相達、城下ヨリモ目付役兩人并下役共多人數相附急速差出候処、雄助事到下候中途、筑後高瀬宿辺ニテ、夜中透ヲ計逃去、領内薩摩国出水郷之内鯖淵村山中ニテ致自殺候処ヲ見当候ニ付、

死骸へ兩人堅固付置、右両御組之衆へ肥後於佐敷駅事実及御引合、去月三日平山熊太郎殿・渡部織之助殿・佐川千代太郎殿・嘉木力之助殿御見置相濟、死骸之儀ハ何分御差図迄之間假埋申付、嚴重ニ格護為致置候段、於大坂・伏見夫々及御届候旨此節申越候、此段御届申上候、以上、

四月十八日

松平修理大夫家来
〔江戶御守居〕
西 筑右衛門

一八二 本多主膳正家来差出候書付

去月廿二日京都御所司代酒井若狭守様ヨリ同所屋敷へ差置候家来之者御呼出、水戸殿御家来之内無余義用向等有之、京・大坂其外へ差遣候節ハ、前以名前并人數出立日限等御達シ可被成、右之外水戸様御用向等申唱罷登候者有之候ハ、取押置可申旨御達御座候、同日同所町奉行小笠原長門守様御役宅へ家来之者御呼出、於江戸表及乱妨候残党之者共、追々可罷登哉ニ相聞候間、主膳正領分本道ハ勿論間道等ニ至迄嚴重手当可仕旨、〔被質島〕殊ニ草津宿之義ハ別テ肝要之場所ニテ、人數差出嚴重ニ申付、右場所之義都テ引受卜可相心得様、酒井

若狭守様御差図之趣御達御座候、依之同日草津駅并矢橋村勢田橋其外往還口々、兼テ手配仕置候得共、猶又増人数差出旨在所表役人共ヨリ申越候、此段各様迄申上置候様主膳正申付候、以上、

(康禎、膳所藩主)
本多主膳正内

閏三月十四日

福田雄次郎

一八三 幕府目付黒川左中ニ京都警固及大坂兵庫堺等ノ海岸巡視ヲ命ス

御目付

(盛泰)
黒川左中

京都七口御固、大坂・兵庫・堺海岸筋為見分被差遣候間、可致用意候、

右於西丸新部屋替席對馬守申渡、列座無之、酒井右京(盛光、若年寄、敦賀藩主)亮侍座、

一八四 琉球人召連参府伺

一八四ノ一

御代替ニ付、為御祝儀来々戌年琉球人召連参府之儀、伺之通被 仰渡置候、然ル処当時外夷多人数御府内へ入込居候折柄ニ候得ハ、内実唐国へ之響合等懸念之次

第モ御座候段申遣候得共、此節ハ御祝儀之使節ニモ候得ハ、御猶予等何分奉願兼候次第ニ御座候、如何取計可然哉、此段無急度御内慮奉伺候、以上、

松平修理大夫内

五月三日

西 筑右衛門

覚

御代替ニ付、琉球人召連参府之儀ニ付、内意申立候趣無拗筋ニ付、唐国へ響合等之場合、琉球国ヨリ何レトカ唐国へ及示談、表立参府致シ差支無之様取計、模様追々申聞候様可仕候事、

一八四ノ二

五月六日大和守宅へ家来呼相渡候書付

松平修理大夫へ

御代替ニ付、来々戌年琉球人参府之儀、御国事多端之折柄ニ付御差延被成候、追テ参府頃合之義ハ可相達候、

一八五 松平修理大夫家来大和守宅へ差出候書付

一八五ノ一

今朝一応申上置候浪人共ヨリ、別紙之通書取差出候ニ付、猶亦元主人生国等之儀精々承り候得共、此儀ハ子細有之難申聞申募り居候、書取之趣ハ御条約御取替セ

有之候国々へ対シ、以之外之所存ニ付、難相成候段可
及挨拶ハ勿論之義ニ候得共、左候テハ致決心候者早速
立去、於横濱辺何様可及異変モ難計、尤取押方之義ニ
付テハ精々致手当置候得共、何分多人数之儀万一止兼
候者モ有之、兵端之基ト相成候儀出来候テハ恐入候事
故、右挨拶之儀ハ捨置申候間、若御吟味ニ相成候義ニ
御座候ハ、公迎御威光ヲ以御人数迄御差向、無子
細御差出候様仕度、手切之取計ニテ不都合之儀共出来
仕候ハ、無申訳次第ニ付、別紙書取名前書相添此段
申上候、何分御差図被成下度奉願候、以上、

八月廿八日

松平修理大夫家来

半田嘉藤次

一八五ノ一
謹以書付奉言上候、

当今 神州之形勢美ニ累卵ヨリモ危ク相見、根元外夷(ハ脱カ)
之勢焰々恐怖シ、一時偷安為横濱村之開港致候ヨリ以
来人心不居合、世上騒々敷、追々(諸異共候吏ヲ難シカ)黠夷吏ヲ〔窃〕商愚
民ヲ欺キ、珍玩ヲ以テ耳目之患ニモ及、随テ国家之疲
弊ニ相成候時ニ至、利ヲ以此民ヲ吞噬シ、手引(元ノマ、イタサセカ)
不測之大患ヲ醸シ候、賢明之先見果シテ毫釐モ不可疑候

是ヲ以為惱脱カ

宸襟、一度ナラス 綸言被為在候処、要路之姦司飽迄
奉蔽塞、恐多モ万々一

御讓位之御儀ニモ至候ハ、千載不磨之儀(遠カ)ニ可相
成奉恐縮候、然ハ彼跋扈致置候モ、水戸前中納言様御
盛徳之御勤柄ニ付、我々モ赤心ヲ出候如何崇存致候義(御大崩之申カ)

ニ御座候、此節風ト伝承仕ルニ、右之御方様大氣之由、
左候得ハ当今天下之御模範被為侍候御英明、乍恐(ハ脱カ)

御屋形様ト奉承知候、依テ我々共漂浪之身分ト乍申、
上ハ奉安

敬慮、下ハ万民皆塗炭之苦ニ陥候、(ヲ救ハン為ニ脱カ)
御屋形様之御武徳ヲ奉仰、遽ニ推参仕候義ニ御座候、
仰願ハ深大之御明行ヲ以、不日ニ御人数御差向被為御(御カ)

外夷共御打払ニ相成候ハ、我々共乍不及先鋒可仕心(下必死カ)
配ニ存詰罷在候、何卒家々之微衰御憐察被下度、右之一
筋克々御勇聞被成下度、此段伏テ奉願候、頓首拜謹言、

萬延元年八月廿八日 三拾八人名前

川上式部殿(久美)
川上龍衛殿(久龍)

川上龍衛殿(久龍)

(鈴木大日記 (国立公文書館所蔵) にて補註)

一八五ノ三
一萬延元申八月廿七日松平修理大夫屋鋪罷越候姓名書

大川東之助(本名小河吉三郎) 松村七三郎(本名山田熊義)

吉野 三平(同林以德) 土村八之助(同菊池石仲)

竹林寅之助(同太宰清衛門) 淺井才助(同竹内延秀)

川村惣右衛門(同芹沢義幹) 菊地新太郎(同生駒省太)

大野 忠藏(同大越伊之) 鈴木留太郎(同鈴木持重)

鈴木與助(同服部佛三郎) 岸 清藏(同根本義信)

東山 藤藏(同横山亮之介) 岩谷壯助(同岩谷敬一郎)

立山半藏(同不明) 大森清藏(同不明)

蓮見東三郎(同難沼伊織) 和合七郎(同和知總次郎)

中村政之進(同不明) 中根左内(同中野知珍)

金易三次郎(同宮田重孝) 鈴木鐵之助(同吉成一徳)

酒匂 清藏(同宮本主馬之介) 生駒小九太(同不明)

曾山半六(同菅谷八次郎) 坂木 實(同柳幾次郎)

中村正吉(同中村大三郎) 石島四十郎(同不明)

原 瀧之助(同栗田好明) 懸川勇助(同掛札勇之助)

不和新太郎(同小沼四十郎) 中村正藏(同桑屋重順)

井坂 三平(同井坂三次郎) 市飛久五郎(同市毛久五郎)

右之内道ニ蹈迷候者
三拾七人(トナリ)

松延積之助(本名禮合新五郎)

下野 三平(同下野清介)

今曉ハツ時頃修理大夫芝屋鋪南通用門ヨリ、奥平大膳(昌服、中津藩主)

大夫殿使ノ者ト申断聞候ニ付差遣候処、三十七人入込(行方)

候故様子相尋候処、実ハ天下之浪人ニテ、無余義筋申

立度趣有之罷越候旨申出候段、門番人届出候ニ付、屋

鋪内長家へ差通シ、留守居添役之者出会、本身分并二

子細相尋候処、身分之儀ハ無拠訳合有之、何レモ明白ニ

難申出、且又子細之儀モ重役之者へ面会之上申演度段

申シ、重役之者面会之儀ハ、容易ニ不致当方仕来ニ候、

何様之義也共申聞候ハ、重役衆へ可申聞段相達候処、

左候ハ、書取ヲ以可申出旨之儀ニテ、折角書面認罷在

候、手間取様子ニ付、追テ委細御届可申上候得共、其

内殿敷警固之者付置、先此段早々御届申上候、以上、

松平修理大夫内
申八月廿七日
江戸留守意
汾陽治郎右衛門(次)

一八五ノ四
松平修理大夫家来へ可達覚

松平修理大夫屋鋪へ罷越候浪人三拾七人ハ、追テ及沙
汰候迄修理大夫家来へ当分預ケ置候間、卒尔之儀無之

様可取計旨被達候事、

一 右薩州侯へ御預ケ之三拾八人之銘々、

文久元酉七月五日 御沙汰有之、水戸殿へ御引渡シ被

仰付、同小梅御屋鋪へ引取候事、

帷子自分紋ニ染、羽織フサキ縮ニテ小じま、
チ、ミ

駕籠一挺へ足輕八人ツ、附添、其余侍分多ク、

留守居三人騎馬之者二十人余附添ニテ、薩州

侯ヨリ御送りニ相成申候、

一八六 外国人ヲ芝新堀端ニ要殺スルモノアリ

一十二月六日

今夜亜墨利加通弁官赤羽根^{ホロイセン}ヲ^{フロシ}生人へ為応接相越候歸

リ、五ツ時頃芝新堀端ニテ、何者共不知候者共刀ヲ拔

迫切掛リ申候、善福寺へ引取、曉七ツ時頃相果申候、
(東京都港区)

尤ミニストルハ屋ノ内罷帰リ申候、
(東京都港区)

一 三田新堀端佐渡守中屋鋪表門西ノ方ニテ、昨夜五ツ半

時頃外国人落馬ニ付、送人提灯等差出候様、附添阿部

孝吉殿ヨリ辻番所へ被相達候ニ付、提灯為持罷出候処、

全途中ニテ浪人体ノ者ニ被切、右場所ニテ落馬之趣屋

舗番人ヨリ注進申出候ニ付、早速掛リ者罷出様子見受

候処、相違モ無之候ニ付、送り人等用意申付候内、町

方人数ニテ善福寺へ引取相済申候、外国人途中行逢之

義ニ付テハ、兼テ被 仰出候趣モ有之、不容易次第ニ

付、佐渡守在邑中ニハ候得共、持場内之義ニ付此段御

届申上候、以上、

京極佐渡守家来

十二月六日

宮澤尚一郎

一八七 天童領主織田兵部少輔白雉ヲ幕府ニ献セ

ントス

(織田信孝)

一 兵部少輔領分羽州天童陣屋前城山ト唱、又鶴ノ舞ニ形

似寄り申候トテ舞鶴山トモ申候、右之場所ニテ当二月

ヨリ出来ト相見へ候中白ノ雉雛鳥、当八月中見当リ候

ニ付、取護候様申付、漸々九月十日手ニ入、追日飼付

健ニ生立申候、然ル処右雛子之儀ハ、古来稀成靈鳥之

由聞伝被致、此節当表取寄相成候処、此度

御本丸へ御移徙モ被為済、誠ニ以恐悦之折柄ニ付、此

上之御吉瑞ニモ相成候様、何卒御献上被成度思召ニ付、

此段奉申上候、以上、

十一月

織田兵部少輔内

十二月朔日指出 長谷部清一郎

一八八 村上侯安積良齋へ尋問

一水府彦根一件、詰り如何相成可申哉、

答 恐多ク候得共、姑息御政道ヲ以兩家一旦御立候共、詰り兩家共滅亡ニ至リ可申候、

一其故承知致度候、

答 仇ヲ報セハ亦々讐ヲ報ス、是則兩家終ニ全キ事ヲ得サル処、

一然ラハ仇ヲ報ス間敷ヤ、

答 是ヲ失ハン事ヲ憂レハ至ラサル処ナシ、君子タル人杜稷ヲ失ハン事ヲ愁ヒテ、君父ノ仇ヲ報セズンハ人倫ノ道廢シ、何ヲ以テ君ニ事ヘ可申、祖家ノ靈是ヲ恥サラシヤ、

一彦根ヨリ御父子之内何レヲ当之仇ニ存候者ヤ、

答 水戸家ニテハ、

一報讐之道如何成、

答 三ツ有、其一ツハ時勢恐ラクハ行ハレ間敷、其二ツハ必行ハレ可申候、

一詳カニ承リ可申候、

答 是ハ難申上候、

一此一事ヨリ兵革之世ト相成可申哉、

答 總テ事ハ不慮ニ発シ候者、三月三日之變是也、

今ハ外国ノ大難有、又井伊家ニハ時ヲ計リ輕々敷不発候得共、吾人タリ共憤怒ニ堪サル人有テ、報讐之儀ヲ以タヘサル者有間敷共難申、左有時ハ主客忽チ地ヲ換シ、攻ルハ奇守ルハ正、攻守難易ノ勢茲ニ有、不慮ニ事起リテ戦争之巷共相成可申哉、

一御兩家勝負ハ如何可有之哉、

答 剛モ頼ムヘカラス、柔モ侮ルヘカラス、是決断ト油断之ニツニ御座候、相手ニ不足ナキハ弓矢神ノ未タ井伊家ヲ捨サセ給ハサル処ト被存候、兎モ角モ御兩家滅亡之時節到来、世ハ不遠戦国ト可相成、今ハ洋夷三大敵逼リ来ルハ余処ニ見テ、国家柱石之御兩家同士打シテ滅亡ニ及事、武門之義理トハ申ナカラ、歎クニモ余リ有事ニテ、天命歎残念至極ト落涙致シ候、

一兩家何レ善惡有之哉、

答 双方惡ニテ候、其中ニ大ニ差別有之事ト存候、

水戸ハ悪之中ニ忠心相見ヘ、彦根ハ悪之中ニ又
悪有之、第一朝敵ニモ陥リ候儀相見ヘ、井伊家
被立置候共必長ク保チ申間敷、水府ハ存念不叶
共亡失ハ遠キ方ト存候、

一八九 文武奨励掛ニ特命ス

閏三月八日

一造士館掛

一演武館掛

桂 小吉郎(久武)

右ノ通掛被 仰付候条、時々見舞、兼テ人物致見聞、

格別心掛宜敷出精ノ者有之候ハ、不差置可申出、且又
往々初テ役儀被 仰付候者調被 仰出候間、兼々可然
人物調置候様被 仰付候、此旨可申渡候、

閏三月

川上筑後(久武)

一九〇 安田助左衛門日記鈔

萬延元年十月廿五日

式部殿上ヨリ致承知候ハ、御方事御内用ノ儀有之、被
遣置候ヘ共、来々戌春迄相詰候様被 仰付候、左候テ

乗馬立方諸手当トシテ、金百兩頂戴被 仰付候旨、御
直ニ致承知有難御礼申上候、

一九一 白石正一郎日記鈔

安政七年庚申後万延ト改元

二月十二日

廉作薩摩行、(正)郎英、資恩

同 十七日

薩藩田中直之丞君来訪、(重之進謙助)

旅費不足ノ趣ニ付金三円カス、大急帰国ト
ノ事ニ付、大里迄汽船ニテ送ラス、(湯力)

同 廿二日

高崎翁帰薩ニ付、滞薩ノ廉作ヘ一書言伝
候、(善兵衛)

同 廿六日

堀仲左衛門君堀ハ桜田事件ニ往來セリ、此回モ果シテ
其事ニ付テハ往来ナラム来駕、過ル十九日出立ノ由、廉作・田中ナ
(重之進)

ドハマダ着薩不仕内出国ノ由、今夜止宿、
翌廿七日上坂、

同 廿九日

宮崎筑前行、(司、平野國臣)

三月 二日

筑前工藤君ヨリ飛脚来ル、製煉所台場一
(産物カ)

条ニ付、早々致出筑候様ニ申来ル、同五日
宮崎ヨリモ態々飛脚ニテ申来ル、(北九州市)

同 五日

夜正一郎直様大里ヘ渡リ、今夜富野ヘ一

宿、

同 七日 福岡着、

同 八日 工藤君ノ周旋ニテ、御用人吉永源八郎君

ヘ行、語話馳走有之、

同 九日 宮崎ノ実父何某及舎弟ナド旅宿ヘ尋来リ

種々饗応有之、

同 十日 工藤氏誘引ニテ澤原與右衛門殿宅ヘ行、

熊谷文平・清水正平・入江勝四郎・大内左

内等ノ諸君ニ逢ヒ、大ニ馳走有之、此衆ハ

皆製鍊所台場掛リノ役人ナリ、

同 十一日 製鍊所諸品見ニ行、

同 十三日 役人家ヘ廻勤、

同 十五日 戸田六郎・小田部龍右衛門・平山宇八郎

ノ三士旅宿ヘ来訪、夜ニ入北條右門君、

姫島ヨリ渡海ニテ、己レカ旅宿ヘ入来、

同 十六日 高橋亭ニテ工藤・北條ノ両士ヨリ別盃ノ

マフケ有之、同日昼過福岡出立、宮崎同道

ニテ十七日帰關、今日新筈船岩城氏新筈船岩城云々

同 十七日 正一郎帰宅ニテ承リ、去ル六日薩州田中

姓名考フヘシ、源七郎ナラン、着關、

直之進君来、先日金三円返却、手紙一通残

シ有之候、其内ニ高崎猪太郎ヨリノ書翰、又

大久保君大久保利通ナランヨリ宮崎ヘノ書状モ有之、

直様宮崎ヘ渡ス、両田中ハ其翌日七日出帆

上坂ノヨシ、

同 十八日 馬關風聞、江戸先達テ騒動有之候由承リ、

直様宮崎ヲアマミダジ状屋ミタラヒヤ迄遣

シ、実否聞合セ候処、井伊櫻田ニテ殺害ニ

逢ヒ候由核田事件ノ初報水藩十七人ト申事ナリ、翌

十九日十七日ニ馬關ニ初報右ノ風聞ヲ薩州ニ

為知状数通仕出ス、宮崎分モ入組筈船相頼、

同 二十四日 薩州君公江戸登リ御延引ノ由承ル筑後松崎駅ニ於テ

桜田ノ報ヲ聞キ、発病ト唱ヘ、引返シ福岡セルヲ云フ、

同 二十七日 薩摩田中直之丞君田中直之進築名昨日アマミダジニ

テ認置カレ候状トテ今日着、改名田邊三八

ト有之、宮崎直様小倉ヘ渡リ田中ヘ逢候、

同 閏三月七日 筑前福岡ヨリ廉作来書、薩摩御買入米石

正一郎ニ托シテ糧米ヲ買ハセ、同入方ニ冊ハセタルコトアリ、則チ此買入米云々ナルヤ明ラカナリ

ル、

同 十日 備中ノ商人備中ノ知人乎二人薩摩ヨリ帰り來ル、福岡ニテ廉作ヨリ状言伝リ持來ル、

同 十二日 僕嘉吉筑前ヨリ帰り、宮崎ノ事八ヶ間敷趣承リ帰ル、

同 十三日 高崎翁ト廉作黒崎船ニテ帰關、宮崎事春風樓ニ潜伏頼遣ス、夜ニ入此方ヘ呼故也、

筑ノ鷹取（推賢）養巴ヨリ來書、宮崎届入組有、

同 十五日 筑前台場役人入江勝四郎入來、今夜宮崎ヲ又々春風樓ヘ預ケル、廉作連行同二十日入江焔筑、

同 十六日 薩摩ノ伊牟田尚平來訪、關山（茂時）札君（金生）関山ハ江テ至急出府ス、伊牟田ハ家來ニテ附隨セシナリ、同船ノ由承候ニ付、翌十日關山氏ヲ迎ニ遣シ候ヘ共、無程出帆故ニ入來ナシ、

同 二十二日 宮崎春風樓ヨリ帰ル、

同 二十六日 高崎翁帰薩、今日筈船新役中馬廉四郎（チヌ）馬中（シヌ）高崎同僚ナリ殿・宮崎源七郎殿入來、今日昼過

目明仁作來、筑前盜賊方淺井大藏外一人筑前ノ目明モ付添、平野二郎尋方トシテ來ル、

同 二十七日朝 仁作方ヘ滞留ノ筑前ノ目明綱屋勘右衛門ヲ手先ノ長二郎連來リ、平野二郎カ事猶又委ク尋候故程克申置、

四月 二日 廉作筑前行、

同 十二日 彦根家中少々馬關ヘ入込居候由風聞、

同 十八日 正一郎新地会所ノ乃美氏（松藩士乃美織江カ）ノ所ニテ一酌中竹崎目明仁作乃美氏ヘ尋來リ申様、薩州ノ田中直之丞事、京都中野甚助ヨリ尋トシテ、馬關ノ目明松屋久吉（マ）私ヘモ当テ、人相書ヲ以テ頼來リ候段、其書面（并カ）ヲ持參相尋候故、此方ハ一切不存人ト相答置候、

同 十九日 竹崎目明仁作始メ博多ノ目明綱屋勘右衛門其外手先ドモ來訪、中ヨリ帰リ掛ケノ由、平野二郎カ事又々相尋候様程克申述置候、今日薩高崎翁ヘ書状、昨日ノ人相書ノ事申遣ス、今夜廉作筑前ヨリ帰ル、

同 廿五日 筑前ヨリ工藤君入來、止宿、

同 二十六日 酒店ノ傍ニ硝子器開店ス、

同 二十八日 工藤君帰筑、

五月 八日 目明仁作ト手先八百屋林三ト來ル、筑前ヨリノ書状ヲ以テ、平野二郎事又々尋ニ來

同 二十七日朝 仁作方ヘ滞留ノ筑前ノ目明綱屋勘右衛門ヲ手先ノ長二郎連來リ、平野二郎カ事猶又委ク尋候故程克申置、

四月 二日 廉作筑前行、

ル、

日出也、

同 十二日 宮崎薩行路費金三円差遣ス、

同 十一日 宮崎肥後ヨリ帰ル、翌十二日妾お秀へ宮

同 十八日 肥後藩上松已八・堤松(左カ)右衛門ノ兩人来訪

崎ノ書面ヲ以帰筑ノ事申聞ル、同十三日お

川上彦之助(彦カ)ノ添書持参、翌日帰ル、

秀帰筑ス、

同 二十八日 福岡ヨリ高橋屋勘六官(勘カ)ノ妾召連来ル、六

同 十六日 目明仁作・同松屋久吉・八百屋林三ナド

月二日帰筑、

来ル、平野二郎ノ事相尋候故、此五六日已

六月 七日 筑前藤四郎来ル、

前筑前オ(おのしまカ)ノシ田漁船ニ乗来リ、直様又其船

同 十八日 薩摩高崎猪太郎君ヨリ廉作へ来書、

ニテ旅行ノ由申テ致出帆候、尤当家へ凡半

同 二十五日 宮崎肥後ヨリノ書翰二通、春風楼ヨリ持

時計上リ居、食事ナド仕舞、旅費不足ノ由

参ル、

申ニ付、金壹両貳歩貸シ、コリニツ預リ居

七月十二日 薩州高崎君ヨリ過ル四日出ノ状着、同日

候段申聞ル、

此方ヨリモ出状数通入組、笠船岩城氏へ頼

同 十七日 廉作筑前工藤氏へ行、今日昼過筑前盜賊

送り遣ス、

方宮園令助・山本駒太兩人来ル、平野二郎

同 十三日 肥後熊本ヨリ宮崎ノ書状二通着、山形與

入魂ノ由来相尋候故、凡三年前ヨリ懇意ニ

二郎へ潜居ノ処、当時町宿ニ相成候由申来、

相成候次第相咄候処、兩人申様当春同役ノ

同 十八日 肥後宮崎へ返書仕出ス、藤井五兵衛ト云

者参上ノ節、此後二郎御宅へ参候テ御留メ

名当ニスル、

置、仁作方へ為御知被下候様御頼申置候処、

同 二十六日 薩摩税所喜三左衛門殿(税所喜三左衛門舊名)来訪、翌

此度無其儀ハ御困被成候様相見候ナド、懇

帰省、

言申述候故、御尤ニ候へ共、二郎先年来懇

八月 九日 薩摩高崎善兵衛君ヨリ来書、七月二十九

意ニ致来候テ、人為絶テ惣人トモ見へ不申

ニ付、筑前様ヨリ貴君兼々御尋ノ有シハ、何

等ノ悪事ヲ被犯候哉ト二郎へ相尋候へ共、

犯シタル罪ノ覚モ無之ト申ニ付、当春御同

役方へ仁作ヲ以、二郎儀ハ如何ナル罪人カ

ト、御尋申サセ候へ共、何ト云罪ノ御存モ

無之、只々御詮儀被成候トノ事故、旁以絶

テノ罪人ニテモ有之間敷、且此度二郎久敷

□ニ参候処ヲ態々留置、仁作へ為相知、仁

作ヨリ御国へ注進シテ、其末御当家召捕ラ

セ候テハ何トモ不人情ニ相当、且ハ薩州ノ

高崎氏ヨリ高崎ヨリ云々可札、然シ高崎善兵衛氏、兼々カ五六氏カ、イツレカ五六氏ニ尋ヘシ

被相頼候事杯モ有之、旁以其通ニハ難仕ニ

付不答ニ及ヒト相答シ、然ル処二郎ノ荷物

コリニツ御預リナラハ、人ヲ以取ニ参り候

トモ御渡不被下様ニト申ニ付、心得候テ返

答致シ候処、無程兩人罷帰候、

同 二十日 今夜宮崎ヲ春風楼へ潜居為致候、

同 二十一日 竹崎在番役渡邊氏ヨリ正一郎呼出シ有

之、罷出候処宮崎一条ノ尋有之候故委敷申

述候、此渡邊氏ハ勤王家、今夜及深更宮

崎此方へ帰ル、

同 二十二日 平野二郎ヨリ預リ置候コリニツ筑前盜賊

方へ引渡シ、請取一筆取置候様在番ヨリ申

来、其通り故計ヲフ、

同 二十三日 廉作筑前行、

同 二十八日 薩州高橋新八村田新君平野ヲ尋テ入来、高

崎猪太郎君ヨリ添書持参ニ付、茶室ニ通シ

平野ニ逢ハスル、

九月 一日 薩州高崎猪太郎君ヨリ廉作へ来書、

同 五日 宮崎ヲ二階ニ潜匿サスル、

同 六日 高崎猪太郎ヨリ又廉作へ来書、

同 二十八日 薩ノ税所喜三左衛門殿大坂ヨリ下リ掛入

来、直様帰薩、廉作筑前ニテ相待并ニ高橋

新八君ハ南肥ニテ相待居候等ノ事知ラセ、

宮崎ノ肥後書付モ相渡申候、

十一月五日 肥後木原猪太ト云人ヨリ平野二郎届ノ状

送リ来ル、

同 九日 平野二郎一件、此節又々尋方敷敷困リ入

候故、急飛脚ヲ筑前へ遣シ、廉作へ申遣シ、

夕方新地ノ目明源三来、平野一条何角八ヶ

間敷申候へ共、此方其後ノ行衛不存故、筑
ノ盜賊方へ程克申筈候様申聞被置候、

同 十三日 平野二郎一件ニ付、竹崎町方役石田へ口

書ヲ差出ス、

同 十六日 廉作帰ル、

同 十九日 夜俄ニ町方役所へ呼出シ有之、罷出候処、

平野一件筑前盜賊方六ヶ敷申様承リ、及深

更目明仁作来ル、

十二月十三日 筑前ヨリ池野永太ト云者、平野二郎一

条尋方ニ来ル、及相對程々ニ申置候、

〔白石家文書にて補註〕

一九二 吉田矩方大原三位ニ呈書

此度三人ノ者トモ上京仕候事、此地ニテ反復熟議仕候

儀、神州ノ興廢寡君ノ榮辱全ク此一举ニ止ルコトト論

詰候ニ付、乍憚 執事ニモ、上ハ 神州ニ御報復ト思

召、下ハ弊藩ヲ御愛護ト思召、平生ノ御積憤ヲ一時ニ

御発揮奉願候、弊藩ノ近状ハ三人ヨリ逐一ニ可申上、

衷ニ赧慙之至ニテ、追々厚ク御属望遊サレ候処、詮モ

無之次第ニ御座候、唯頼母敷相考候ハ、寡君ニ於テハ

未タ曾テ勤 王ノ宿志ヲ變シ不申、而シテ君側政府ノ

鄙夫小人君意ヲ承順スルコト能ハス、遂ニ愛ニ至リ申
候、此度之一挙容易ナラサル寡君ノ恥辱ニ至ルヘク、

臣子タル者ノ為スニ忍フ処ニ無之候得共、此機ヲ失ヒ

候時ハ遂ニ勤 王ノ一儀永ク手段ニ絶ヘ、是迄世ニ名

門望族ト呼ハレタル江氏モ索然タルコトニ成行、祖名

ヲ辱シメ後裔ヲ汚スニ比セハ、一時ノ君恥ハ尚忍ヘキ

コトト論定仕候事ニ付、是等ノ情合モ御酌取奉祈候、

此度三人ノ見込候処ハ、昨冬和作莊四郎等〔莊四郎ハ反復小
人ニテ、上
執事ヲ誤リ、下吾輩ヲ誤
ルコト容易ナラス候〕 帰国ノ節、執事ノ命ヲ伝テ曰ク、少

將東觀アラハ其時コソ忍出、伏見ニテ少將へ面議スヘ

ク思召由、同志中ニ於テモ此〔御脱立〕一言最モ御頼ミニ奉存候

内、大高又次郎・平島武八郎ノ二士来遊、寡君ノ東觀

ヲ期トシ、同志幾名ト二三ノ名公卿ヲ奉シ、出テ伏見

ノ旅館ニテ

寡君ニ責ムルニ、天下ノ事ヲ以テスル由、同志中深ク

其志ニ感シ、必此一段ノ大事ヲ成就セントシテ政府ヲ

責候ヘトモ、政府遂ニ其言ヲ用ヒス、三人モ已ムコトヲ

得ス東上ニ決着仕候、右ニ付差当り候処置、私見込ノ

処左ニ申上候、寡君暫時伏見若クハ京都へ逗留仕候儀

肝要ト奉存候、輕々シク東下仕候トモ、関東ハ奸賊ノ

巢窟ニ付、寡君精々正議ヲ張候トモ無益ニ奉存候、尤モ

朝廷ニテ屹(行カ)ト御定算有之候得ハ、格別ノ儀ニ御座候、

間部(詮勝、鶴江藩主)下総守事ヲ仕済シ下向致候事ニ付、今更議論ニ及

ヒ難キノ俗説有之候、是大ナル謬説ニ御座候、普天率

土ノ人民トシテ墨夷ノ条約ヲ破ラスンハ死スルニ如カ

ス、私近著墨夷申立弁駁三人ニ附置候、御一見奉願候、

寡君滞京中公卿摺紳ノ御方々ヲ始メ草莽ノ志士仁人ニ

至ル迄、貴賤尊卑ノ御界限ナク、同心同徳ナラテハ大

功成就不仕候、大名ハ平素富貴膏粱ニ日ヲ暮シ、迂濶

ト倨傲ノ失アランカ、是等ノ処御寛宥奉願候、所司代

ヲ早く説諭シ 皇家ノ害ヲナサ、ル様ニ被遊度候、近

畿ノ名士俠客御聞及ノ人々ハ、其筋々々ヲ以テ密々急

々御召登セ可被遊候、徳川御扶助公武御合体ニ多人數

ハ不用ニ候得共、乍恐 朝廷ノ御勢盛ナラテハ、関東

ニモ容易ニ

勅旨ヲ奉シ不申候、(且脱カ)万一違 勅ニ候ヘハ、是非其罪ヲ

御糺無之テハ相済不申候、弊藩同志ノ者ハ追々三人ト

モヨリ可申上候、此輩モ私共精々力ヲ竭シ、早速上京

仕候様可致ト奉存候、墨使申立、幕吏答振等逐件御論

駁ノ上(職著モ効カニ御探状ノ一、端ニ備ヘ度存念ニ御座候)改テ関東へ御申達被遊候事第

一ノ急著ト奉存候、尾張・水戸・越前ノ蟄居 勅免、

三家大老御召登セノ再 勅等モ急著ト奉存候、

大結局ハ墨魯暗佛ヲ説破シ、(此ニケテ、此ノ大眼目ト可懸召候脱カ)皇威ヲ万国ニ震ヒ、国

基ヲ永世ニ建ルコトナリ、是等ノ事ニ至テハ、追テ可

申上候、

(安政六年カ) 二月十四日

大原源三位公下執事

謹書鄙衷奉呈 源公下執事 矩方

人言誤 公卿、知遇及狗鼠(友カノ鼠)、滅賊期七生、健字賜雄語、

狂愚本自信、微向 国家許、況得附青雲、田菴謀一挙、

驚才死亦難、徒生投囹圄、鑿園而柄方、齟齬固其所、

恨負滅賊心、九天道修阻、八行託三生、片糸添鴻緒、

肉食多懦夫、揚水不流楚、公独立之人、幸不咎越俎、

一九三 庚申轉蓬(日)録關鐵之介日記鈔

(万延元年五月) 同十六日

曇、風氣如秋

薩州山入ニ求麻通り迎、水股ヨリハ城下ニ近シト云、

日向へ通ル往還ノ由、カクトノ番所改所アリ、入安シ

トナリ、上十五日下十五日ト番人交代スルトナリ、此

日庄衛門へ托スル処ノ書状不達シテ帰ル、書中ニ曰、

堀・高崎御城下士林ニ相違無之候得共、当分向々へ旅行留主故書通ハ無益也ト、藩士澤田市之介ト云士人ヨリ憐ニ聞取シ故、金子指添御返納ス、堀ハ澤田隣家ニテ、殊ニ懇意ナリト無語申候由、不得止返進可致由、不惠当人方へ申訳呉候様云々ナリ、茂平当惑シテ談アリ、吁々、

〔野史合雜新史料叢書八にて補註〕

〔卷〕「此間欠他日補欠スヘシ」

雖在淚痕

夢花主人手録（通称匡

記スヘシ）

戊午十月廿六日以事詣西衙自首拘留中作

誤踏禍途当奈何、漫權吏議貽憂多、風櫛不得展書読、且誦文山正氣歌、

碌々唯当目下奔、一朝豈計邁斯冤、身為孟博亦何惜、空負年来阿母恩、

經月拘留思曷禁、百憂千慮一呻吟、不知何罪貽伊戚、只仰国家恩恤深、

十二月檻送東吉田駅途上

夾路長松擎碧空、寒声爔々吼天風、吼然驚覺與窓夢、穿過千兵万馬中、

白須賀途上望岳

連朝風日值霜晴、檻送誰知艱苦情、独有岳靈不吾棄、天刃遙放玉顏迎、

雪中過佐夜中山

一天風雪過中山、豈翅征途除險且艱、此景此情以何比、居然將謂似藍關、

十二月十九日、抵江戸、官命錮於大聖寺侯邸、

其廿三日、侯家給以新衣、喜賦、

一襲新衣嘉惠存、身軀深喜著來温、侯家殊沢真堪荷、不独当年挾纊恩、

禁錮中歲暮雜感

心無愧怍豈誰欺、一室南冠俟命時、咄々向空書怪事、此情只有彼蒼知、

京華隔斷万重山、西望逢関何日還、夜々魂神飛越処、時於夢裡拜慈顏、

家有慈親日倚闥、憂心其奈歲將除、夙興夜寐成何事、正座読来無字書、

一歲將除難未除、思家悶座意何如、惟応待得陽和到、還向吾廬読我書、

朝兔西望憶皇畿、烏兔匆匆不駐飛、想得家園小兒女、

待春兼待阿爺帰、

除夜

竦然空傲晋南闌、暗室無燈歲逼闌、不似年年常守夜、

膝前長少語團樂、

(安政六年)

己未元旦

東窗鐘声韵曉霞、異鄉邁厄最思家、迎新無得嘗椒酒、

且被春風添鬢花、

人日作

春風何処到、一室足悲傷、今日值人日、異鄉思帝鄉、

不成椒酒醉、促供菜羹嘗、塊座多憂慮、無詩寄草堂、

雜感三十首情見乎詞七絕二十首
七律十首

侯邸逢春未見春、官然一室錮斯身、承顏膝下知何日、

須及鶯花世界新、

富岳西頭是帝鄉、入春帰思更難忘、仰天漫想烏頭白、

那識顛毛先帶霜、

保来眠食養心神、鷓鴣態經勞一身、幸是康強無疾病、

憑誰將此報家人、

曾在家庭教我兒、恐他遊惰廢唔咿、学詩学礼自当勉、

磋琢須知於幼時、憶立兒

雲霄何処放風箏、忽引帰思到帝京、遙憶故園兒子戲、

亦当街上弄春声、全

板壁围身小室虚、已無筆硯又無書、塊然枯座如鷓鷯、

只賺先生食有魚、

紫宸高在五雲辺、也比城南尺五天、有客問吾何処住、

烏丸巷北蛤門前、戲答人問家居

正襟危座送居諸、心裡憂愁那処舒、新句題成無筆墨、

壁間俛借爪痕書、

待命侯門思不禁、無人為我報家音、何方自得生双翼、

一筭西還慰母心、

入春已過二旬強、梅雪柳烟当逞妝、渾与東風如隔世、

近来猶未聽鶯簧、

衣奔食走救飢寒、常恐遑々涉日難、始知食走衣奔苦、

自勝拘留無事安、

微暖方知啓蟄期、送窮今日便其時、咲吾身在樊籠裡、

亦欲車船擬退之、

近窓鶯語韵方嬌、遠客聞之魂欲消、想見故園春色好、

的知今日是花朝、

昼思夜夢自悲辛、不奉慈闈十五旬、但願帰家安頓了、

神情如醉又如痴、夜寐晨興無所為、虚待放帰似經劫、

潘輿得待定何時、

霏微細雨冷如姻，不似炎曦赫々天，節氣近來回和適，
羸軀六月更裝綿。

杜鵑花發杜鵑鳴，鳴去鳴來惱客情，日夜恨他只饒舌，

一声々作百千声、

一窓毒熱不通風，座在鑊湯炉炭中，何術能令吹得滅、

清涼忽地療微躬、

故旧親知一々存，交情交態且休論，欲將古道律今日、

第做翟公須署門、

秋風吹得鬢毛皤，驚見光陰似擲梭，一夜愁眠難著去、

虫声更比昨霄多、

縲絏將母公冶同，遙々檻送忽來東，一身有似獸居籠、

何日得如禽脫籠，愁慮不離幽室底，夢魂多到故園中、

母悲妻泣女兒哭，吾道方知在固窮、

禁錮逢春意惘然，侯家托迹果何緣，陽和解凍非多日、

憂懼離家已二年，心不怨尤須守己，身無垢滓欲呼天、

吹噓願借東君力，得見梅花楊柳妍、

南冠一室似鐘儀，兔走烏飛徒爾為，倚伏原知機暗寓、

光陰只見箭遙馳，擬將甘旨供慈母，更把唔啞課幼兒、

偏願山妻能替我，惟斯二事幸無違、

東風猶未定寒溫，独在陰房淚拭痕，半榻起居慎眠食、

一窓明暗弁朝昏，觀花聞鳥渾無得，如響似聳奚復言、
昨夜宛然鄉夢裡，始看春色滿家園、

寒尽暖回要有期，單身待問在天涯，母妻子女忝懷我、

憂悶悲愁將訴誰，千里來祈事昭雪，一朝漫被世嫌疑、

只知煦嫗恩華渥，須待冰消凍積時、

淚眼枯來殊愴情，蕭然悶座憶神京，室牢無隙窺春色、

窓窄有時間雨声，俟命未知何罪戾，叩心自保個精誠、

奈吾母老子猶弱，跋扈深慚誤半生、

客歲離京見雪飛，爾來何計素心違，黃梅熟処雨方到、

杜宇啼來人未歸，雲霧濛々遮帝闕，夢魂夜々向慈闈、

又驚容易炎涼變，今日侯家給葛衣、

時光如水互推遷，徂暑過來秋立天，事觸禍機空否塞、

家丁厄運奈屯遭，懷鄉心比籠中鶴，苦熱身如火裡蓮、

堂上老親頭雪白，倚闥待我眼必穿、

迂疎罹罪独酸辛，空憶高堂白髮親，寧可一朝求解脫、

豈容幾歲委沈淪，行藏今日須關連，禍福由來只在天、

定省恨吾虚子職，國家寬典仰深仁、

竭來久已歎羈留，回首鄉畿只淚流，憶母憶妻仍憶子、

經春經夏欲經秋，泉蘿烟月負初志，鬢雪鬢霜添隱憂、

自顧身辺無筆硯，不知那処賦登樓、

聞婦雁有感

罄々底事背花飛、憐汝及時知所婦、自恨人生不如鳥、
逢春未得向京畿、

咏梅自遣

枝幹豈為時世故、合得清氣返春光、縱令棄在荆榛底、
不失天然鉄石腸、(鉄心石腸力)

夢梅覺而有作

処々梅花如雪^(散之)、室中不得見清姿、分明一夜婦鄉去、
夢向家園看一枝、

夢到一処、有大桜樹、爛熳如雪、數客宴花下、

間有一二相識者、乞余作詩、援筆賦此、覺而不

失一字

一抹華嚴法界雲、仙葩縹緲吐奇芬、共來花底通杯杓、
也勝東山客作群、

夢觀壁間桂一軸、画玉蘭、無款印、恍然有作、

粉筆描来玉放香、璠姿朶々燦生光、壁間披得乃相對、
不是徐熙定趙昌、

擬西婦出関作、消悶

一輪紅旭潑春暉、岳雪光融映客衣、意氣揚々真自得、
蒙恩今日向西婦、

匹馬揚鞭去不遲、杜鵑時節發婦思、春風三月駿州路、
岳色江声渾是詩、

憶伝燈録中事、作此自遣

冷座宛如無事僧、朝昏任運只騰々、発研慧劍長三尺、
放下一身閑葛藤、

端午書感

竹風葵日識靈辰、仍見依然縲縛身、閑誦離憂空自遣、
便知我是独醒人、

夢岳而作

晨昏莫不憶慈幃、恩赦何時向帝畿、昨夜岳靈来入夢、
分明对我報西婦、

偶成五絶

風露入孤枕、冷然肌骨清、無端喚愁思、秋近一葦鳴、

七月廿一日見鶴

清唳無端聞半天、臨霞玉羽影蹁躚、喜他直引婦思去、
一翥凌風向日辺、

中秋得二絶

良夜誰家不設筵、愁人掩淚独潸然、靈娥自是無我照、
分影到吾衣袖辺、

年々依例賞中秋、每作綠鳧川上遊、今夜誰人最思我、

酒盟詩伴月波樓、

八月廿七日恩赦放歸誌喜

忽伝恩赦報佳音、未減便知殊沢深、身似孤雲出層岫、
跡同独鶴向遙林、放歸本是因天意、侍奉惟須慰母心、
悲喜交併恍如夢、路岐延佇淚難禁、

總計六十篇

附録西帰途上三篇西帰途上得詩十余篇、草藹散佚、不復
省憶、錄其存者三首、他日亦補錄也

九月三日、宿湯本、浴泉、

温泉感涌碧泓々、靈液如蒸徹底明、浴得一身無垢滓、

夢魂今夜宿華清、

九月七日島田駅訪置塩菜一遂留宿

堰川東畔訪精廬、京国相逢六歳余、千里人帰雁飛処、
重陽節近菊開初、洗心宛喜我顔方改、依旧荷君情不
疎、一夜憂愁総消尽、秋灯影裡話琴書、

重陽日過菊川

疎颺冷雨透征裳、客路何辺望帝郷、山店強呼一杯酒、

黃花川上作重陽、

予昨夜酩酊、灯下詠東坡集選、有陳繼儒叙、有云長公
自西齋中、更擯竄流落於蜃塢獠洞之間、出入掉弄於悍
相獄吏刀筆之手、幾不以身免、而患難死生、非惟不足

為公困、而反足以為公文章翰墨之助、鉄之鎔而成金也、

乳之出而為酪也、予因而論之從盲史腐令而下、至於韓
柳、無悉不然者、文章之道、非鉢心瀝腸、則幾不易到
極地乎、然決非人之可試者、今不幸而或有試之者乎、

庚申之杏月

鴨灣漁伴醉題

一四四 参考 鈴木大日記鈔

一四九

方今内憂日ニ深く、外患月ニ迫マリ天下ノ變測ルヘカ
ラス、窃ニ聞ク聖上深ク之ヲ憂ヒ大ニ宸襟ヲ悩マセタ
マフト、誠ニ恐悚ニ堪ヘス、然ルニ幕吏ノ為ス所、華夷
混淆冠履顛倒シテ一日ノ苟安ヲ偷メリ、苟モ人臣タル
モノ誰カ敢テ慨嘆憤激セサランヤ、今ヤ教孝等同盟ノ
士協力シテ、姦魁并伊掃部ヲ櫻田門外ニ斬戮シテ、馳
セテ近畿ニ来リ、將ニ諸藩ノ志士ヲ会シ(橋本左内・
西郷カ書翰中ニモ此事アリ)、勅意ヲ遵奉シ、幕政ヲ規
正シ、以テ大ニ皇運ヲ挽回セントス、蓋シ是奉アルハ
(龍児島・熊本・長州等ヲ云フ)
鎮西中国ノ志士モ亦皆諒知スル所ナリ、伏テ惟ルニ貴
藩先侯天資英邁夙トニ大志ヲ懷カレ、天下ノ為メニ志
(合形公)
慮ヲ尽サル、コト一日ニ非ス、侯今其遺業ヲ継カセラ
(茂久公)
レ、家声ヲ墜サス、干城ノ臣ヲ愛育シ、雄名已ニ今日ニ

盛ナリ、是レ志士ノ深ク景慕婦依スル所ナリ、侯若シ此
機ニ乗シ、鎮西中国ノ志士ヲ鼓舞シ、大挙シテ禁闕ニ趨
カハ、則四方必ス響應シ、内憂外患ヲ剪除シ、洵ニ以テ
宸襟ヲ安シ皇威ヲ輝スニ足ラン、教孝馬首ヲ迎ヘ學生
ノ力ヲ効サンコトヲ是レ期ス、伏テ請フ英断アランコ
トヲ(此書伏見邸ニ於テ汾陽彦次郎受領、国老等ニ示シタルヲ
没収シテ、茂久公ノ覽ニハ供セサリシト云、果シテ然ラン乎)

一九四ノ二
有村次左衛門

有村次左衛門名ハ兼清、薩摩藩士ナリ、兄ヲ雄介ト曰
フ、人ト為リ沈毅ニシテ果断アリ、安政ノ初メ兄雄介
ト共ニ江戸ニ抵リ、広ク天下ノ士ニ交リ、同藩ノ志士
岩下(方平旧名)佐次右衛門・大山格(綱良)之助・堀仲左衛門等ト力ヲ戮
セテ東西奔走シ、時弊ヲ矯メンコトヲ謀レリ、殊ニ水
戸藩士金子孫二郎・高橋多一郎トハ刎頸ノ交リヲナセ
リ、井伊掃部頭権ヲ幕府ニ擅マ、ニシ、公卿諸侯ノ賢
者ヲ幽閉シ、数多ノ志士ヲ(マ)殺セシヲ見テ、心大ニ之
ヲ憤リ、兄雄介ト孫二郎多一郎等ト謀リ掃部頭ヲ刺サ
ントス、三月朔日孫二郎カ潜舎ニ於テ、佐野竹(光明)之助・
齋藤監物等ト密会シテ要撃ノ順序ヲ議シ、即事ヲ書画

会ニシ托テ席上ノ合作ヲ催フセリ、次左衛門席上歌ヲ
詠シテ曰ク、

岩金もくだかさらめや武士の

國の為めにと思ひきる太刀

既ニ其日ニ至リ、次左衛門ハ竹具足ヲ身ニ着ケ、籠手
ヲ用ヒ擊劍ノ時ノ状ノ如クシ、頗ル烈戦シ遂ニ進テ掃
部頭ノ首ヲ断チ、之ヲ刀尖ニ貫キ、阿兄何心涙潸々、為
義為仁在此間、孤標柱頭千載後、旅魂依旧返家山ト明
人ノ詩ヲ高吟シ去ル、而シテ其首ヲ提ケ龍ノ口門ニ至
リ、創甚クシテ歩行スルヲ得ス、辻番所ノ傍ニ於テ咽
ヲ貫ク、未死ナス、番人等出テ故ヲ問フ、創口ヨリ声
漏レ明ナラス、因テ手ヲ以テ創ヲ押へ、僅カニ之ヲ告
ルコトヲ得タリ、番所ニ引上ケ介抱スレトモ刻ヲ移サ
ス死セリ、次左衛門頭上刀創長サ四寸・深サ七分、左
ノ手ノ首ナシ、是レ掃部頭ノ襪籠ニ手ヲ入レシ時、傍
ヲヨリ切落サレタルナリトイフ、携ヘタル所ノ刀長二
尺六寸、無銘ニテ、鞘ハ其場ニテ落セシナラン、烟管
ノ竹ニ忠義ノ二字ヲ彫リ、又一首ノ歌アリ曰ク、

君の為め尽す心は武蔵野の
野辺の草葉の露と消ゆとも

初メ孫二郎等江戸ニ至リシ時ハ、大山・堀等ノ諸士ハ皆国ニ帰リテ、唯次左衛門兄弟アルノミ、次左衛門ノ独リ此拳ニ加ハ、リシコトハ、孫二郎ノ伝ニ詳カナリ、次左衛門曾テ一ノ名刀ヲ得タリ、心窃カニ悦ヒテ其利鈍ヲ試ミントス、夜ニ乘シ閑寂ノ地ニ出テ、人ノ来ルヲ待ツ、一老媪アリ、杖ニ倚テ来ル、之ヲ見テ忽チ側隠ノ心ヲ生シ、彼年老ヒ命モ亦且夕ニ迫レリ、何ソ之ヲ斬ルニ忍ヒンヤ、因テ止ム、翌夜又出ツ、人アリ、年四十許リ、一函ヲ肩ニシテ来ル、次左衛門又哀憐ノ情ヲ起シ、彼レ妻子アラン、彼レ若シ死ナハ妻子ハ路頭ニ迷フベシ、又遂ニ去ル、其翌夜又出テ自ラ思フ、哀憐ヲ以テ人ニ加ヘハ何ノ時カ利鈍ヲ試ミン、因テ意ヲ決シテ待ツ、時ニ夜深ク微雨蕭々トシテ烟雲月ヲ隔ツ、一士人ノ蛇ノ目傘ヲ携サヘ、一ノ谷ノ謡曲ヲ唱ヒ、微酔緩歩シテ次左衛門カ側ヲ過ントス、即是レ斬ルヘシトシ躍テ刀ヲ下ス、其人忽チ次左衛門ヲ取テ数歩ノ外ニ投ス、驚キ起タントスレハ其人来リ捉ヘテ曰ク、汝試斬セントスルカ、止メヨ、人命ハ輕キモノニアラサルナリ、因テ去ル、次左衛門地ニ伏シテ仰キ見ス、稍アリテ之ニ追及シ、言ヲ恭クシテ罪ヲ謝シ、故ヲ告

ケ其名ヲ問フ、士人笑フテ答ヘス、再三之ヲ強ユ、士人曰ク、予ハ千葉周作ナリ、周作ハ當時擊劍ヲ以テ都下ニ鳴ル人ナリ、次左衛門驚キ跪キ叩頭シテ、直ニ入門教授ヲ乞フ、周作首肯シテ別ル、翌日周作ハ門人ニ前夜ノ事ヲ語り、入門ヲ許セシト雖モ彼来リ見ルノ面目ナカルヘシ、語未タ終ラサルニ次左衛門刺ヲ通セリ、是ヨリ日夜奮勵遂ニ其術ニ長シ、櫻田ニ出ルノ前数日猶千葉氏ノ門ニアリト云フ(此事本藩ニハ伝ハラス)

一九四ノ三

初夢

有村兼清

初春にふしの高根に登りけり

御神にいのる夢を見るかな

故里の花を見すてゝまかふ身ハ

こや此春を思ふはかりに

吾妻ニテ都ノ花ヲ思ヒテ

ならはしの吉野の桜如何ならん

東の花ハ今さかりなり

いやたけき神に誓ひて武士の

思ひいるやはとはらさらめや

事あらハ告げよ隅田の都鳥

同しうきねの友とおもへハ

さきいて、散り行ものは武士の

道に匂へる花にそありける

一四日市之儀過便申上候、右ハ三人薩之手ニテ召捕、大

坂藏屋敷へ連レ参リ相札候所、(伏見路ノ邊) 全外ニ一人初メハ薩ト

申、追テハ水人ト申候ヨシ、右ニ付薩ニテモ困リ、水

人ナラハ召捕モ不致筈之由ニテ、京師石川方へ掛合相

成候所隙取レ候ニ付、伏見奉行へ指出シ、有村ハ国法

ヲ犯シ候者トテ、夫ヨリ国へ送り候由ニ御座候(大久

保利通日記参看)

此頃承ル、有村モ 公辺ヨリ指出候達ニ相成候ニ付、

出船相成候間、引戻次第指出可申旨申出候由ニ候、

一高橋父子大坂天王寺ニテ自殺云々、廿二日之条ニ詳ニ

候間、此へ略ス、

一九四ノ五

十六日三月(七カ)

一此日承ル、御預ケ之族センサクニ、井伊ヲ打取候ト申

儀ハ間違ニモ可有之ト度々被申候得共、駕籠之中ヨリ

引出シ無相違切リ候ト申事申張り候ニ付、松伯州始メ

当迫イタシ候所、池田暫之内思案之様子ニテ申様ニハ、

夫ハ此間中其方申立候得共、実ハ我々始メ其方不申候

トモ、何レモ承知之事ニ候、然ル所右様申張候テハ、

御主人家之為メニ相成候ト存シ候哉、為メニ不相成事

ト存候哉トノ申聞ニテ、始テ間違候敷モ不存ト申直シ

候由ニ御座候、(市之進乎) 原市

一御預之族此間御センサク之節、井伊殿之首ヲ取り候杯

申候得共、掃部頭殿ニハ御怪我ハ有之候得共、無事ニ

御帰宅ニ候、左候得ハ定テ近習之者杯之首ニモ可有之

候、井伊殿之首ト申ハ定テ心得違ニ可有之候ト申候へ、

ハ、挨拶ニ成程心得違ヒ候敷ハ難計候得共、掃部頭殿

ニハ定テ御駕籠ニテ御出仕ト奉存候、御駕籠ニ乗り候

者掃部殿ニ候ハ、屹ト御駕籠ヨリ引出シ打取り申候、

尤御駕籠ハ近習之者ヲ為乗、御自分ハ步行ニテ御通り

ニテハ間違候敷モ難計杯申候ニ付、奉行モ逗迫之由ニ

御座候(事実ナリシト)

一先日諸大名不時登 城之節、加州侯ハ不快申立不罷出

候、又諸家共人数手当テ大騒キニ付、加州家来モ主

人へ申聞ニハ如何様ノ事有之候敷モ難計候ニ付、是非

何ト歎御手当ニイタシ度ト申候処一向不聞入、家来之者達テ申聞候ヘハ、左様ナレハ供方三四人モ増シ候様ニトノ申聞ケニテ、一向取合ヒ不申落付居候事ニ御座候、尚又(烈公)上様御後見トノ風説有之候処、万一其節ハ御辞退外ハ無之由申居候由ニ御座候、

一 井伊家ヘ達書別紙之通りニ御座候、別紙白半切ニ御座候、

一 御預ケ之族申事ニ、此度ハ昨年杯之如ク好キカゲン之御所置ニテハ、此上我々同志之者数百人御座候間、如何様之事モ可致候間、昨年ノ如クニ無之義理明白ニ御裁許願度杯申候由ニ御座候、

一九四ノ七
追加十九日御国除目(水戸藩)七十人余、尤モ隠居召出等故略之、左之分ノミ認、

- 御小姓頭取 青山勇之助
- 御矢倉奉行 萩(君寛)清衛門
- 御普請奉行 村田正五郎
- 御書院番 渡邊富之進(明之)
- 御小納戸 小池水之助
- 御書院組頭 三木源八

小十人列御次詰

- 大胡(實忠) 津藏(兵藏信忠)
- 小川留之助(重善)
- 菊地三左衛門

同日江戸除目

御国御普請奉行

- 真木彦之進(景明)

達御用

定江戸

- 原田八兵衛(成徳)

一九四ノ八
閏三月十七日

(信隆、繁城平藩主) 安藤對馬守ヨリ貞阿彌ヲ以、御城附共ヘ一紙ニテ相渡候書付写

神奈川御開港、外国貿易被 仰出候ニ付、諸商人共一己之利徳ニ泥ミ、競テ相場糶上ケ、荷元ヲ買、直ニ御開港場所ヘ相廻候ニ付、御府内入津之荷物相減、諸色払底ニ相成リ、諸人難儀イタシ候趣相聞候ニ付、当分之内左之通り被 仰出候、

- 一 雑穀 一 水油 一 蠟 一 呉服、一 糸

右品々ニ限り貿易荷物之分ハ、都テ御府内ヨリ相廻シ候筈ニ候間、在々ヨリ決テ神奈川表ヘ積出シ申間敷候、尤貿易之御仕法相改リ候儀ニハ無之候間、御

府内問屋共方へ積付候荷物之内買取貿易イタシ候儀

不苦候、右ハ御府内日用之品潤沢之為被 仰出候儀

ニ候条、国々荷元ニテモ其段相心得、貿易之儀ヲモ

見込、成丈ケ御府内へ多分荷物積廻シ候様可致候、

万一右触面之趣相背モノ於有之ハ、無用捨吟味之上

嚴重之咎可申付候、

右之通り御領ハ御代官、私領ハ領主・地頭ヨリ不洩様

可触知モノ也、

右之通可被相触候、

右之通相触候間可存其趣候、

閏三月

一四九〇
一閏三月三日付書状写

大坂生玉社地座敷借用罷在候中山家司之由島男也方ニ

浪人立入、町奉行組支配召捕罷越候処、去ル廿三日曉

同人宅ヨリ兩人拔身ヲ持立退、天王寺境内ニ逃入候ニ

付、同寺門ヲ取囲候内、同寺役人小川欣次兵衛方へ

逃込、玄關ニテ兩人共自殺イタシ候モノ、

水戸殿家来

短筒銘々名前書記

高橋多一郎

指物所持之由

四十七八才

悴 庄左衛門 (備前)
廿三才

同断

同時島男也宅近辺ニテ

篠原源三郎 (川崎健将)
廿四才

自殺仕損召捕入牢、翌日死

同断

大坂ニテ召捕多一郎一味之者 山崎彌蔵 (森丸)

同領常州安積村郷士 (貞之介貞徳)

同断

内藤 貞助

同 郷士

堺ニテ召捕

大貫 多介 (則光)

四日市ニテ召捕

金子孫次郎 (教孝)
佐藤鐵三郎 (教寛)

右五日出立、十九日着イタシ候積ニ御座候、

伏見与力四人 同同心拾二人 用人一人

目付一人 物頭一人 足軽五人

徒士二人 京町奉行同心二人

所司代与力二人 同心二人

右之外乍春下候節之通り、領主・御代官ニテ厚ク手当

有之候、

(四糸錦小路ニ在リ)
錦烏丸

サツマヤシキ

(徳田・橋本)
召捕ニ相成ル

下役二人

御所九門番人嚴重ニテ、夫々姓名ナノラセ、駕籠ノ者
ハ下乗ニテ姓名申通シ、京地ハ何等之儀無之事、

一久保木信太郎事召捕相成リ候処、直ニ江戸へ指出不申

ソココ、ト泊リアルキ候ニ付、父ヨリ手ヲ廻シ金ヲ遣

ヒ候ニ付、遂ニ船橋ヨリ返シ候由、此ハ八州等少々之

事ヲ以テユスリ候為メニイタシ候様子ニテ、久保木ニ

テモ四百金程モツカイ候様子ト申候事、

一(九四ノ一)

薩侯參勤国元発足、筑後何処(失念江戸ヨリ二百里計ノ所)迄參候処、不快

ニテ療治ヲ加候得共、途中之儀指支候ニ付、一ト先ツ

引返シ候ヨシ、是ハ三月廿三日之事也、右之次第公辺

へ委細ニ申上候処、病氣平癒之上參府イタシ候様相成

候ヨシ、此方へモ以使申入御座候ヨシ、

一(九四ノ二)

三月十七日差出

兼テ御届申上候家来有村雄介儀、東海道於四日市駅、

(手帳カ)

不明之捕者ト相心得、大坂表へ連越国元へ指下シ候処、

右ハ公儀御尋者之由ニテ、酒井若狭守ヨリ可指出旨、

去ル十六日伏見奉行所ヨリ達之処、最早出船後ニテ追

駈船指出シ引戻候様達有之、右之通取計候旨大坂表ヨ

リ申越候段、御用番へ一昨夕家来ヨリ御届申上候、

以上(後葉速記録参照)

三月廿六日

(島津茂久、薩州藩主)
松平修理大夫

一(九四ノ二)
此比(美ノ目方也)見 勅言之写

改元 勅言

詔、皇猷修明、万邦自能協和、政教叢往、則皇天必降

災眚、天譴影響人事氷答、(本ノマ、谷カ)可不畏哉、(可不慎哉脱カ)朕叨以庸昧之

躬、辱踐大宝之祚、夕尽惕若乾々之心、朝致鷄孳々之

思、去年武蔵国有火災、大藩鎮為灰燼、因政令之不節

教化之不行、況復蛮夷要和、事情雖穩、(將脱カ)浜海為市、旧

制雖復、如何天意、恐失民望、加之、地属流行、黎庶

天傷、災眚如茲、咎在 朕躬、宜革旧号、以施新元、蓋

与物更始之儀也、(義カ)其改安政七年、為萬延元年、大赦天下、

今日味爽以前、大辟以下、罪無輕重、已發覺・未發覺・

已詰正・未詰正、咸皆赦除(但犯八虐、故殺・謀殺・私

鑄錢・強盜二盜、常赦所不免者、不在此限、又復天下今年半
橋、老人及僧尼、年百歳以上、給穀四斛、九十以上三斛、八十
以上二斛、七十以上一斛、庶幾伝昇平於無疆、除妖孽
於未萌、普告天下俾知朕意、主者施行、

萬延元年三月十八日

〔日本年号大観にて補註〕

一九四ノ三七月
六月

今日着南奇左之通り拔書

一 去朔日大久保隅州〔江戸ラ云〕附〔忠忠〕禁裏

下着、重大之御品持參、登城

相成申候処、善悪于今不相分候得共、夫ヨリ十七囚モ
処置モ急キ候ヨシニテ、昨日松平伯州宅寄合決議ニモ
相成可申ヨシニ御座候、右重大之品之儀ハ俗間之説区
々更ニ突留不申候、少々屹トイタシ候処ニハ更ニ分ラ
ヌヨシ申候、一体之形勢ハ何レニモ宜敷、尤極秘ニハ
候得共、幕ヨリ御拜借七万程モ濟可申ヨシニテ、昨
日尾執閹老ニ被越候事ニ御座候、此儀ハ御秘シ専ラ相
願候、上野方必至ト周旋、勅尊キ御品之儀、上野ニテ
預リニ相成可申ヨシニ御座候、責テモト奉存候、奥勤
戸川播州・村松備州何レモ水土之腹心ニ御座候処、何
レモ閑地へ御転シ相成申候、右等ニテ推察仕候テハ為

〔差支ハ有之間敷、外夷之儀ニ付テ之御事ト奉存候、今
〔Coward Hight アメリカ公使〕
日ミニヌストル登城被仰出候処、延ビ可申由ト混雜之
事ト奉存候、

一 會藩人崎陽ヨリ帰り候者之説ニ、清ニテ長髮人頻ニ蜂
起、号称百万人争テ髮ヲ長スル事明末之剃髮之時ニ異
ナラス、清商妻孥ヲ携崎陽ニ寓シ乱ヲ避候者不少由、

一 禁裏附発足前議奏徳大寺殿免職之由、是モ吉凶ハ不
知、其事ニ關係之様人皆疑居申候、

一 尾崎執政閹老へ出候ハ

勅書御引上ト之事之由申候モノモ有之候、

一九四ノ一四

十一日閏三月乎

今日着南状左之通り拔書

一 鳳朔日之義極秘ニテ一切不漏、推察之説ハ紛々有之、
就中九州侯伯合従京師へ願候ヨリ出来候杯之説、夫ニ
付テハ尾・水・越等御慎解之意味ナリ等申触候、当時
之処ニテハ先ツ水府へ關係心配之事無之、別之事ナル
ベシト申居候、尤幕中モ大久保〔忠忠〕着後頗混雜之様子ニ相
見候ト申事、又京地警衛持之諸侯へモ別段非常ヲ戒候
様〔前卷ニ詳記ス〕達シアリ候趣、彦根へハ先月廿九

日比右之旨意ニテ、別段九條家ヲ守護イタシ候様之達有之候由(取締最モ敵ナリシト)、

大久保モ着之上登 城後引込候テモ居候哉、尤漏洩ヲ戒候故歟、僕從迄一切門外へ不出趣、昨日アタリ迄ニハ発足之説モ御座候処、如何歟未タ突留不申候、

一四日墨夷登 城、是ハ昨年之登 城御長上下ニテ御逢、

万事御扱不宜ト申憤リ、夫ヨリ其礼式ノ争論當年迄掛り候処、稍今度ニ至リテ押付、其礼式極ル為メ出候由、昨年之扱ハ魯夷(Carpenter, Brewer, Vaulerich)フーチャチン之見合ニテ扱候処、

彼申ニハフーチャチンハミニストルヨリ輕キ役之者、

夫ト同様之御扱ニテハ不相成云々、夫故此度ハ御三家同様之御取扱、一体ハ途中下座ブレ迄モアリ候積リ之見込ニテ、万事取ダリ致候様町方へモ達ニ相成候説モ承リ申候、勿論余リ馬鹿々々敷候事故、夫ハ無之候得共、殿中ハ夫位之事ト相見申候、

一右登 城相済候後、ハルリスヨリ御礼状様之物有之由、

其意ハ今度御丁寧御取扱ニ相成リ辱云々、是ニテコソアメリカ之ミニストルト申職相立候様ニテ大慶無此上、ケ様御礼遇アリテコソ 日本之御国威海外へ顯レ(可也)不申抔、自慢之口氣ヨクアヤマリ呉候ト申サヌ計リ之

御礼状之由、未タ一見不仕候、

一今日英夷ミニストル登城之由、勿論墨夷之見合ニテ出(九日也)

来候事ト相見申候、且是ハ昨年登 城之筈之処、大城御焼失ニ付延ビ居リ候ナリ、ハルリスハ嘆之ミニストル(Sir Rutherford Alcock イギリス公使)アーコックヨリ一段下等之事故、嘆夷之方ハ益御礼遇有之事ト相見申候、

一当時横濱交易頗ル盛ニシテ、先月中ハ十一ヶ国之船入津之ヨシ、是ハ多分廣東辺ヨリ冷却ニ參リ候者多可有之候、

一朔日之一件紛々之説之内、打払又ハ閣老御召等ハ如何歟、邸中皆含悦罷在候事ハ不分候得共、京師御閉居之御方御始メ東親藩御慎解之儀、又ハ此度之御処置一件等、屹度其内ニ可有之ト申居候、幕ニテ三奉行へ御掛合ニ相成候説モ御座候、其内段々相分可申候、

一朔日云々御品之儀、去月十八日伝奏御所司代之手ヲ不経、関白殿下ニモ御承知無之、大久保御呼出御渡相成候趣ニテ、取物モ不取敢十九日ニ発足罷下リ候ヨシ、一所司代酒井若州急ニ死去相成候ト申説御座候、実説ラシキト申事ニ御座候(虚説)

一四日ニハ墨夷登 城、大樹公御束帯ニテ拜礼被 仰

付候ヨシ云々 (事実)

一九四ノ一五
十七日全上

今日承ル左ノ通り、

一昨日要路運ビニハ十七囚モ近日処置可相成、其節ハ公
ハモ少々ハ御当リ可有之心配云々、

一關宿公是迄苦心致候事モ此度ハ少々安心ノ由、内話有
之候趣依テハ、此度ハ少々動キ候事ニモ相成候カト推
察有之由、

一姉小路京師ヨリ早々登リ候様申参リ登候由、

(福岡後)

一黒田島津ヲ幕ヨリ召出候風説有之候由、然ル処江戸屋

敷ノ者為指義ハ有之間敷候間、ヤハリ出候方可然ト申

候カノ事 (虚説)

右実説ニ候ハ、朔日ノ義西州諸侯携リ候義無疑奉

存候事、

一昨日南状今日届候分抜書左之通り、

一朝山当月朔日大久保大隅守様、

勅書御持参御着ニ相成候由、右ハ何等ノ趣意ニ御座候
哉、慥成事未タ承リ不申候得共、近來上方播州・攝州
海岸夷船数度到来致候由、定テ右等ノ義ニ付御下シニ

相成候哉ニ風説仕候、

一今日承ル分朔日ニハ

勅書御開キカ、如何カ、兎ニ角三日迄ハ閣老手元へ留
メ置キ、四日ニ申上、夫ヨリ京師へ往来、六日切りノ
書状出候由ニ御座候、

一此間中保内郷へ又々会集有之、廿人余ニテ斬夷ノ議評
有之候由ニ候、

今日除日

十五人扶持被下
学校辨り

武田修理

(伊賀旧名)
(正生 耕雲齋)

一九四ノ一六

一黒田ノ召ハ無相違トノ事、薩州引込故、親類ノ廉ヲ以

テ何カ為御扱ノ事ナルベシトノ推考、

一近々越老侯御再出ノ説承リ申候如何、

一江戸御先手組石川英吉・大和田熊十郎無願石尊参詣、

帰路横濱へ廻リ被差留、御懸合ニ相成候上神奈川奉行

溝口讚岐守ヨリ引渡ニ相成候事、

一十七日對州宅墨夷応接有之候、

一ホウ清兵又々長髪ト戦ヒ大敗ノ由、英佛ハ按兵未タ清

ト交兵ハ無之由、

一此度ノ義夷狄御所置ノ義第一ニ、右ニ付テハ人望ノ帰

シ候者ヲ上ケテ、天下へ号令ノ義、第二ニ、(松田ノ義)十七囚初
メ囚獄寛有^(寛カ)ノ御処置、第三、右ハ出処モ慥ニ候(當時
大問題)

一又一方ノ説右ト大同小異、是ニハ兵庫・大坂開港御止
メノ説有之候、

一又一方ノ説返 勅ノ義安藤ヨリ京ヲ誘ヒ候ニ付、其變
リニ夷狄御所置ノ義ノ由、

右何レモ突留メ候ニハ無之候得共、出所モ分リ候間御
含迄ニ得貴意候、

一老女綾ノ小路上京ニ可相成ヨシ、

一近頃安藤・内藤ノ内上京可相成由、

一九日ニ京師へ何カ参リ候由ニ候得共、其後評判無御座
候、

一近來市中邪宗ノ如キ者被行候ヨシ、

一此間ノ一分銀通用止メ候義モ一ノ妖變ト奉存候、

一福過日一分銀通用半直ニテ相成候ト、都下大動揺ノ処、
町触等出漸ク廿二日アタリ迄ニ静リ候処、廿三日アタ
リ又々大騒キニ御座候、何ハトモアレケ様下ニテ上ヲ

疑ヒ候テハ、乱ノ基ニモ可有之ト奉存候、

一九四ノ一七

八月八日大目付遠山隼人正ヨリ安藤對馬守申渡、

諸向へ相達候由ニテ、御城付共へ為心得為見申候

書附写、

西洋語ノ義當時専ラ御用有之事ニ付、御旗^(本)下・御家人

悴・厄介等右稽古望ノ者ハ、蕃書調所へ罷出稽古可致
候、尤居留外國人方へ稽古被差遣候義モ可有之候間、

年若ニテ人物相応ノ者相撰ミ、支配ニテモ右ノ趣厚ク
相心得、有志ノ者名前古賀謹一郎へ可被達候、

右ノ趣向々へ可被相達事、

八月

一九四ノ一八(三十七名)

一薩邸へ出候者之儀、幕ニテ大ニ処置ニ懲リ候気味有
之ト相見、幕へ引上ケ候モ張込ミ不申候様子ナレ共、

又此方へ引取候様トモ違シ無之、此方ニテモ幕へ対
シ引取候事ニモ不相成、薩ニテハ家老等其上之方ハ

何レカ^(脱カ)早ク渡シ度様子、尤モ下之方ニハ国へ遣シ
候外無之トテ周旋イタシ候者モ有之候由(上下云々事
ナリ、大久保利通日記參看)

一櫻田外一件処置ハ、其内死去ヲ待テ候様ノ気味有之歟
ニ候ヨシ(稍事実ニ近シ)

一 去月十五六日之頃、麻布ニテ魯西亜人薩人ニ被切候

儀、(生)両説ニ相成居候、其上死去モ、(生)両説ニ相成居候ヨシ

故、次第ハ此ニ略ス、追テ可糺(全ク道路ノ説)

一 物価沸騰之儀 幕吏モ患トスレトモ、又平均候上ハ銀

価賤敷相成候ノミナリトテ、夫ヲアテニイタシ居候敷

ニモ相聞ヘ候事、

追加

十八日除目十五人アリ、要路ノ外略ス、

御吟味役

御蔵奉行

齋藤市衛門(利也)

御徒目付

奥御右筆

大内市五郎

同

御徒組頭

郡司五三郎

十九日除目五人同上

御小姓頭取

五十石御足米
世子御侍保

安食喜八郎

書記魁

大御番列

小田部幸吉

外ニ親類ヘ達

二十人扶持

安(信立)嶋 跡

五人扶持宛

茅(委)根 跡
鮎(國難)澤 跡

十八日当朝

慎御免

矢野(長道)長九郎

四人

住谷可之助
齋藤佐次衛門(右腕)

濱田 平助

(一九四ノ一九)

今日承ル、(水戸領内)昨朝ヨリ湊沖ヨリ川尻迄之内売船漂居、南

風ニハ北ヘ颯リ、北風ニ変シ候ヘハ南ヘ走り候ヨシ、

翌々日承ル、右船十四日夕ニハ水木河原子一里半余之

処ニ漂居リ候ニ付、河原子之漁父(志)四五人小船ニテ乗寄

候ヘハ、彼ノ大船ノ縁ニ婦人・子供大勢居リ云々、三

人乗移リ婦リニ書付ヲ出シ候ヨシ、写左之通、船ハ裂

ケ候処有之、船底ニハ四五人不絶水ヲ汲ミ居候ヨシ、

我同汝乃是全種全類之人、不是匪類人等、乃係大清

国廣東廣州府、人民歎往金山取金、是以在香港落花

旗船、但因在半途遇着狂風大雨、弊敗船底、是以歎

灣泊汝盛境大埠、但我現下未知大埠在何処、故懇大

義大徳之人、千祈緊救帶我入港、埋埠修整帶到大埠、
謝切勞銀十員、

以上一紙

此船因大風打漏、欲埋埠修整、不知水路、求係帶引
不知係肯否、此処埋埠有多遠此所紙サケタリ、
以上二紙

大清國廣東廣州府等三百余人、雇船載貨往旧金山埠
求財、因被大狂風打漏此船、不能前進、今埋盛埠修
整不知水路、水口入埠敬求盛埠、先生指示祈即着小
船出口帶引倘得埋埠、親当拜謝、

中華民國印等以上
一紙

日本大國師尊照

一九四二〇年十一月廿七日
一薩侯三年在國之儀ハ、無相違事ニ御座候(稍其実ヲ得タ

リ)、堀割腹之儀モ実事ニ候、安藤ト激論イタシ其後(機部)

之事トゾ確説ハ不得、對馬・箱館拜借之儀ヲ英ヨリ願
候ヲ、堀ハ不宜トテ論候処、安藤モ例之エセ者ナレハ
容サザルノミナラス、余程詰リ候歟、夫ヨリシテ前文
之儀ニモ至リ候歟(上記ノ如シ)

(小番号四から二〇まで鈴木大日記(國立公文書館所蔵)にて補註)

万延元年 (1860)

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
萬延元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料
(紙數七十一枚)」の記載あり〕

目録

井伊直弼遭難第一報
井伊家遭難ノ報ニ依リ御帰国布告
扈從国老川上式部ニ出府ヲ命ス
人心鎮撫ノ布達
島津左衛門出水郷ニ奉迎ス
隣藩及ヒ京攝ニ探訪ヲ出ス
御宿泊順次及ヒ御発病御帰国ノ事実

御病症布告

京都藩邸徳田大山町奉行所ニ召喚セラル

参考 江田平太郎日記鈔

当時世上ノ説

井伊侯届書

島津左衛門出府

江戸邸守衛人員入費ノ概算

茂久公御参覲御猶予布告

参考 道島正亮記事鈔

末藩佐土原内訓 (田中源五左衛門日記)

寺師宗道市來廣貫へ送ル建言大意

江戸藩邸在勤某井伊家遭難ノ報告

〔三月五日〕 在江戸某カ書信及ヒ或ル人筆記

藩士某当時ノ形勢或ハ巷説報告

熊本藩士某友人某ニ報告

有村兄弟藩主へ捧ケタル書

井伊家届書

水薩浪士各自懐中書

浪士脇坂閣老へ出訴

浪士各藩へ御預人名

府内警衛達書

水戸家へ達書

町奉行御目付へ達書

水戸殿屋敷警戒

水戸浪士預ヶ替

當時ノ形況世説一般

〔三月朔日（一挙前々日）〕 人相書ヲ以踪索人名

茂久公御引返急報

参考 庚申轉蓬録鈔〔日録〕 〔關鉄之介日記〕

参考 佐土原侯書翰 〔宛名送之〕

以上、

一九五 井伊直弼遭難第一報

庚申三月廿三日 太守久茂公御參覲御途中、筑後国松崎

駅ヨリ大至急飛檄着魔ス、報ニ曰ク、本月三日江戸外

櫻田ノ街上ニ於テ、大老職井伊掃部頭直弼殿ヲ水戸及

ヒ本藩浪士ノ為メ横死ノ事実セラレタリト、豊前国小

倉本陣村上銀右衛門報告左ノ如シ、

江戸表大変、三月三日ノ朝井伊掃部頭様御登城掛、

御駕籠へ水戸様御家来拾七人ニテ仕掛ケ、御駕籠ヲ

刺シ通シ御首ヲ討取り持去候趣、右人数之内七人肥

後様細川侯 江御預ニ相成候次第、昨夜半承及申候、中

途極急キ仕立ヲ以此段御進申上候、以上、

三月十九日

村上銀右衛門

中村善兵衛様

村上ナル者ハ、從來小倉駅定宿屋ニテ、太守様江戸御往来ニモ

宿泊セラル故ニ、御本陣トモ唱ヘタリ、茲ヲ以テ内外用達ヲモ

兼ネ、臨時ノ報告或ハ探訪等モナシテ、用弁セシメタリ、○這

ノ報小倉ニ達シタルハ、凡ソ二十一日間ノ長キヲ経タリ、尋常

ノ飛檄モ十日間位ナルニ、斯ク遅延セシハ、非常ノ警戒駅々ノ

検査、或ハ人馬ノ継キ立テニ時間ヲ耗シタルニ因レリト云フ、

○中村ナル者ハ、御趣法方金方役ノ職務ナリ、

一九六 井伊家遭難ノ報ニ依リ御帰国布告

太守全様御儀、此節就 御參勤、御中途筑後松崎駅迄

被遊御通行候処、御病氣ニ付同所へ一日 御滞在、一

昨廿三日 御引返シニテ、被遊 御下国候段御到来候、

此旨表方へ致通達、奥掛御勝手方へモ可相達候、

三月廿五日

但馬川上久運

一九七 扈從国老川上式部ニ出府ヲ命ス

一九七ノ一

川上式部殿久美

右ハ御參勤御供被 仰付、(福岡県三井郡)松崎駅迄被召列候処、江戸

表御内用之儀有之、同所ヨリ急ニテ出府被 仰付候段

申来候、此旨表方へ可申渡候、

三月廿五日

但馬川上久運

如此御途中ニ於テ、御発病ノ名ヲ以テ御帰国ニ就キ、御届等ノ

(朱)「御小納戸頭取」(爲正)

爲メ、御用取次山田壮右衛門及ヒ藩庁筆吏袁田伝兵衛等ヲ從へ、

昼夜兼行出府セリ(閏三月十一日江戸邸ニ着シタリト云)

一九七ノ二

奥医師

朝稻三益

右ハ 太守様御中途ニ於テ御病氣ニ付被差越候条、夜

白急ニテ可差越候、

三月

伯耆島津久福

如此医師ヲモ被遣タルハ、全ク御病氣御引返シ、御帰国ノ届出

ニ対シ表面ヲ装フタル者ナリ、

一九八 人心鎮撫ノ布達

今度於江戸表混雑之訳合有之、右ニ付色々雑説申触候

段相聞得、人心動揺致候テハ決テ不相濟御時節之事情

条、弥以 公義之御法令ヲ相守、御国家ヲ大切ニ存シ

聊不紊礼讓、夫々支配頭之可随下知候、万一御国法相

背候者於有之テハ、無用捨可及取扱候、此旨向々へ早

々致通達、諸郷・私領へモ不洩様可申渡候、

三月

筑後川上

但馬川上

登 久包

江戸ノ飛報達スルヤ、有志連中ハ御中途ニ向テ馳セ出ントシ、

既ニ窃ニ脱出シタルモアリ、或ハ大久保等同党ノモノハ予テ期

シタルコト故、突出セントスル形勢ナルニ依リ、藩庁ハ大ニ憂

ヒ漸ク鎮静シタリ(大久保利通日記参照)

一九九 島津左衛門出水郷ニ奉迎ス

島津左衛門殿久

右ハ此節就 御帰国、爲伺御機嫌御中途迄被差越候条、

出水ヨリ御供 被仰付候、左候テ旅服可相用旨被 仰

付候段申来候、此旨表方へモ可相達候、

三月

但馬川上久運

二〇〇 隣藩及ヒ京攝ニ探訪ヲ出ス

三月廿五日京坂又ハ近国ノ事情探偵ノ爲メ、郡山一介

(休右衛門)

官原山水二人共、商人波江野某・酒匂某・山下某等ノ数

名ヲ派遣ス、郡山ハ書家ノ有名ニテ、若年ノ頃ヨリ京

坂・大和辺ヲ漫遊シ、他邦ノ事ニ通シ知己ノ人多ク、

中ニモ天保ノ中頃、幕府ノ間諜間宮輪藏（林ニモ作ル、何レ乎是ナリヤ）ニ從テ諸國ヲ

廻リタル者ナリ、二百年來昇平ノ世ナリシ故、今回ノ

如ク顕要ノ人ノ遭難ハ未聞ノ事ナルヲ以テ、各藩ニ於

テモ大ニ注意シ、大小藩共此報ヲ聞ヒテ多少ノ人数ヲ

江戸ニ出セリト、隣藩細川家ハ報告ニ接スルヤ、当日二

百余名ヲ出シタリト、熊本藩士津田三二郎（信弘）ナル者本藩

某へ密報、彦根ノ動揺一方ナラス、志アル者追々脱走

シ、水戸ニ向フモアリ、鹿兒島ニ入ラントスルモア

リ、既ニ過日ハ三十余名（群カ）一郡ノ行商、清正公參詣或

ハ商事ト唱へ入薩ノ手段ヲナシ、比奈久・八代・水俣

辺或ハ天草辺へ渡リタルモアリシト、或ハ日向ノ諸所

へモ入込ミタリ、延岡侯（内藤備後守）ハ井伊掃部頭ノ縁続ニテ

云々、注意アルヘキ旨密報セリト、此津田ナル者ハ彼

藩士ノ中ニ有志者ノ一人ニテ、先年來本藩關勇助及ヒ

山田清安・西郷隆盛等ト国事ニ竭シタル人ナリト云フ、

二〇一 御宿泊順次及ヒ御発病御帰國ノ事実

二〇一ノ一

太守公本年御參觀御定年ニテ、二月六日府城ヲ発セラ

レ、同夜伊集院苗代川、同七日向田（川内市）、八日阿久根、九

日出水御宿泊、十日肥後日奈久駅夫々順次大呈御渡海、

中国・東海道御通行之予定ナリ、扈從國老川上式部（美久）、

御側役山口直記（利記）・山田壮右衛門等扈從ス、同廿三日筑

後國松崎駅御泊ナリシニ、井伊家遭難ノ飛報到達、廿

四日同駅ニ御淹滞、御発病ノ旨ヲ以テ、同廿五日御引

返御帰國ノ途ニ着カレタリ、國老川上ハ御届ノ為メ、

同駅ヨリ昼夜兼行江戸ニ赴ケリ（大久保利通日記對照）、

江戸ノ飛報達シ、藩士有村次左衛門及ヒ同シク雄助兄

弟カ、一般ノ驚愕一方ナラス、太守公ノ御進退困難ニ

迫リタル故、山田壮右衛門（御小納戸頭取職）同駅ヨリ筑前福岡へ

急行シテ、御進退如何シテ福岡侯ニモ伺ハシメタルニ、

同公ノ御意見モ御引歸シニ御同意アリシト、仍テ山田

ハ松崎駅ニ走セ返リ、尚ホ議シテ御帰途ニ就カセラレ

タリト云フ、而シテ閏三月二日御着城トハナレリ、今

回ノ御參觀ハ関東其他物騒ノ聞得アリテ、守衛ノ士前

後三拾余名ノ予備アリシ故、飛報ニ接スルヤ前後二手

ノ人数松崎駅へ馳セ集リ守護シタリト云フ、○御帰國

ノ報鹿兒島ニ達スルヤ、御側役町内膳（久慈）昼夜兼行奉迎

ス、其次日国老島津左衛門モ同シク出發セリ（守衛人
數從駕ノ事実ハ、大久保利通日記ニ詳記セリ）

二〇一

拙者儀為參觀去十三日国元致發足候処、肥後国高瀬駅
ヨリ少々不快ニ有之候得共、精々致加養筑後国松崎駅
迄致到着候処、身体痛甚敷、別テ難義致候ニ付、同駅
へ滞在種々加療養候ヘトモ、長途之旅行難相成、右ニ
付テハ御届申達、御差函ノ上国元へ引取義当然ノ義候
得共、何分旅中ニテハ存分ノ療治難行届、不得止事一
往致帰国候、右ハ、公辺御規定モ有之恐入候得共、無
抛參府御猶予相願候、左候ハ、厚致手当、少モ快氣候
ハ、御届申上、早速可致發足此段申達候、以上、
三月廿三日
松平修理大夫
右八日出、即日出ル、
松平修理大夫

書面之趣無抛筋候間、快氣次第直ニ出立可被致候、

閏三月九日

二〇二 御病症布告

太守様御儀、御參觀御道中筑後松崎駅ニ於テ御病氣

御差起、御病症白虎（關節炎カ）歴節病ニ被為 入、御難儀御參勤
難遊候ニ付、同駅へ一日御滞在、去廿五日御引帰御帰
国被遊候旨申來候、此旨可奉承知候、

四月七日

伯耆島津久福

二〇三 京都藩邸徳田大山町奉行所ニ召喚セラル

三月十日京師藏役人徳田嘉兵衛・大山彦八兩人、町奉行ヨリ
尋問ノ筋アリトテ召喚セラレ、留置ニナリタリ、是ハ水戸浪
人ヲ隠匿セシ嫌疑ニ係レリ、

二〇四 参考 江田平太郎日記鈔

萬延元年申三月十三日、就御登駕御供ニテ致出立候処、
筑後松崎駅ヨリ御病氣ニテ御引返シ、同閏三月二日被
遊御帰城候付致着候事、

但山奉行寄勤内ヨリ出立致シ、帰着之上本務御勘定

所工致毎勤候事（当時御馬廻職ヲ以テ扈從ス）

一大砲備 一組

昇預

和田孫右衛門

談合役

江田平太郎

大砲 一挺

仕長

三木原 等

規役 伍長

湊川仁左衛門

玉葉役

内山嘉八郎

玉竿役

三原仙次郎

口葉役

飯牟禮伴助

打役

黒江喜右衛門

右之通被仰付、

御出馬之節ハ

御旗本ニテ可被差出候条、兼テ致用意可被罷在旨可申

渡候、

此外ニ數十組同日命令アリ、全ク京都御守護及ヒ江戸警衛ノ為メナリ、

二〇五 当時世上ノ説

三月三日未明ヨリ大雪降ル、水戸及薩州浪人二十余人各々身ニ革具鏈条衣ヲ着ケ、袴ヲ穿テ、油衣ヲ以テ之ヲ隠シ、外櫻田馬場先ニ集マリ、諸侯ノ從者ニ混シ、又ハ武鑑ヲ読ミナガラ見物人ノ体ヲナシ、掃部頭ノ登城ヲ待テ、正五ツ時掃部頭ノ一行外櫻田四辻ヲ過ル時、浪人一人小銃ヲ発シタルヲ合図ニ、二十余人油衣ヲ脱キ、刃ヲ揮ツテ左右ヨリ駕籠ニ迫リ鬪戦シ、一人其首ヲ得テ刀ニ串キ、日比谷門ノ辺ニ走セ去リ、残ルモノ各々奮闘シテ、井伊家臣モ死傷数人アリ、刺客中負傷三人アレトモ、一人モ即死セシモノナク、皆一時ニ散乱セリ、其中八代洲河岸ニテ刺客ノ一人追蹤者二人ヲ切リテ、龍ノ口ニ至リ自殺シ、又一人ハ増山侯邸前ニ自殺シ、又一人ハ傷ヲ負ヒ、自殺セントシテ為シ得ス、辻番所ニ引上ラレ、四人ハ脇坂侯邸へ驅込ミ、四人ハ細川侯邸ニ驅込ミ自訴シタリ、井伊侯邸中ニテハ事ノ〔米沢藩〕起ルヲ聞キ、人数ヲ繰出シ、上杉邸ヨリモ人数ヲ繰出シタレトモ、既ニ散乱セシ後ニテ及ハス、因テ井伊家臣ノ死体ハ直ニ其邸中ニ引取り、刺客切腹ノ処ハ嚴重ニ警固シ、其日ノ中ニ検使済ミトナリ、驅込人ハ残ラス細川邸へ預トナレリト云々、

此報何人ナリヤ詳ナラス、鹿兒島ニ於テ之ヲ第一報書トス、事
実誤謬アリト雖、概況ヲ知ルニ供ス、

二〇六 井伊侯届書 (藩邸留守居報告)

今朝登城、(御門外脱カ)外櫻田松平大隅守門前ヨリ上杉彈正大弼辻
(所迄脱カ)番ノ間ニテ、狼藉者鉄砲ヲ打掛、凡二十人余リ拔連レ
駕籠ヲ目懸ケ切込候ニ付、供方ノ者共致防戦、狼藉者
一人討留、(死カ)其余手負深手等為負候ニ付、悉逃去申候、
拙者義捕押方等致指揮候処致怪我候ニ付、一先ツ致帰
宅候、(手負)尤供方初メ即死手負ノ者別紙ノ通ニ御座候、此
段御届申達候、(以上脱カ)

三月三日

井伊掃部頭

別紙

深疵 日下部三郎右衛門 (令立、御供題)
手疵 片桐權之丞 (宗村)
即死 深山軍六 (居カ)
手疵 櫻井伊三郎 (居カ)
手疵 柏原徳之進
即死 加田九郎太
手疵 草刈鋏五郎

刺客姓名

(石黒務記録(井伊家所蔵)・松田義孝録下編にて補註)

手疵 松居貞之進 (六日死カ)
同 越原源次郎 (持)
薄手 元村甚之丞
同 藤田 仲蔵
薄手 水谷 求馬
手疵 陸尺 弥右衛門
薄手 草履取 吉田 太助 (良歌)
即死 河西忠左衛門 (手疵、六日死カ)
同 岩崎徳之允 (四日死カ)
手疵 小河原秀之進 (正徳)
即死 永田太郎兵衛
同 萩原吉次郎
薄手 渡邊 恭太 (宗村)
切腹 薩州人有村治左衛門 (宗村)
水戸人杉山彌一郎 (増美)
同 大關和七郎 (光明)
同 佐野竹之助 (正実)
深手同 蓮田市五郎 (同カ)
同 森山繁之介 (政徳)

手負 水戸人 黒澤忠三郎 (勝寛)

深手 同 齋藤 監物 (一徳)

同 海後 蛭岐之助 (蛭崎之介 宗徳)

同 廣岡子之次郎 (政則)

同 鯉淵 要人 (幹徳)

同 廣木松之助 (有良)

同 山口辰之助 (正辰)

同 稻田 重蔵 (遠)

同 關 鐵之介 (重長)

同 森 五六郎 (徳)

同 増子 金八 (徳)

這ノ書ハ三月四日留守居方ヨリ藩庁ニ報告シタル者ニテ、井伊家ヨリ届出タル写ナリト云、

二〇七 島津左衛門出府

二〇七ノ一 筑後殿ヨリ被相渡候御書付

島津左衛門殿久 (家茂)

右ハ今度御参覲御猶予之儀御願濟ニ付、公方様・天璋 (家定) 院様へ從御内証御文御礼、且御改革方御用向等有之、往来急ニテ出府被仰付、中途御用モ有之候付、道中遅

速之不及差引候、此旨可申渡候、

十一月 筑後川上久封

二〇七ノ二 高九百五拾石

所務代銀式拾八貫五百目

島津左衛門

右ハ今度御参勤御猶予之儀御願濟ニ付、公方様・天璋院様へ從御内証御請御礼、且御改革方御内用向等有之、往来急ニテ出府被仰付候付、江戸拾式ヶ月、往来四ヶ月取込、拾六ヶ月一詰ニシテ、御合力高所務代銀右之通被下置候、

十二月 筑後

二〇七ノ三(文久二壬戌年)

来々戌年、琉球人被召連被遊 御参府候様、被仰渡候 処、追テ参府頃合之儀被仰渡候様、御老中久世大和守 (正周) 様ヨリ被仰渡候段申来候、此旨可承向々へ可申渡候、

六月 伯耆島津久福

琉人参府御猶予ハ当時天下多事ナルニ依リ、幕府モ賀慶ノ使礼ヲ受ルニ暇ナク、本藩ニ於テハ今春井伊家遭難ノ事ニ関シ、御途中筑後松崎駅ヨリ御病氣ノ御申取リヲ以テ御引返シ、御帰国

等非常ノ事ナリシ故、中山王賀慶使参府ノ御猶予アランコトヲ
懇願セラレシニ、本書ノ如ク聞届ケラレタリ、

二〇八 江戸邸守衛人員入費ノ概算

江戸邸守衛方賦り

惣人数五百人ト概算シテ、平均一人四人賦り

一御賄料一ヶ月一人二両ツ、

但一人賦金二步ツ、

右一ヶ月五百人分

金千両

右同十二ヶ月五百人分

同一万二千両

一御賄料米現渡一人平均二人分、一日一升ツ、(玄米)

右一ヶ月五百人分

米百五十石

右同十二ヶ月五百人分

同千五百石

(寄替米トハ、定額余剰アルカ故、之ヲ各自家族ニ送達スルヲ云フ)

一寄替米一人平均二人分、一日一升ツ、

右一ヶ月五百人分

米百五十石

右十二ヶ月五百人分

同千五百石

外ニ

(四人賄料トハ、一人賄料ヲ四人分合計セシヲ云フ)
道中御賄料四人賦、一人金十二両二步二朱余、平均

五百人分

合金五千両

一ケ年分

合金一万七千両

合米三千石

外ニ

三百六十石

右千五百石ニ掛ル二分四合之運賃米

右ノ米運賃

大坂運賃米

米一石付

一 一部六合一斗六升也

一 一部四合五夕

一 一部六合五夕

但小松原御蔵七夕下り

一 一部四合

日州諸郷

肝付諸郷

加世田郷

川邊郡

但伊集院与一部五合八夕

一 一部四合五夕

但阿久根・長島ハ五夕下リ

一 一部五夕

(鹿兒島灣内ニ在ル諸郷) 内場

但山川一部四合

江戸運賃米

一 二部四合五夕

出水・阿久根・長島

一 二部六合五夕

加世田

但小松原一合四夕下リ

一 二部四合五夕

肝付

一 二部五合

(鹿兒島灣内ヲ云フ) 内場

一 二部四合

山川

一 二部六合

日州

京撰及ヒ江戸邸警衛予備ニ調ヘタルモノナリ、

二〇九 茂久公御参観御猶予布告

太守様御病氣折角被遊 御薬用候得共、兎角御不同被

為 在、未長途之御旅行難被成、依之御領内温泉へ御

入湯 御步行等モ被遊、得ト御療養被為遊度候ニ付、

先キ三ヶ月程 御参観御猶予之御願書、先月十三日御

用番安藤對馬守様(信睦、老中、警城平藩主)へ被差出候処、御願之通被仰渡候段

申来候、此旨奉承知候様表方へ可致通達候、

八月

左衛門島津久敬

本年三月御参観御途中松崎駅ニ於テ、井伊家遭難ノ飛報、或ハ

有村雄助カ親報ニ接シ、同駅ニ一日御滞留シ、慮從国老川上式

部久ヲ東上セシメ、公ハ御発病ノ名ヲ以テ御引返シ御帰国セラ

レ、以来御病氣在再 御参観御猶予ノ請願數回ニ及、其間封内

(船員部)霧島山内采ノ尾温泉場ニ仮館新築、御入浴數月ニ亘リ、其間天

下ノ形勢ヲ視察セシメ、或ハ四方ニ探偵ヲ派シテ井伊家ノ動靜

ヲ窺ハシムルニ、形勢倍々切迫、或ハ朝廷ニ密奏等ノ計画ニ他

事ナク、仍テ表面ニハ御参府猶予ヲ願ハレ、時機ヲ伺ヒ為スコ

トアラント、百方力ヲ竭サレタル事実ハ、文久二年ノ部ニ詳記

ス、

二一〇 参考 道島正亮記事鈔

庚申八月八日極々急キノ飛脚着、

太守様御不例ニ付、御步行並ニ湯治御暇被為在、三ヶ月

ノ後御参府被為成候様被仰渡候由、七月十七日江戸出

立ノ節御達ノ由、左候へハ八月ヨリ三ヶ月ナラハ、十

月ハ何分又々御願可被為在候事歟ト被察候事、

但八月廿日初メテ 御仏詣被為在候事、

二二一 末藩佐土原内訓田中源五左衛門日記

御隠密方

(佐土原ニ於テ禁セサル事由ハ深キ所以アリ、茲ニ略ス)

一 御本家從往古御制禁之一向寺、御当所江被建置候義、
ニキヒサ(佐土原分家ヲ祖)
以久公深御賢慮被為在候テノ御事付、右御趣意厚差含
可罷在事、

一 宗稱寺・蓮光寺兩寺江

以久公深御賢慮之訳合ハ、一子相伝口授ニテ、吃卜御
趣意相守候様、且住職交代之節大目附宅へ密ニ招呼、

右之御趣意厚申達候様可致事、

一一 一向宗法僧(談脱カ)

御本家御領内へ入込候儀不相成様隠密取計、自然不聞
入忍入候向見請候ハ、程能会釈、潜行之場所且生國・
年齢・人相・所持道具之類迄委敷相記シ、極内隠密方
見聞役へ申出、見聞役ヨリ大目附へ申出候上、形行書
取文箱入レ付ニテ、足輕直持ヲ以テ高岡宗門方掛・郷
士年寄並ニ横目へ可致引合事(各郷宗門改掛ノ役人ヲ、
重キ該宗僧侶入国弘法ノ所為アルモノ捕縛シテ処分セリ、問
ニハ所謂永送卜唱フル処分ヲナセシモアリタリ)

一 右同断ニ付、僧形ニ不限一向宗改メ法、(教法談カ)

御本家御領内之者、右宗旨致信仰、御国許ヲ出、俗体
ニテ致流浪居僧侶ヲ引入候儀、間々有之由、右体之者
ハ丁寧留置同断之事、

(日向諸眞郡)

一 高岡宗門方掛役場ヨリ御用封相達候節ハ、可相請取候、
(符カ)
自然隠密方直ニ御目付へ持越、龜末之儀決シテ無之様
可致事、

可致事、

一 隠密見聞方之儀別テ人柄相撰、役場ノ不依高下ニ横目
等之内都合式人申付、御用筋之儀御目付受持ニテ、依
時宜大目付直ニ承候様可致事、

一 右隠密方御用向之儀ハ別テ入念、御家老へ申出候儀ハ、
其節之月番迄於別席大目付ヨリ可致引合事、

右

以久公御賢慮之趣御深意被為 在候テノ御事ニ付、

此節御家老伊集院新左衛門・大目付曾小川實

御前へ被召出、御趣意筋深相心得、

御本家御都合(マツ)不罷成候様吃卜可致取扱旨、委細被

仰出候、

申十月

右之通被 仰出候ニ付、(官橋具宮橋郡)
宗稱寺・蓮光寺住職男子

無之節ハ、御家中二三男亦ハ両寺之家内由緒有之者之内ヨリ、致養子候様被_レ究置候、

萬延元年申十月

〔石室秘稿御隠密方写(國立国会図書館所蔵)にて補註〕

此書面ハ旧佐土原藩ニヲイテ、当時真宗門徒ノモノ探偵ノ為入國、国情ヲ探知ノ恐アルカ故、宗藩ヨリ照会スル趣アリテ、該宗ニ対シ内訓セラレタルモノナリト云、○当時藩情ヲ探ラムカ為、幕府ハ勿論井伊家ヘハ、延岡藩内藤家ノ手ヲ經テ探訪スト唱ヘタリ、

二二二 寺師宗道市來廣貫ヘ送ル建言大意

來春

(登州ハ島津登久包ヲ云)

御參府ニ付テ登州ノ御供ノ儀、寔ニ適宜ノ御事

ト実ニ愉快此事ニ奉存候、就テ乍恐愚存ノ趣、只為含貴報迄内分申進置候、御道中筋ノ儀モ見聞旁ノ御手当等ハ、充分御手附キ申タル筈御座候ヘトモ、先差当リ商人杯ノ間策ハ、至テ當時手薄ニ候ニ付、夫ハ扱置足輕杯ノ内ニ純粹ノ者ヲ撰ヒ、只今ヨリ九州辺雲助ニ被成置候テ、道中往來ノ人足ニ仕立候テ、何ノ体モ無之見聞為致候ハ、余リ差障ノ廉モ有之間敷哉、段々御國者ノ欠落ハ雲助ニ入り候テモ過分ニ有之候ニ付、筑前辺ヨリ手分イタシ諸所ニ差廻候ハ、可然候ヤ、尤右

ノ策ハ手近キ所ヨリモ却テ東国信州辺ヨリ段々ト海道筋ニ出掛候趣ニイタシ、左候ハ、自然馬モ相馴レ居候道モ御座候、其ノ道ハ至テ密ナル訳ニ付、現事ニ難申述候、只荒増ノ形行ニ御座候、

付箋間厚キ程宜敷候ヘハ、イツレ奥ヲ探シ表ニマイ

リ、幾重ニモ入置カレ候様有御座度候、彼モ至極

(井伊家)

事ハ密ニスル訳ニ付、容易ニ事情相分リ不申候ヘ

ハ、只今ヨリ此方モ右申上候足輕等ノ内ヨリ、相

馴候モノ四五人モ東海道筋・木曾路又ハ伊勢ノ辺

ナトニ出シ置、思ヒ寄ラン方角ヨリ御手入有之候

ハ、却テ手元ヨリハ物毎相分申訳ニ候、尤間諜

ノ手筈ハ商人ナリトモ、人足ナリトモ、此方産物

会所等ノ手先、又ハ金銀交易ノ手筋等手広ニ有之

候ニ付、涯々ニ候ハ、只今ヨリ救置候様ノ趣法專

要ト存候、形行為心得貴報迄申入候、

一此節細川侯 (慶應) 御參府ノ次第見申候処、成程人数ノ儀ハ

兩道ヨリ倍ニテ、前後守衛方ノ儀モ過分ニ為召列候様

子ニ相見ヘ候、就テ、(茂久公) 上様ニモ守衛人数等相増シ召

列候テ、格別目立差障ノ廉モ有御座間敷候ヘトモ、右

ハ訳無シニ大勢騒々シク召列候儀モ何トヤラ、如何敷

相見へ候儀モ御座候ニ付、爰ニハ智計ヲ被為用度御事ト乍恐奉存候、子細ハ先度大坂砲台ノ策申上候通、ケ様ノ砌ハ先立テ事ヲスルノ期会無之候テハ不相濟、既ニ先公ノ深キ御見通シヲ以テ、(齊彬公)田町御屋敷へ築出シ、(東京都港区)台場御造立相成候テ、公儀御台場同様内輪ノ御堅メ、公儀ノ御台場ニ被召立置候テ、此方御受持ノ御事ニ御座候へハ、幸当分破壊イタシ居大風ニ崩レ候テ、砲数モ纒当分御修繕中カ七八門ノ事ニ候へハ、此節早々右ヲ御申立、砲門相増シ、改テ守衛御受持兼テ人数等相増、沖御台場同様屹ト御堅メ被仰付候様御願相成候テ、第一右ニ表ノ趣ニシテ多人数御道中公然被召列候ハ、名義ニライテ至当ノ筋ニモ御座候半、尤当時外様御大名方一同守衛等ノ御聞前無之方ノ時勢ニモ被準、殊ニ公辺ニモ被對御国役ノ一筋モ衝立、且傍夷虜防禦ノ御手当ト申候へトモ、当分ノ事情ニモ被基候テ人望モ不被失、外聞実儀両ナカラ全キ諷乎ト奉存候、右ハ細川家ナト前条多人数被召列候儀モ、御丸内杯モ旁名儀相立候乎ト存申候、右ノ形行其許ニテモ篤ト彼是勘弁ノ上不苦候ハ、極内登州上君迄ハ内々被伺候テモ可然ヤ、何分只今其元ノ情事旁々委敷分カネ候ニ付、若シ究テ難申儀

モ多々御座候、御推察可給候、一當時御屋敷守衛方等被召置候へトモ、他藩ニ比候へハ寔ニ少人数、其上万事ノキマリ付不申訳ヤ、適々詰候人数ニモ詮不立候場合多ク御座候、只徒ニ御人数被召置候トモ、實ニ不益ノ訳ニ御座候へハ、第一文田町砲台等ノ策万一其通ニモ被行候ハ、不断ノ御取締ニモ相成、殊ニ調練相マトマリ、自然徒ラノ風俗等モ相直リ、往々御便利ノ道ニモ御座候半、只根本ヲ不居付候テ、枝葉ノ風俗質素ナトヲ幾度イタシ候トテモ、難被行世情ニ御座候へハ、右ノ事ニ不限御楯直シノ筋合ハ外ニモ段々御座候、右ニ付大夫第一威望無之候テハ不相濟儀ニ付、登州ニモヲソカラ深キ御胆略モ可被為在筈候間、御裁断ヲ仰罷在候、就テハ仮令今日御着有之候ハ、不日ニ御屋敷内御軍備ハ勿論、出火等ノ急變御手当、尚嚴重ニ御規則御極メ相成候テ、何々ノ時ニ加様々々ニト屹ト万事ノキマリ被召建、何ニ臨候テモ少シモ不動様有之候ヲ、只今歎慨イタシ居有志ノ輩一時ニ致威服、英断ヲ仰キ候テ、俗輩マテモ自然怠惰ノ意取締付候儀、必定ニ御座候へハ、別段風俗等ノ儀ニ不及、立直リ可申儀ヤト奉存候、随分江戸ノ儀ハ人

氣丈ケハ相図リ易候ニ付、只一事ニテモ人々識通イタシ候訳ニ御座候、右ニ付乍不成合右手当ノ儀ハ、兼テ現事見聞之訳ニモ候間、極内只今ヨリ伴太郎左衛門ト拙者申談、密ニ取調ヘ置、御着ノ上早速機密ニ登州老ヘ差上候様仕度、当事右ノ儀ニ付テハ、急々至極歎慨ノ訳ニ有之候ニ付、彼是諸藩ノ情事モ大略存知ノ訳ニモ御座候間、旁申談内呈仕候ハ、即万事ハ心得ニモ罷成訳ニ候、併シ何分我々式、先達テ内諭ニテモ不苦筋、内達不蒙候ニテハ難致儀ニ御座候ヘハ、差当リ其道筋難渋ノ訳ニ候間、若相成候義ニ候ハ、内許ヲ受、貴報拙者迄被申遣候ハ、屹ト申談、御手当向其前万事取シラヘ置可申、何分此儀我カラ難申筋候ヘトモ、兎角此節柄ノ事故、不顧不肖有サマ極内貴報迄申入候訳ニ候、何分形行早目ニ御報承度候、右ニ不限段々要事モ可有之事ニ御座候、御推察可給候、

一段段東郷泰玄・内田仲之助(傳)・(改風旧名)内見聞諸事致探索候テ、時々登州 御留守中ニハ、御国元 (欠) 差上候様被仰付候ハ、右ハ第一諸方ノ取会情事ノ次第モ手易キ道モ有之、殊ニ東郷士ハ医者ノ事故、町家杯ハ勿論、諸屋敷・御城坊主其前公役ノ者等ヘ手広ク致出入

モ、其上材士ニテ随分時勢ノ事ニモ通達ト候候、且内田儀ハ御留守居方ニテ、爰元京・大坂辺ノ情態モ多年(當時留守歴史)相馴居、殊ニ当役諸方ヘ手広ク聞合事等モ手易ク、随分万事心掛至テ慷慨ノ士、拙者別テ懇意ニ御座候、別段手ヲ入レ聞合事等モ目付所有之人物ニ御座候、段々見及候処、右兩人可然人物ト存候間、登州ヨリ御内意共有之候ハ、決テ何歎ト御便利相成候儀可有之御座候儀ト奉存候、右ハ別テ恐入儀ナカラ、兎角當時勢ニ就テハ、平々ノ事ニテハ埒明間敷候間、其上ハ兩人身命ニ懸テ御奉公可仕儀ニ相違有御座間敷候、非常ノ時節ハ非常ノ処置ニ無之候テハ不相成候訳イツレモ心得ノ外ニテ、此方モ不苦筋モ候ハ、ヨロシク御賢計被成下度候、

付箋此ケ条ニ付テハ深キ存慮モ有之候訳ニテ、子細ハ既ニ後革一後モ連ニ相成候ニ付テハ、兎角他邦経脱分明ナラス商人相手金錢ノ取引ニ相掛候事故、萬一其間ニ煩敷事等到来イタシ候儀モ自然難計候ニ付、相限りノ節ハイツレ万事御留守居方取扱ニ御座候ヘハ、兼テ其用心ハ專要ノ事ニテ、ツマツカサル所ニ手当不致置候テハ不相濟訳候間、懇意ニハ申ナカラ

仮令初ノ事ニハ無覺東存候間、右ノ内達等別テ取
計候筋候ハ、服心ノ訳相成候、往々別テ便利ノ筋

ニ候間、能々御勤考宜敷御勵キ肝要存申候、秘中、

一此内ヨリ色々心掛候ヘトモ、(井伊家)彦ノ動静ハ更ニ不相分
候、只矢張今ニ此方ノ人ニ不限、他藩トイヘトモ一切
親進ノ出入差留入レ付不申由、尤藩中外方稽古等モ出
席不致、隔心甚敷モノ候由ニ承候、此儀ハ弥無油断心
掛可申候、

一此節高輪沖台場受持酒井雅楽頭様・真田信濃守様両家

堅メ御断願出御免相成候テ、右ニケ所ニ御台場一手持

ニ越前様へ被仰付候、始メ越ハ金川受持ノ処、先達テ

出火ノ節不都合ノ事有之候由ニテ、転シテ沖台場ニ被

仰付候由、右ニ付一ケ所守衛人数二百人ツ、合テ二

ケ所四百人ニ相及候テ、出張彼是ノ入費莫大ノ事ノ由、

金河ノ儀ハ松平久松勝成隠岐守様へ被仰付候由、右ノ外御台場

ノ儀モ追々交代ニ可相成候ニ付、若シヤ此御方へ一ケ

所モ被仰出事モ自然難計時宜ニ御座候、則加賀・越前・

細川・仙臺・南部・佐竹・長州・土州・阿州等ヲ始メ

守衛受持聞前無之御方ハ無之候ニ、此御方様ニ限り、

未一ケ所モ差立候場所御受持不被為在候ニ付、當時ノ

勢ニテハ風ト受持被仰付候儀モ無之トモ不申候、就テ
ハ右申候通田町御屋敷ノ儀ハ、御先代様深キ(看形念)

思召ヲ以沖御台場同様、依御願持場御受持ノ御事ニ候

へハ、此ニテ破損御修復改テ砲数モ相増シ、吃ト人数

モ被召置候様ノ訳御願ニ相成候テ、則チ右ノ御手当人

数被差登候名目ニテ、御參府御道中前後ニ被召列候

ハ、何モ差障ノ端不被為在間敷哉、若シ右旁御憚り

平常ノ御供方ニテハ、乍恐一同安心難仕候時節柄ノコ

トニ候、然シ御親類方モ段々被為入、其上佐土原侯モ

御座候ニ付、少シモ御念遣ニハ不及間敷候ト申モノ、

非常ノ事ニハ兎角人心難計モノニテ、頼ニハ相成カタ

ク、イツレ恩顧ノ人ナラテハ用ニ難立例へ古今ノ事実

モ多ク候、去リトテ右申上候通無故大人數被召列、騷

敷御通行等為在候ニ付テハ、ナト御名目モ如何ニ評判

イタシ、且

公辺及ヒ他邦ノ嫌疑ハ勿論ニテ、却テ此方ヨリ事ヲ求

候ニモ相当リ、煩ヲ引キ出シ候端ニテ、自然 御武徳

ニモ相拘リ、乍恐御智略ニ非判ノ程モ 残念ノ訳ニ候

間、能々智略ヲ以上手ニ不計候テハ、今時ノ人心腹強

キ無上ノ人、直ニ分除ヲ測リ可申儀ハ、案中ノ事ニ候

へトモ、右守衛人数ノ儀ヲ名目ニ公平ニ御願出相成候上、其名儀ヲ衝立候上ハ、

公迎又ハ他邦嫌疑ノ筋モ相断テ、事穩ニ人モ納得可申候儀ト奉存候、内々御屋敷中ニモ上下此時節柄ニ付、何卒御人数等被召列度トノ一同ノ人心ニ御座候、然ラハ何事モ先ツ彼ノ幕ニ充分事ヲ為持候テ、内ニ胆略ヲ以何トカ致圧制候手段有御座度御儀ト奉存候、

一此節ハ先江州ノ事ハ不唱、第一表ニ夷人忌嫌ノ言等公平ニ唱候方可然ヤト存申候、右ハ既ニ御殿山等ノ次第（高輪東御所ニ於テ浪士乱暴ヲ云フ）モ有之候ニ付、只今モ夷船品川沖へ数艘相掛リ居候へ

ハ、速ニ内場御府内ノ正面田町ノ海岸ニ候へハ、御先代^上被仰付置候砲台御修復守衛ノ儀、別テ御願出ニモ相成候ハ、多分御都合相成候儀ハ必定ニ御座候、尤当时一同防禦不頓着慷慨歎悲スルノ時機ニテ、有志ノ意ニモ相叶ヒ、人望渴仰ノ訳ニモ至リ候ヤ、愚存ノ形行不憚貴報迄申越候間、不苦筋モ候ハ、此意ヲ以建白ニテモ宜敷取計可被下候、

一右田町御台場ノ儀大風破損後今迄夫形相成リ候テ、此節少々石垣杯御取繕、大砲御居附ニモ相成候筈ニテ、只今普請中ニ御座候由、尤略シテ只常ニ土手築ニテ、

飯ニ砲眼明キ候迄ノ由、先ニ被召建候国城砲台モ御取除相成候テ、当分別絵図ノ通ノ仕掛ニ候由、御作事方人足共相掛リ居、日ヤリニイタシ候位ニテ、夏初二取付、半ニ成就無之由候、若シ勘考ノ為ニモト存候繪図相添申候（図送ス）

西六月

此書文久元年辛酉寺師宗道当時ノ形況報告其一ツナリ、

二二三 江戸藩邸在勤某井伊家遭難ノ報告

前文略ス、倭当地大騒動到来、去ル三日之朝水戸浪人其外、御大老井伊掃部頭様御登城ノ節御行列ニ切込、終ニ掃部頭様ヲ殺害致シ、皆自殺致シ、其内有村次左衛門右之首ヲ前ニ置キ自殺致シ、二ノ刀ニテ咽ヲ貫キ相果居候由、右浪士之内四人ハ存命ニテ、御老中脇坂侯御宅へ罷出、申立ノ趣ハ掃部頭様ニ趣意有之、只今外櫻田ニ於テ討取り候趣申立、惣名書並趣意書差出候ニ付、右四人ノ者共ハ即刻細川様へ御預相成候由、未タ細事ハ相分り不申候へトモ、浪人共ノ振舞ハサナカラ元禄ノ復讐同様之由、此方御屋敷へモ早速為御知有之（御先手役ヨリ留守居呼口達ヲ云）、大騒動ニ及ヒ、江

戸中モ大混雜、取々様々ノ評判、スワヤ大軍トナルヘキ模様ニ候、前代未聞ノ珍事故、上下皆手足ノ置所モ無之向ニ相見得申候、有村事ハ昨早朝ヨリ御城下馬見トシテ、兄之雄助同道致御屋敷ヲ出候由、後ニ承候ニ着込ナト着用致居候由、雄助ニモ其後行衛不相知、則ヨク糺方ニ足輕数手被差出候、兎角是ヨリ血臭キ世ニ可相成候、又公儀ヨリ御留守居ヘ御知ラセ名書ハ左之通御座候、

松平修理大夫家来

有村次左衛門

水戸殿家来

佐野竹之助(光明)

黒澤忠太郎(忠三郎勝寛)

蓮香市五郎(正美)

香取宮杜司

齋藤監物(増善)

大關和七郎(子之次郎政前)

廣岡千太郎(正)

山口辰之介(直長)

森五六郎(杉)

横山彌一郎(当人)

鯉淵(鈴團) 要人
廣木(松) 李之助
脇田(稲田重蔵) 市藏
増子(金) 八
關(天) 天之助
海後崎之助(経藤之介宗親)

外二人名不知

右之人数御届書ニ記シ、外ニモ多人数之由ニ申立候ヘトモ、実否今日迄ハ相分り不申、右人数之内頭ノ四人脇坂侯ヘ罷出候由以下略ス、

三月三日

今朝江戸諸所ノ落書左之通承候、

井

たてから見てもよこからみても棒からみ

ひらになしては井伊のべら棒

二四 三月五日在江戸某カ書信及ヒ或ル人筆記

一昨三日ノ朝五ツ時頃、大老井伊侯登城之途中外櫻田ニ於テ、浪人体ノ者二十人許、又三十余人トモ申候、皆拔身ニテ切り掛候ニ付、供方ノ者モ拔キ合セ、双方

切り合ヒニ及ヒ、其中浪人共ノ内三四人ハ駕籠ヲ目懸テ打チ掛リ、駕籠中ヘ刀二三本刺シ入レ候由ニ付、掃部頭殿ハ其時早ヤ落命程ナリシヲ引出シ、首ヲ打チ取り、浪人共二三人ハ声ヲ揚ケ、驗ヲ揚ケタリトテ直チニ逃ケ出シ、比々谷御門ノ方、又ハ西丸下櫻田御門内ニ向テ走出シ候モ有之候、其間誠ニ烈敷候テ、先供ノ戰中ニ右通駕籠脇ニ切り込候者ハ纔三四人位ニ相見得候由、供方ノ者モ相応ニ戦ヒ死傷モ有之、浪人共拾余人ハ戦死致シ、其場ニ倒レ居候由、当日ハ夜ヨリ大雪降りニテ、地上一尺程モ積リ、寒氣甚シク、浪人共ハ兩合羽ヲ着シ、下馬見物ノ体ニ出立、外櫻田ノ水茶屋ヘ扣ヘ居、行列其前ニ來候時、相図ニ短銃一發致シ、齊シク切掛候由ニ候、又陸尺人足共等ハ直ニ逃去リ一人モ其場ニ居ラス、駕籠ハ抛居ヘ有之、供方ノ士モ屋敷ノ方ニ逃出スモ段々有之、又ハ方々ニ逃ケ去リタルモ有之、誠ニ見苦シキ事ニ候由、其場ニ踏止リ戰候者拾人位ニ候由、右ノ始末ハ豊後杵築屋敷ノ外長屋目ノ前ノ事ニテ、窓ヨリ見物致シ候者余多有之、又熊本藩士下馬見物ニ出行候途中ニテ、見物致候者ノ直説ニ候、掃部頭ハ上巳ノ事故、長袴ヲ着シ居ラレ候由、夫

故ニ働キモ出來不申カ、又ハ直ニ二三人ノ浪人駕籠ヲ刺シ候ニ付、働キモ出來兼タル俄ノ事ニ可有之候、右浪人共ハ首ヲ持チ逃出シ、或ハ徐々ト其場ヲ曳キ取タル者有之、皆々其者共ハ高笑シテ引取候由、有村次左衛門カ其日ノ刀ハ、木場鐵之助ノ在銘、長二尺六七寸モ有之、丈夫ナル刀ニテ朱鞘拵ニ候、兄雄助ハ其場見物致シ(其場見物セシニ非ス、金子ト俱ニ品川ニアリテ水戸士カ報ヲ聞テ、京都ニ向ヒ出發ス、其事実前卷二記ス)、始末見届、京都又ハ御国元同志中ヘ為知ニ、東海道ヲ指シテ走候由、其道列ニハ同類ノ水戸浪人二人・家來四人同道ト申ス事ニ候、一説ニ当朝赤羽ノ兼テ心易キ待合茶屋ニ扣居候トモ申候ヘトモ、其場ニテ見届候方実正ト存セラレ候、

一 当朝末明水戸浪人共并有村兄弟ハ芝愛宕ヘ勢揃致シ、夫ヨリ打列レ櫻田ノ方ニ出掛候由、

一 珍シク当朝ハ宵ヨリノ大雪ニテ、合戦ノ時ハ殊更大降りニテ、二三間モ離レテハ何モ見分ケ兼ネ候由、前代未聞ノ珍事、大雪ニテ後代ノ咄ニ相成ル事ニ御座候、

一 江戸中ノ評判ニ、井伊殿ヲ惜ミ候人ハ万人ニ一人トモ可申、皆人氣味善シ当然ノ事、天罰立処ニ來レリト申

シ候、是ハ去ル午年頃、公卿方其外有志ノ忠臣ヲ多ク殺シナト致シ、

天子ヲ蔑ニシ奉リ、外国人ニ親ミ国ヲ覆サント致シ候罪ナリト申立、浪人共ハ赤穂ノ義臣ト同様ニ尊ヒ、大

忠臣ナリト男女共ニ申シ尊ヒ申候(一般ノ事情如此)

一水戸浪人有村ト同道京都へ向ヒ候者ハ、金子孫次郎(孫次郎)・

杉野欣一郎ト申ス者ノ由、有村ハ捕方ニ足輕(手ヲ入ルハ)三手迄被

差出候、

一此節之事ハ水戸ト前以テヨリ喋合ノ事、且京都へモ夫

々手筈(大久保利通日記參看)ニ相成候事之由、夫故京

都ヲ差シテ走セ登リ候事トノ密説モ有之、御国ニ於テ

モ存知ノ一党有之トノ事ニ御座候(大久保利通日記・樺

山資ノ日記・有馬武滿東日記及ヒ石室秘稿・久光親話記等參

看)

又別紙

一公儀ヨリモ水戸人並有村追手差出シニ相成、一組ノ同

心十六人宛ノ由、別テ嚴重ノ事候由、

一大坂ニテハ追手ノ公儀同心方ヨリ有馬御国ニ向キ候ニ

付、大坂屋敷へ引合相成候ニ付、当夜詰見聞役橋口權

左衛門足輕召列走下リ候由、

一有村雄助大坂ヲ立チ舟ニ乘リ候迄ハ足跡相分リ候へトモ、其後ノ説ニ(茂久公)太守様御道中へ罷出、御家老川上氏(式部)

へ直ニ申上度相願候へトモ、其儀不相叶、御側役ニモ

同様ニテ、無是非奈良原喜左衛門へ始末ヲ告ケ、直ニ

走セ下リ、即夜私宅ニ於テ切腹相果候、其時同志ノ輩

数十名走集リ盛ナル事ナリシ由、

一幕府同心ハ有村カ跡ヲ追テ走セ下リ候故、政庁ニハ大

ニ心配シ、若シ追手ノ者入り来ラハ、同志ノ輩如何シ

ノ挙動(暴発ノ形勢大久保利通日記參看)モ計リ難シトノ

廟議ヲ以テ、死骸実験セシメ、疑ヲ散スルニ如カシ

ト、出水境外迄屍ヲ持出シ、肥後佐敷へ止メ置キ、而

シテ出水境ケ谷迄持越、同所ニ於テ屠腹ノ姿ニシ檢視

ヲ受ケタリ、此処置方ハ肥後直次郎御裁許掛・山本孫

兵衛郡奉行・江田平藏御使番三名派遣セラレ、応接シ

無異議事終レリト申ス事ニ候、

二五 藩士某當時ノ形勢或ハ巷説報告

井伊家ニ於テハ主人横死ノ報ヲ聞ヒテ、国中大ニ動揺

シ、木保某ナル者ハ直ニ出發走セ登リ、夫ヲ逐フテ続

々走セ登ル者多シ、一群十人二十人又ハ五六十人昼夜

引キモ切ラス、道中駅々彦根人アラサルハナシ、或ハ武器ヲ携フルモアリ、或ハ荷作長物持カ入レ付等ニ運送スルモアリト云、当時京都ニハ所司代ヨリノ達シニ仍リテ、守護ノ兵追日着京ス、畿内ノ藩々三四十人五六日夜統々上京ス、落中ハ二三丁毎二十人廿人位モ張番致シ、往来ノ人ヲ改メ、中ニモ水戸并薩摩人ハ通行ヲ止メ、異儀ニ及ハ、搦捕、或ハ打捨ルモ苦シカラサル旨、所司代ヨリ嚴達セリト、当時所司代ハ酒井若狭守若州殿ニテ、国元ヨリ人数三百人程着京致シ警固ノ由、木曾・東海両道御関所ハ勿論、川々ニ至ルマテ、其支配領分ヨリ人数ヲ出シ、往来ヲ改メ、用向ノ仔細ヲ尋ネ差シ通シ、中ニモ薩摩人ハ改メノ向面側ノ由、彦根藩中ハ何程走セ登ルモ制止無ク、江戸ニテハ諸屋敷皆外出ヲ禁シ候由、掃部頭殿ハ手疵ヲ請候御届ニテ、隠居ノ願ニ相成候トノ説、或ハ御加増五万石ヲ被下、幕府脇股ノ家柄故身命ヲ棄ラレタルヲ賞シ、家名ヲ辱メサル処分モ内定アリト云、掃部頭殿ノ首ハ行衛不相分様々ノ説ニテ、水戸ニ持行キタリトモ云フ、有村次左衛門辰ノ口切腹ノ場ニアリシハ、供頭服部三郎右衛門ト申ス者ノ首ナリト云フ、然レトモ杵築藩ノ長屋窓ヨリ見物

シタル者ノ説ニハ、供頭等其場ニ死シタル者ノ首ナキハナカリシトソ、此説実ト云フヘシ、有村カ持チタル首ハ、彦根屋敷ノ士来リ持帰リタル由、又杵築藩人ノ説ニ、掃部頭殿ハ浪人三四人ニテ駕籠ヨリ曳キ出シ、首ヲ打チタルヲ見候由、其時供方ノ者ハ多クハ逃去リ、僅ニ五六人戦ヒ候者有之候由、掃部頭殿ヲ駕籠ヨリ曳キ出候時ハ、早ヤ落命ノ後ナラント見受ケラレ候、然レハ駕籠中ヲ刺シ候ニ相違アルマシト申ス事ニ候、熊本一細川家ヘ御預ノ浪人ヘ糺問ノ時、御首ハ何レニアリヤト問候ヘハ、御首ハ頂キ候トハカリ申シ、行衛ハ我々ハ存セスト申居候由、是等ノ事ヨリ水戸ニ持チ去リ候トノ説ニ候半ト存セラレ候、
一十七人ノ外ニ五六十人ノ党類アリト申立候ヘトモ、実否分明ナラサル由、五六十人ハ無之トモ余党アリシニハ相違ナシト申ス事ニ候、
一有村雄助事ハ外櫻田ヘ招居始末見届、其場ヨリ直ニ走セ下リ候由、是ニハ段々内実ノ訳有之、密々ノ咄モ有之候、多分帰国致候事ニ可有之、追々其次第八相分リ可申候、以下略ス大久保利通日記・有馬新七記事・是枝柳右衛門日記參看

三月五日

二二六 熊本藩士某友人某ニ報告

三月四日立ノ飛脚、同十六日着、

前文略ス、扱昨日朝五ツ時分、龍ノ口表御門ヨリ手負五人駆込候ニ付、御門番一応相制候ヘトモ、頼々ト声掛ケ、御白洲真一文字ニ駆ケ上リ、御取次ヘ応対イタシ、私共儀水戸家中ノ者共ニテ、只今井伊掃部頭様ヲ打取、御当地不案内故御役人モ存不申候ニ付、此御方様ヘ罷越公裁奉待度、其間御育ヒ被下候様申演候ニ付、直ニ御小姓御留守居方ヘ相達、御書院下ノ御座ヘ致案内、御小姓頭ヨリ應對委細聞取ニ相成、右四人ノ内二人ハ四十計、二人ハ二十三四ニ相見ヘ、馬乗袴又ハ袴ナシ、足袋ノ俣土足ニ有之、兩人ハ肩腕所々ニ疵、一人ハ首ノ付ケ根ニ四寸程ノ疵、其外諸所ニ、一人ハ諸所手疵有之候ヘトモ、深手ニモ無之依テ直ニ歩、御小姓ヨリ療治方仕候、何様御門ヨリ駆込候様、御敷台御番所ヘ罷越候処、澁谷勘助詰居候ニ付承合候処、御敷台ニ出ル間モナク御玄喚ヘ駆上候様子、夫々段々承合候処、惣体水戸御家中御隠居様付ノ者、御当代トハ

近年隔心ニテ、御隠居様附ハ是非井伊様ヲ御討果申候トノ趣意ニテ、既ニ水戸ヨリ一里半江戸ノ方、長岡ト申所ヘ多人数出張仕候ヨシ、右ノ大勢ニテ事仰山ニテ事實被行兼、此節出張人共ノ人数ノ内ニテ可有之、五人三人ツ、抜掛ケト相見得、此人数出府イタシ候内、井伊様ヘハ身ヲヤツシ、物売・不淨取杯ニ入込候由候処、三人ハ三月末同所ニテ被召取候由、残人数十七人諸所ヘ止宿イタシ居候処、去ル二日夜愛宕下ニ集会イタシ、三日朝御登城ヲ待受、外櫻田廓ニテ一旦御駕籠ノ者ヲ切り、夫ヨリ段々ト申分引起シ、抜刀ニ及ヒ、事ノ紛ニ大關和七郎・森五六郎御駕籠ニ近付、双方ヨリ一声相凶イタシ、御駕籠ニ双方ヨリ六人切り通り、夫ト相凶ニ十七人一同ニ抜キ放シ、御供廻ヲ散々ニ切散シ、御駕籠ヨリ引出候時ハ最早御落命、直ニ森五六郎御首ヲ打落シ、切先ニ突掛ケ日々谷御門ノ方ヘ引取候由(島津伝フル処ハ、有村次左衛門カ刀ノ切先ニ貫キ、日比谷御門ノ方ヘ引上ケタリ云々、イツレカ是ナリヤ)、当朝ハ明ケ方ヨリ雪降出シ三四寸モ積程ニテ、御供中ハ惣テ合羽着ニテ殊ノ外抜合毛遅ク散々ニ成候故、面々追掛余程ノ儀ニテ、井伊様御供ノ中即死手負余計ニテ候、

水戸様方ニモ、同所ニテ一人ハ即死スヘキ深手ニテ切腹イタシ候、諸所方々へ散々ニテ脇坂様へ四人、此御方様へ四人駈込候、水戸家ノ方死人五人有之、四人ハ行キ所相分リ不申、御敷台ノ騒動無申計、表御門・東西ノ御門外様与警固ノ人数差出、御物頭ヨリ詰方ニ相成、此末如何成行可申カ、水戸ヨリ一里半江戸ノ方長岡ト申所ニハ、段々御人数出張イタシ居候由、何様不穩事ニ御座候、即剋与御小姓三人外ト聞トシテ被差出候、此御方様へ駈込候四人ハ、御座内ニ被差置候、御小姓頭ヨリ万端〔文〕ニテ透見出来兼申候、委細ノ事ハ分リ兼候ヘトモ、去年来水戸様家来御取扱ノ遺恨難凌故ト相見得申候、誠ニ天下ノ大變ニ御座候、当日ハ〔文〕ニテ御登城モ多ク、下馬ノ騒動無申計、鼎ノ沸クカ如ク有之タル事ニ御座候、右之通十七人必死ノ切先尖ク、井伊様不意ニテ如是仕合ト相心得候、又七ツ時分ニ相成、脇坂様へ駈込候四人、又御方様へ御預トノ事ニテ、御屋敷中大騒動、七ツ後時分ヨリ御留守次席吉田平助、御物頭〔文〕我淺之助・魚住源左衛門・松本八左衛門、御小姓頭永田武兵衛其外ニモ都合八騎、御駕籠四挺、歩御使番・御小姓・外様与御駕籠一挺ニ廿人ツ

、長鑰ヲ持、其外同勢夥敷請取相濟、引取ハ六ツ半過ニテ、前後左右ニ高張挑灯・箱挑灯・小丸星ノ如ク、元禄御預リ人ノ御〔文〕ノ由ニ御座候、二人ハ極々深手ニテ蒲団ニ包ミ抱參申候、今朝ニ至リ少々元氣付候由ニ候得共、生死ノ程ハ何様ニ有之哉ト存申候、右ニ付木挽町〔細川家別邸〕八丁堀ヨリ御人数百五十人程相詰、御武器方ニハ玉葉鉄砲杯次第々々ニ御備へ相成、其混雜ノ内、右御預ケ人御稽古場仕切ヲ以テ被召置候御治定相成、五ツ時分ヨリ大工二百人計入込、終夜ニ出来仕候、

一夜具蒲団枕共

一黒羽二重小袖共

一足袋一足ツ、

一羽織一ツ

一小菓〔菓ハ誤書ナラン〕

一手拭

一裏付袴一具ツ、

右ノ外枯道具小サ〔枯ハ誤リ乎〕ク惣テ銘々ニ被相渡候、療治方ハ

白木綿等色々余計ノ品物〔文〕夜具蒲団ハ、昨夜ハ木綿

猶御示談ノ趣意、惣テ八丈郡内杯ノ絹夜具新規出来被渡下、其外三度ノ御料理結構ノ御取扱ニテ絶言語候、

今朝ハ銘々ノ大小御役所上リ、惣テ植物等上通ニテ小
栖並ニ至リ、鹿具クマ銀ナク、刃物ハ不殘業物ト相見
ヘ、新刀ハ一本モ無之、惣テ古刀二尺三四寸五六寸迄
ノ間不殘鋸ノ如ク、受疵ハ一步程ニ切込有之、余程ノ
儀ニ相見ヘ申候、直ニ上箱出来姓名ヲ記シ、御役所ニ
有之候、取分大關和七郎ト申人ハ、年齢二十三歳ノ
内人品骨柄拔群ノ人体ニ御座候、十七人ノ内此方様ヘ
一人死亡、脇坂様五人ノ内一人死亡、殘四人水戸様ヘ
引取候儀否ノ儀未相分リ不申、右四人ヨリ御首ヲ持引
取候、然トモ分兼申候、大關ハ到テ宜敷眠居申候、

○大關和七郎

○森 五六郎

佐野竹之介

關 新兵衛

増子清三郎

○森山繁之介

鯉淵要人

山口彌之助

○黒澤忠三郎

廣岡冬次郎

○杉山理一郎

廣木松之介

○齋藤監物

細田重藏

○蓮田一五郎

右丸輪此方様へ御預ケ死人六人、四人ハ行衛
不相分、

一三月晦日井伊掃部頭事思召ノ訳有之、御役御免被成候
事、

二二七 有村兄弟藩主へ捧ケタル書

三月二日ノ夜、雄助ハ島津壬生へ江戸之形勢等相話シ、

翌朝御屋敷ヲ出候節、此節幕府姦賊ヲ討候主意相認メ、

太守様へ一封奉差上度候ニ付、御披露奉願候趣ニテ、

左之通、

謹テ奉言上候、

被聞召通趣被為在、去年十月六日御書取ヲ以御諭之
趣同腹之者共ヨリ申越、謹テ奉拜誦実以難有奉恐入
候、右ニ付一同ヨリ御請書差上候付テハ、イツク迄
毛奉受 尊命可奉尽微力儀ニ候ヘトモ、幕府之執権

奉茂如

天朝方、今奉奪

勅書暴計難黙止、水戸有志之面々申合斬奸之決心仕

候、御受書仕候トテ

天朝御危急之時勢傍觀仕候道理無之、依テ如斯、誠

恐々々謹言、

申三月三日

有村 雄助

有村治左衛門(右)

右書付島津壬生へ託シ候由、尤先便江戸之形勢書相添(申儀候由ニテ相添候書付左通カ)候書付左之通、

昨晚申上置候得共一条ニ付、此一封奉達(三月二日)

御聴度奉存候間、筋々へ御披露奉願候、

天朝御危急之時勢御座候故、急ニ御屋敷出足仕候間、

右之趣乍恐書付ヲ以奉願候、以上、

申三月三日

有村 雄助

有村次左衛門

一雄助・次左衛門兄弟二月廿日仕出之書状宿元へ相達、

短冊二枚ニ歌書記シ有之、

大君の憂き御心をやすめすは

ふたゝひ国に帰らさらめや

雄 助

皇祖の御為とおもふ丈夫の

矢竹心の通らさらめや

次左衛門

一一挙之節、次左衛門雄々敷働イタシ、姦魁ノ首ヲ打取、

是ヲ提ケ、一人衆ニ後レ辰ノ口ノ方ニ向ヒ候処、井伊屋

敷ヨリ又々兩人討懸リ候ヲ容易ク討スマシ候、シカレ

トモ腕ニ重創ヲ蒙リケルヨシ、依テ首ヲ風呂敷ニ包、

遠藤様辻番所へ上リ、血ニ染ミタルヲ清潔ニ仕末シ、

右包ヲ膝元ニ居へ凜然トシ割腹イタシ候由、誠ニ古今(テ脱カ)

未曾有之勇功、聞人感歎セサルハナシ、就中印ヲ揚ケシ

其事誠心ノ感応アリシナルヘシ、井伊家討死ノ内見事(事其カ)

ニ兩段ニナリシハ、ミナ此士ノ業ナリシコソ嗚呼可惜、(天久保日記(東京大学所蔵)にて補註)

二一八 井伊家届書

今朝登城掛、外櫻田松平大隅守門前ヨリ上杉弾正大弼(親良、許築藩主)

辻番所迄之内ニテ、狼藉者鉄砲打掛ケ、凡二十人余拔(春鹿、水沢藩主)

連駕籠へ目掛切込候ニ付、供方ノ者共防戦イタシ、狼

藉者一人討留、其余手疵深手為負候ニ付、悉ク逃去申候、拙者儀捕押方指揮イタシ候処、輕我イタシ候付一先掃宅イタシ候、尤供方初即死手負之者別紙之通御座候、此段御届申達候、以上、

三月三日

井伊掃部頭

別紙

深疵

日下部三郎右衛門(令立)

○即死

河西忠右衛門

手疵

櫻月猪三郎

手疵

柏原徳之丞

○即死

加田九郎太

手疵

松居貞之丞

手疵

名越源次郎

薄手

渡邊泰太

(手疵脱之)

手疵

岩崎徳之丞

○即死

片桐權之丞

手疵

澤村軍太

○即死

小河原秀之丞

手疵

永田太兵衛

葉師鐵五郎

手疵

萩原吉五郎

薄手

取持甚兵衛

薄手

水谷求馬

薄手

草履取吉田太助

(手疵脱之)

障尺 彌右衛門

手疵

(令脱之) 勝次郎

右之通御座候、

(番目二〇六に同文あり、補註を加えず)

世評ニ曰ク、井伊直弼カ刺客ノ為メニ斃レ、首ヲモ取り去ラレタルニ、届出ノ書面笑フヘキノ甚シキモノナリト喋々セリ、加之幕府ハ病氣慰問等ノコト又一笑話トナレリ、

二一九 水薩浪士各自懷中書

萬延元年庚申三月三日井伊侯ヲ討ツ時、銘々懷中イ
タシ候由、

此度水戸殿御家来櫻田騒動相濟

御届被出候節差出候書付

墨夷浦賀へ入港以来 征夷府ノ御処置、縦令時勢ノ変
革モ有之、随テ御制度ノ変革ナクテハ叶ハヌ事情有之
トハ乍申、出頭ノ有司専ラ右ヲ口実トシテ、一時偷安
畏戦ノ情ヨリ彼カ虚喝ノ勢ニ恐怖イタシ、貿易・和

親・登城・拜礼ヲモ指ユルシ、条約ヲ取替シ、踏繪ヲ廢シ邪教寺ヲ建、ミニストルヲ永住為致候事等、実ニ神州古来ノ武威ヲ穢シ、国体ヲ辱シメ、

祖宗ノ明訓孫謀ニ戻ルノミナラス、第一

勅許モ無之儀ヲ差許候故、

天朝ヲモ奉蔑如候儀ニテ、実ニ不相濟事ニ候、追々大

老井伊掃部頭殿所業ヲ致洞察候処、將軍家御幼少ノ

御砌ニ乘シ、自己ノ權威ヲ振ハン為メ公論正義ヲ忌ミ

憚候テ、

天朝公辺ノ御為筋ヲ深ク存入候御方々、御親藩ヲ初メ

公卿衆・大名・御旗本ニ不限讒構イタシ、或ハ退隱或

ハ禁錮等被仰付候様取計候モ、夷狄跋扈不容易砌ト

申シ、内憂外患逐日差迫候時節ニ付、恐多クモ被惱

宸襟、御国内治平公武御合体弥長久ノ基ヲ被為建、外

夷ノ侮ヲ不受様被遊度トノ

叡慮ニ被為在、公辺ノ御為

勅書御下被遊候カニ奉伺候処違背仕、尚更諸太夫始有

志ノ人々ヲ召捕、無実ヲ羅織シ嚴重ノ処置被致、甚數

ニ至リ候テハ、三公御落飾御慎栗田口親王ヲモ奉幽閉

候テ、勿体ナクモ

(當時事ヲノ脱ナリ、真偽如何シ)

天子御讓位ノ事迄奉醜候、件ノ奸曲無所不至、実ニ天

下ノ巨賊ニアラスヤ、(異本大ヲ右トス)大罪状ノ儀ハ委曲別紙ニ認メ候

通り、斯ル暴横ノ奸賊其俛差置候テハ、益公辺ノ御

政体ヲ乱リ、夷狄ノ大害ヲ来シ候儀眼前ニテ、実ニ天

下ノ安危存亡ニ拘リ候事共痛快難黙止、京師ニモ及奏

セシヤ否ヤ尚ホ可慮聞、今般天誅ヲ加へ候心得ニテ令斬戮候、勿論公辺

へ御敵対申上候儀ハ毛頭無之、何卒此上

聖明ノ

(異本脱)勅奏ニ基キ、公辺ノ御政事正道ニ御復シ、尊

王攘夷正誼明道天下万民ヲシテ富岳ノ安キニ処セシメ

給ハンコトヲ希フノミ、聊殉国報恩ノ微忠ヲ表シ、伏

テ天地神人ノ照覽ヲ奉仰也、

別紙 皇国于常世

天日嗣連綿照臨シ給ヒ、

伊勢ノ神宮上古ニ替ラセ給ハス、神道ヲ尊ヒ武力ヲ尚

ヒ給フテ、自然ノ遺風余烈ナレハ、古ヨリ遠略ヲ展ヘ

給ヒ、且夷狄ノ禍有之候日ハ精々退攘シ給ヒシ事、青

史ニ著シテ今更称揚スルニ不及、武将ノ世ト成テモ弘

安ノ蒙古ヲ鑿ニシ、文祿ノ朝鮮ヲ征スルコト、モ、

神州ノ武威ヲ海外ニ輝シ候儀、人口ニ膾炙スル処ナレハ、是又贅言不致候、(徳川家康)東照宮ニ至リ給ヒテ、尊王攘夷ノ念深ク被為在候ハ不及申上、勃興ノ盛時ナレハ、其初メハ諸蛮来航通商ヲモ許シ置給ヒシナレトモ、諸蛮畏服シテ覬覦ノ念ヲ達セシコトモアラス、然ルニ東照宮終ニ其巨害アル事ヲ洞見シ給ヒテ、洋教ノ禁ヲ嚴ニシ給ヒ、(藩川家光)大猷公益邪徒ヲ駈斥ケ斬戮シ給ヒ、三眼ノ明ヲ四海ニ布キ給フコト、誠ニ千古ノ英見卓識ニテ、後嗣遵奉シ給フ者ナリ、扱近時ニ至リテハ夷狄狡謀點略ノ志多ク出来テ、万国ニ通信交易シ、遂ニ小ヲ併セ弱ヲ制シ、次第ニ境界弘大ニ相成候勢ニ乗シ、屢々神州ヲ覬覦スルニ至ル、乍去打払ノ命有之時ハ、格別ノ事ハ仕出ス事モ不成得シテ打過ヌ、天保十三年打払ヒ令ヲ停止シテ仁恤セラレシヨリ、頻リニ来航シ跋扈ノ体ヲ顯スニ至ル、就中嘉永癸丑墨夷浦賀へ入港、暴威ヲ示シ難題申掛候、以来征夷府ノ御処置、古今時勢ノ変革モ有之、一概ニ御国威ノ御主張難被遊儀ハ、治世ノ風習サマテ有之事ニ候へハ、申迄モナク夷狄ノ貪婪(マ)元ヨリ厭事ナク、殊ニ狡謀譎計ヲ挟ミ覬覦ノ念ヲ逞ク致候故、詰リ耶蘇ノ術中ニ陥リ、

神州ノ泰否ニモ拘リ、着眼ノ大基本御庶議御一定ノ上、(廟カ)諸制度御変革無之候テハ、於時勢不叶筈ニ候へトモ、近来諸蛮夷ノ御扱振推察仕候ニ、乍憚一定ノ御庶算如何有之ヤ、去ル卯年迄ハ追々内備嚴整ノ御達モ有之、(安政ニ乙卯ヲ云フ)辺海ノ御守衛被仰付候諸大名ニ至リ候テハ、多年防策ノ為国力ヲ費シ被励大勤候処、不測モ去辰年和親交易取結シノ上、恐多クモ征夷將軍ノ御名城へ夷賊共登城被仰付、剩へ御客応尊敬ヲ被尽候有様、春秋城下ノ盟ヲ恥候比較ニアラス、神州古来未曾有ノ御失体実ニ冠履倒置ノ御処置ト可申、驚歎ノ至ニ候、縱令御国政ノ儀ハ、関東へ御任セニ相成居候迄、斯ル重大ノ事件ハ、第一勅許モ不被為在候儀ヲ、全ク掛リノ有司教輩ノ了簡ヲ以テ、五ヶ国本条約差許シ、將軍家御印章ノ御書翰被差遣候始末、何程偷安ノ末俗、戦争ニ可及儀ヲ恐怖致候迄、天下後世ニ対シ大義名分ト申モ有之、征夷ノ御任如何可有之哉、忝クモ武門ノ列ニ連リ、二百余年ノ恩沢ニ浴シ候テハ、不堪悲憤ノ至ニ候、況ヤ徳川御家譜代恩顧ノ士、東照宮ノ奉対神靈沈黙傍見致居候儀、廉恥無之ト可申、決テ不相濟事ナリ、扱前件夷狄交易

ノ儀如何様ニモ

(安政四丁巳) (正傳 老中)

勅許申受度所存ニテ、去ル巳年春堀田備中守上京イダ

(九条尚忠)

シ、賄賂金錢ヲ以テ関白殿下ヲ誣惑イタシ、無勿体モ
竜眼ヲ可奉暗ト、隱謀秘計不一方候処、

今上皇帝聰明絶倫、千載不世出ノ

聖主ニ被為渡、

皇国開關以來尊嚴ノ国体、淳厚ノ風俗

今上ノ御代ニ及ヒ、夷狄ノ為消却汚穢被致候テハ、第

一伊勢神宮ヲ初メ御代々ノ

御神靈ニ被為対、王位ノ御任不被為濟、尤戰ヲ被為好

候ニハ無之、国体ヲ不失万民安堵ニ被為遊度トノ

叡慮ニ付、カシコクモ一七日ノ間石清水等へ御祈禱被

(京都府)

遊、関東ヨリ如何様申上共一切御許容難被遊、万一非

常ノ節ハ縦令万里ノ波濤ヲ越へ、孤島ニ終候共御恨不

被為在候へトモ、(京都府)泉涌寺ヲ御離レ被遊候事ハ難被為忍

ト、窃ニ

宸襟ヲ御惱シ被遊候事トモ伝承仕候、四海ノ人民誰カ

感激悲泣セサランヤ、当時

神州ノ命脈累卵ヨリモ危キコトナリシニ、百官群臣

忠憤切齒ノ余リ、八十八人ノ堂上方

禁中へ馳集リ、万死ノ力ヲ以テ諫奏奉リ、其外有志ノ
大小名勲

王ノ微忠ヲ献セシ故、三公御始弥感憤被遊、安政丁

卯被綏

叡慮、三港ノ外畿道数ヶ所開港并夷狄永住邪教寺取建

等ノ儀ハ、一円御許容難被遊趣

勅命ヲ以テ御下知被為在、猶又内地人心ノ居合如何ニ

付、大小名ノ赤心ヲモ被聞召度、尤衆議

奏聞ノ上

叡慮被為決候ハ、

伊勢大神宮神慮可相伺トノ御儀、廿一日議奏・伝奏衆

ヨリ堀田備中守へ御返答被差下、俄ニ下向被 仰出候

処、夷狄内条約ノ儀ハ既ニ被差許候事故、諸大名ノ赤

心有体達

叡聞候様ニモ不相成、依之表面天下へ意見建白ノ達シ

有之候へトモ、素ヨリ夫等之事ヲ以テ、専ラ西洋ノ事

態張大ニ主張シ、交易ヲ差許シ、一時ノ權宜無御抛、

万一関東へ御主意ノ通ニテハ、国家ノ為ニ不相成ト、

吉凶禍福ヲ以游説イタシ、猶又御三家方へモ建議ノ人

意認有之候様、御内諭モ有之由候へトモ、水戸中納言

殿ニハ関東輔弼ノ名将ニ有之、尊

王攘夷ノ御論始終一致ノ御方故、御廟算何書ト云書一

冊、当今ノ急務ヨリ将来ノ大害迄、丁寧誠実ノ建白被

致、尾張中納言殿ニモ御内論ニ不拘、京師ノ御旨意ニ

本ツキ、御処置無之テハ不相濟トノ申立ニ候事、実ニ

難有トイフヘシ、其後弥

勅許ノ有無ニ不拘、関東ノミノ御決断ニテ仮条約御差

許ニ相成候趣ニ付、御三家ニテハ尾張殿・水戸殿、御

三卿ニテハ田安殿・一橋殿、御家門ニテハ越前殿忠誠

無二ノ御方々、御一同御登城ニ相成、將軍家へ御

対顔被為願候処、御所勞ニテ御逢無之、依之元老井伊

掃部頭始御呼出シ、

天子ノ

勅命御遵奉無之、仮条約ヲ差許ニ罷成候テハ、將軍

家御違

勅ノ罪御遁レ被遊マシク、東照宮以來御代々様へ御

対シ遊ハサレ候テモ如何有之ヘキヤ、各方ノ了簡モ承

り度ト、御一同ニ御演述ニ相成候処、御前ニテハ掃部

頭始畏服ノ由ニ候ヘトモ、執頭ノ威權ヲ以不日ニ条約

差許、恐多クモ 將軍家ヲ御不忠御不孝ニ陥レ奉リ、御

称号ヲ千百載ノ後ニ奉穢ノミナラス、將軍家御大病元米白痴

人事ヲ御弁ヘ無之砌ニ乗シ、無実ノ罪ヲ羅織シ、御親

戚ノ御方々ヲ禁錮、其他正義ノ大名松平土佐守始而三

人御威光ヲ以隱居為致候所業、惡ムニ余リアリト申ヘ

ク、且又御幼君ノ御時節ヲ幸トシ、御三家方ノ權勢ヲ

推シ為メ、御連枝又ハ家老ニテ主家・本家ヲ押領掌握

セント奸曲ノ巧有之、松平譜岐守・水野土佐守・竹腰

兵部少輔私党ニ引入レ、種々姦計ヲ運ラシ、我意ニ隨

ヒ不申正義ノ士ヲ貶斥致シ、東照宮以來ノ美意良法

ヲ追々破壊ニ及候事、長大息ノ至リニ候、其後八月ニ

至リ、叡憤ノ余リ三家又大老ノ内上京致候様、重キ

勅書御下ケニ相成候処御請ヲモ指置、尾・水両家ノ儀

ハ不平之儀有之謹慎申付、掃部頭ハ用多ニテ上京難相

成、且先輩堀田備中守ノ輩取扱候儀今更致方モ無之、

依之嚴重申付候旨議奏來マデ申立、己カ逆罪ヲ逃レ可

申為メ相工ミ、間部下総守上京為致、専ラ恩威ヲ以押

付候所存ニテ、賄賂ヲ用ヒ九條殿下ヲ徒党ニ引入、内

藤豊後守ニ命シ御所向取締弥増嚴重ニイタシ、恐多ク

天子御讓位ヲモ取調候様奉要候ヘトモ、三公御始御

モ

賢明ノ御方々奉補佐

叙慮候ニ付、

朝威確乎トシテ御撓ミ不被遊、依之無実ノ罪ヲ申触シ、
近衛殿・鷹司殿・三條殿御落飾御慎被遊候様取計、其

他諸大夫始何一ツ罪無之者ヲ召捕、関東ニ指下シ、夫
々非常ニ処置イタシ、専ラ猛威ヲ以テ天下ヲ屏息セシ

メ、畿内ノ開港并邪教寺取建等本条約差許シ、且青蓮
院様御英邁ヲ奉忌、御失徳有之様申触シ、御寺務ヲ取
放シ奉幽閉候所業、乍恐

玉体ニモ奉迫候機顕然トシテ、北條・足利ノ暴虐ニ均
シク、不供戴天ノ国賊トイフヘシ、嗚呼此俣打過ナ

ハ、赫々タル
神州一両歳ヲ不出、内地ノ奸民邪教ニ靡キ、彼ノ勢焰

ヲ助ケ、平身低頭シテ彼カ正朔ヲ奉スコト掌ノ上ニ視
ルカ如シ、苟クモ人心有之ハ、実ニ痛哭長大息ニ不堪

事ナラスヤ、雖然 東照宮ノ徳沢未落地、御三家御一
門ニハ尾州殿・水戸殿・一橋殿・越前殿・阿波守・因

州家ノ如キ、
徳川御家ノ輔佐ノ良將モ有之、外諸侯ニモ薩州・仙臺・

福島・佐賀・長州・土州・宇和島・柳川等、天下ノ為

ニ忠憤ノ念日夜不怠、有名ノ諸侯モ少カラス候ヘハ、
内ハ則御家門方奉輔佐 將軍、専ラ内政ヲ修メ、外ハ
則有名ノ諸侯一意忠力ヲ尽シ、武備ヲ整ナハ

神州ノ恥辱ヲ一洗シテ、

叙慮ヲ奉安コトハ、天地神明ニ誓テ疑アルヘカラス、
依之当今事態ノ概略ヲ記シテ、天下ノ公論折衷ヲ待

チ、左袒シテ天下ヲ興起セント欲スル所以ナリ、周ノ
衰フルニ至テハ婦人スラ不恤諱シテ、周室ノ亡フルヲ

憂ヒシニ、況ンヤ二千余年ノ
天恩ヲ戴キ、二百年來 東照宮ノ恩沢ニ沐浴スルモノ

誰カ報効ノ念ナカラシヤ、草莽ノ小臣等痛憤切齒ノ余
寝食ヲ不安、日夜遺恨ヲ吞ミ、時世ヲ憂ヒシニ彼カ罪

惡近日増長、豈唯 徳川御家ノ罪人同憤ノミナランヤ、
実ニ

神州ノ逆賊也、然則天地神人同憤ノ時ニ乗シ、天下諸
侯ノ同志合力同心シ、天下ノ奸賊ヲ誅シ神罰ヲ蒙ラシ

ムルモノナリ、

二〇 浪士脇坂閼老へ出訴

我々共事国元二月十六日出立、一兩人ツ、方々へ止宿

仕、今朝愛宕山ニテ同意之者寄合(事実品川宿相摸屋其外申立書参看)、櫻田御門外辻番ト松平大隅守様御門

之間ニテ、御駕籠ノ左右ヨリ仕掛申候処、一旦ハ多人

数立塞リ争鬪致候内、御駕籠越ニ刺シ留メ、御引出申

シ御首討取申候テ、右十七人之内四人ハ龍ノ口御屋敷

表御門ヨリ入込案内ヲ乞候処、御取次立出候付、水戸

家来ニテ只今井伊掃部頭様ヲ討取候ニ付、此段御役人

様方へ罷出、公儀之御裁許相待覚悟ニ付、其迄ノ処

御育被下候様ニ、委細之儀ハ御重役方へ懸御目、御咄

可申上ト申出候由、(大久保日記(東京大学所蔵)にて補註)

二二二 浪士各藩へ御預人名

細川越中守(齊藤)

水戸殿家来

大關和七郎

森 五六郎

森山盤之助(マ、繁之介)

杉山彌一郎

町奉行へ引渡候様最前相達候処、直ニ御預ケニ被仰付、
不及引渡旨、細川越中守家来へ可達事、

二二三 府内警衛達書

松平肥後守(容保、会津藩主)

酒井左衛門尉(忠榮、庄内藩主)

大久保準之助(忠丸、小田原藩主)

松平越中守(定敬、桑名藩主)

今朝掃部頭登 城掛ケ、水戸殿家来共及乱妨候ニ付テ
ハ、水戸表ヨリ若人数致出府候儀モ有之候ハ、時宜
ニヨリ可及沙汰旨早々人数差出候様、兼テ手筈可被申
付置候、(大久保日記にて補註)

二二三 水戸家へ達書

水戸殿家老衆江

今三日水戸殿家老之者多人数、掃部頭登 城於途中、
短筒等相用乱妨ニ及ヒ、怪我人等モ有之候ニ付テハ、
此上末々心得違之者可有之哉モ難計候間、追テ相達候
迄昼夜共居屋敷・下屋敷等門々出入之者嚴重相改、重
役之内相詰候様可被心得事、(大久保日記に同文あり)

二三四 町奉行御目付へ達書

今朝於外櫻田水戸殿家来及乱妨候付、水戸殿上屋敷怪敷体之者出入之有無等、何レモ組支配向之者昼夜相廻シ、嚴敷心付候様可被致候、尤水戸街道多人數罷出候哉之趣ニモ有之候間、若出府モ致シ候模様ニモ候ハ、其段月番之老中宅へ早々申越、時宜（以時宜カ）ニ依リ召捕候様可被致事、

〔天久保日記にて補註〕

二三五 水戸殿屋敷警戒

松平譜岐守（頼胤）

松平大炊頭（頼徳）

松平播磨守（頼地）

松平大學頭（頼誠）

〔水戸殿屋敷門々出入之義達ニ有之脱カ〕
〔天久保日記にて補註〕

二三六 水戸浪士預ケ替

細川様へ御預之内

森 五六郎

右稻葉伊豫守様へ（頼通、白根藩主）

森山盤之助（繁力、介）

右田村賢次郎様へ

右之通御預替相成候、（風聞脱カ）

右二人腕被切候へトモ、丈夫ニテ願書差出候上、一味名前等申立、無間モ中務大輔様宅ニテ相果、直ニ町奉行へ引渡相成候、
〔天久保日記にて補註〕

三二七 當時ノ形況世説一般

井伊（行カ）

堅からも横から見ても二本棒

真向に見れば井伊のべら棒

御家門のうへに立へき井伊さまを

辻切なんとは余りとふよく

武士の太刀風強きひとしきり

外櫻田にちらすあけぼの

申三月三日

松平大隅守様天下馬前広場辻ヨリ式百軒程（水カ、角カ）

人数三拾人程

右不残着込着用イタシ候様、死人ハ釣台ニテ井伊様へ引取候者五人、肩へ掛ケ候者一人、四人ニテ釣台ニ乗セ候者一人、手疵ヲ受ケ刀拔通シ屋敷へ入者一人、八代洲河岸弾正様・伯耆様ノ間ニ死人袴着用二人、龍之

口堀ニテ切腹イタシ居候者一人、(恒馬守、風統)遠藤様前ニテ何者ノ首二候哉我前ニ置、切腹イタシ度ニ、支度ニ掛リ、目ノ前ニ切腹相成候着込着候者一人、脇坂様御玄喚(関九)ヘ刀抜候俣ニテ、後鉢巻白晒ニテ罷出候者四人、右之通林屋佐吉方ヨリ書出、尤自分見分イタシ候、

薩州 有村次左衛門

遠藤但馬守様辻番江掃部頭様御供頭服部三郎右衛門首ヲ引提ケ死ス(目下暫令立)(直弼ノ首級ナリシハ僉人知ル処ナルニ、之ヲ塗抹セムトシタルハ、当時ノ笑話トハナレリ)

水戸 佐野竹之助

黒澤忠三郎

鯉淵 要人

廣木松之助

御月番脇坂中務大輔様へ名乗出、同夜細川越中守様へ御預リ、内一人死ス、

(岡)廣島子之太郎

森 五六郎

關 鐵之助

森山繁之助(介)

(大久保日記に同文あり)

三三八 三月朔日(一挙前々日) 人相書ヲ以踪索人名

大關(和七郎)和子太郎

山口辰之助(介)

横山彌太郎(一)

蓮田市五郎

齋藤 監物(重忠)

稻田 市藏

増子 金八(後(経儀之介)

海渡崎之助(大久保日記に同文あり)

三二九 茂久公御引返急報

太守様筑後松崎駅ヨリ御病氣ニテ御帰国、来月二日御着之旨被仰出候事(全文前二記ス)

三三〇 参考 庚申轉蓬(日)録鈔關鐵之介日記

萬延元年庚申五月十六日 曇、風氣如秋

薩州山入ニ求麻(也カ)通り迎、水股ヨリハ城下ニ近シト云、

日向へ通ル往還ノ由、カクト(加久藤郷八日州諸県郡ニア

リ、此山中ニ肥後国ニ通ル山道多シ、其中ニ大ナル所ニハ、番所ヲ設ケテ他藩人ノ出入ヲ厳査ス、山道ニハ辺道番人アリテ出入緩ナリノ番所改処アリ、入安シトナリ、上十五日、下十五日ト番人交代スルト也、

此日庄衛門ヘ托スル処ノ書状不達シテ帰ル、書中ニ曰、堀・高崎御城下士林ニ相違無之候ヘトモ、当分向々ヘ旅行留守故書通ハ無益也ト、藩士澤田市之介ト云士人ヨリ慥ニ聞取シ故、金子指添御返納ス、堀ハ澤田隣家ニテ殊ニ懇意也ト被語申候由、不得止返進可致由、不悪当人方ヘ申訳呉候様云々也、茂平当惑シテ談アリ、吁々五六伯名（堀ハ仲左衛門、高崎ハ猪太郎、沢田ハ加久藤郷ノ人ナラン、考フヘシ、蓋見玉市之介乎、見玉ナレハ堀カ近隣トモ云フヘシ）〔番号一九三に説明書を除いて同文あり〕

三三二 参考 佐土原侯書翰 宛名送ス

今日ハ弥御発駕可被為在奉恐悦、然ハ昨日ハ態々御出被下候処、折節留主中ニテ残念奉存候、扨御願ノ両条イマタ相済不申候哉奉伺候、昨日モ容堂殿〔山内豊徳〕ヨリ被尋候故イマタ無之段申候処、公辺モ色々御取込ニテ運兼可申、併左様ノ筈ハ無之、是非早ク相運候様被申候、

右ニ付甚以心配仕候、少時御猶予被仰出候ハ、〔文久元年〕来正月中ニハ是非共 御参府不被為在候テハ、御済不被成候形勢 幕府ニテモ是程迄御改革有之、奉勅ノ道モ相立候処、御自国ノ儀ニテ御断被仰上候儀、如何可有之哉、被対

天朝万一御済不被成候筋、各国ヨリ奉存候テハ、実ニ奉恐入候次第、然ハ是非共正月中ニハ 御参府不被為在候テハ、於私候テモ申候信義ヲ失ヒ奉恐入候次第ニ候、就テハ其段是非被仰上度、成否ハ 思召ニ有之候ヘトモ、先存寄所ニテ申候テハ不相成、同様ノ御咎奉受候共致方無之、存寄文ハ申上候、弥御承知ニ相成候ヘハ、早々被仰越候迄ハ私モ出立見合、 御参府奉待上候、併又々何ソ無御抛御訳到来仕候ハ、其節ハ無致方、先日御沙汰ノ通尤早御暇申上罷下可申候、何分右御模様相分候迄待上可仕候心得ニ候、昨日越前口振同様ニ御座候哉、同度儀御願濟ニ可相成様子ニ御座候哉、若御模様ニ寄候テハ又々追々出張可仕候、扨亦右ニ付テハ御願ニ相成候ハ、二郎左衛門ヘ罷下候様、先日御内々奉承知候、此儀ハ誠ニ奉恐入候、一人ニテハ大事ノ御使故何卒若右様ニ相成候訳ニ候ハ、外ニ

万延元年（1860）

今一人誰ニテモ宜敷候間、被仰付候様奉願候、且又昨日相願候随真院下向ノ儀ハ宜敷奉願候、右ノ段乍御取込中早々申上度如此御座候、以上、

十月廿九日

尚々折角御自愛御旅行御供可被成候、已上、

島津（忠寛）淡路守

宛名切断

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編
萬延元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料」の記載あり
(紙数五十三枚)〕

目録

- 〔茂久公御親書文武奨励
改元布告
蒲生帖佐二郷々名布告
中村彦太郎外国人ニ傷ク
大判金鑄換布告
新鑄小判金通用布告
尾張侯一橋公御慎解布告

江戸御本丸御普請献納金日光御門主引受達書

各所大砲場調練届出達書

年号文字認方布達

参考 九條尚忠家記鈔

御冠司訴願

〔参考〕江戸両城焼亡記

御本丸焼亡後落書

清国語学館創設

参考 寺島宗則自記鈔

当時鹿兒島米価

有馬新七建言

江戸本丸落成式

大艦ニ用ル国旗及ヒ帆印布令

外国人途中行逢ノ令

鉄錢鑄製及価格布令

藤堂高猷其他推任叙

参考 川崎道民外国事情報告

前全父へ送レル書簡

当時外国人ニ対スル巷説

小野友五郎米国ヨリ通信

無名落シ文

佐久間修理作

災孽掃除ヲ伊勢大廟ニ祈ラセ玉フ

攘夷論者熾ニシテ洋風忌避ヲ知ルノ一端覺言五通

以上三十一条

二三二 茂久公御親書文武奨励

家老中へ

二三三ノ一

昨年申達候通、聊緩怠ハ無之筈候得共、愈文武ノ道ヲ

致精励、誠忠純孝ノ徳ニ基キ礼讓ヲ專ニシテ、淳和ノ

風俗ニ立復候様有之度候条、各初此旨ヲ存シ、末々迄

モ趣意相達候様、殊更軍役ノ儀ハ国家ノ急務候間、各

申談有之度候事、

御家昨年被

仰出置候通、弥カ称文武ノ道ヲ致精励、誠忠純厚ノ徳ニ基

キ、礼讓ヲ專ラニシテ、淳和ノ風俗ニ立復候様、且御

軍役ノ儀付、

御別紙ノ通

御書取ヲ以被

仰出、誠以難有

御趣意ノ御事候条、一統謹テ奉承知、弥カ称文武忠孝ヲ相
励

御趣意ノ御旨、聊致忘却間敷候、此旨向々へ不洩様早
々可申渡候、

三月

左衛門 島津久敏 筑後 川上久封

伯耆 島津久福 但馬 川上久運

登 島津久包 式部 川上久美

右申三月御小姓与番頭ヨリ達ス、

二三三ノ二

閏三月八日

一造士館掛

一演武館掛

桂小吉郎久武

右ノ通掛被仰付候条、時々見舞兼テ人物致見聞、格別

心掛宜敷出精ノ者有之候ハ、不差置可申出、且又往

々初テ役儀被仰付候者調被

仰出候間、兼々可然人物調置候様被

仰付候、此旨可申渡候、

閏三月

川上筑後全上

(番号一八九に同文あり)

三三ノ三
庚申三月十二日

家老中江

昨年申達候通、聊緩怠ハ無之筈候ヘトモ、弥文武ノ道ヲ致精勵、誠忠純孝ノ徳ニ基キ礼讓ヲ專ニシテ、淳和ノ風俗ニ立復リ候様有之度候条、各始此旨ヲ存シ、未々迄モ趣意相達候、殊更軍役ノ儀ハ国家ノ急務ニ候間、各申談有之度候事、

三月十二日

此ノ訓令ハ、公御参府御発途ニ就テ発セラレタル者ナリ、

二三三 改元布告

萬延

右之通年号被相改候旨、去ル朔日、於江戸被仰渡候段申来候間奉得其旨、去ル朔日ヨリ諸書付等ニモ萬延ト可相改候、此旨支配中へ可被申渡者也、

閏三月十九日 御家老座印

二三四 蒲生帖佐二郷々名布告

〔給良郡〕
蒲生並帖佐郷土片書ノ儀、是迄島津周防殿地頭所何方郷土ト認来候ヘトモ、周防様御儀先般御会釈向被為替

候ニ付テハ、右片書ノ儀、以来郷名迄可相認候、此旨可承向へ可申渡候、

四月

但馬 川上久運

前卷安政六己未年月、御会釈向幕府ニ御届書参照スヘシ、

二三五 中村彦太郎外国人ニ傷ク

御馬乘

中村彦太郎

異人ヲ傷ケ、十月四日下着イタサレ候由、異人ハ犬ヲ列レ歩キ候所吠カ、リ候ニ付、足ニテケラレ候処、才領ノ公義役人相咎メ候処ニ、異人袖鉄砲ニテ打候ニ付、刀ニ手ヲ掛候処逃去候付、追駈ニテ打果候由、異人ハ頭ヲキラレ候由、殺サ、ルハ遺憾ニテ候、中村カ異人ヲ打殺シタリトハ虚説ナリ、カスリ疵ヲ負セ候〔第一卷參看〕

二三六 大判金鑄換布告

大目付へ

此度大判吹直被

仰付、是迄之大判ト引替、当四月十日ヨリ兩替屋へ可

相渡候間、献上并被下物其外同日ヨリ可相用之事、

但新大判沓枚廿五両ノ積、兩替之者共歩金多ク不可
取候、

一 是迄ノ大判沓枚ニ付、新大判沓枚へ増歩金三十両相添
引替遣候間、聊モ不貯置、別紙名前ノ者方へ差出引替
可申事、

一 只今迄通用大判ハ、当四月十日ヨリ通用停止ノ事、

右之趣因々へモ可触知モノ也、

右之通可被相触候、

閏三月

二三七 新鑄小判金通用布告

大目付へ

此度吹立被仰付候新小判・沓分判・二分判・二朱金
共、四月十日ヨリ通用可致候、尤有来金銀取交、受取
渡方兩替共無滯通用可致候、

一 保字・正字小判、沓分判並（分）二歩判・二朱金共、新小判・

沓分判・二分判・二朱金ト引替候筈ニ候条、引替御用
相勤候モノ共方へ差出引替可申候、

一 武家其外共町人へ相对ニテ申付、引替御用相勤候モノ

方へ差出、為引替候義モ勝手次第第二候事、

一新小判・沓分判・二分判・二朱金トモ兩替ニ付、切實
之儀前々之通相心得取遣可致事、

右之趣可被相触候、

四月

二三八 尾張侯一橋公御慎解布告

覚

（徳川齊昭）尾張前中納言殿御事、先達テ御隠居急度御慎被

仰出候処、出格之

思召ヲ以急度御慎御免被

仰出候、

一 （徳川慶喜）徳川刑部卿殿御事、先達テ御隠居御慎被

仰出候処、出格ノ

思召ヲ以御慎御免被

仰出候、

右之通被

仰出候間、得其意相達、可然向々へ可被達候事、

九月

二三九 江戸御本丸御普請献納金日光御門主引受

達書

此度

御本丸御普請ニ付、諸寺社上納金ノ儀ニ付テハ、兼テ相連置候趣モ有之候処、天台宗ノ寺院ハ日光御門主御引請御上納、浄土宗ノ寺院ハ増上寺(東京都港区)へ取集、上納之積御願濟相成候間、此段相連候事、

二四〇 各所大砲場調練届出達書

覚

御台場・大森町打場・越中島・大塚調練場・新錢座其外諸向大砲稽古致シ候節ハ、前々日相届候様向々ハ早々可被達候、尤是迄御目付ヨリ申聞候分ハ、是迄之通可被心得事、

四月二十五日

二四一 年号文字認方布達

覚

此度改元被

仰出候、萬延之文字重事ノ外ハ、萬・万ノ文字イツレ

ノ方認候テモ不苦候間、其段向々へ寄々可被達候事、

四月十五日

二四二 参考 九條尚忠家記鈔

二四二ノ一 此度 御本丸炎上ニ付、早速

勅使ニモ被差向度卜

思召候へ共、關東御時宜之程難計ニ付、右之

御沙汰ニ無之、御内々為御尋、御料紙御硯箱一具・御

屏風一双被進之、則及言上度、不大形

御満悦ノ御事ニ、此ノ由御両卿江方卜可申入候旨年寄共ヨ

リ申越候、則私方へノ奉書入御披見之事、

正月

二四二ノ二

一筆令啓候、此度 御本丸炎上ニ付、早速

勅使ヲモ被差向度卜

思召候へトモ、当時御時宜之程モ難計ニ付、右之

御沙汰ニ無之、御内々為御尋、御料紙・御硯箱一箱・

御屏風一双被進之、則及言上度、不大形

御満悦ノ御事、此旨伝奏衆迄可被申達候迄ニ存候、

(安政六年乙) 十二月二十八日 (龜野藩主、老中) 脇坂中務大輔

安宅封
〔西尾藩主 老中〕
松平和泉守
乗全封

〔忠義、京都所司代〕
酒井若狹守殿

二四三 御冠司訴願

乍恐奉願上口上書

一 私房之儀ハ、從往古御冠司卜唱、乍恐

後陽成院様御代御冠奉調進候処、為御褒美御冠御法式

御巻物拝領仕、御冠師ニ被為

仰付、

御推使筑後守ニ

勅許被為 成下、代々受領候義

勅許菊御紋付御提灯拝領仕、並每歳年頭為御祝儀献上

勅許拝領物被 仰付、將又

御即位之節ハ、御玉冠烏皮御沓御用相勤候ニ付、別段

於二條御蔵御祝儀米拝領仕、其外臨時御用之度々ハ、

御下知ニテ御法式相守調進仕来、就中慶長年中

東照神君様、私先祖 筑後守駿府へ被為 召出

御目見仕、御冠被

仰付候テ、葵御紋付御飾府御提灯^{マ、附カ}・御荷印等拝領仕候
御由緒ヲ以、例歳年頭為御祝儀

勅使御參向之節ハ、御供參府仕

御目見、且献上拝領物・御能拜見、御料理頂戴仕、且

將軍

宣下、其外臨時為御祝儀

勅使御參向之節、父子共御供參府仕

御目見、献上物並^マ□時服拝領、御能拜見、御料理頂戴

仕、都テ如先格御台礼ヲ以、至唯今迄數代之者連綿相

続仕候段、冥加至極難有仕合奉存候、右依家職往古ヨ

リ同職ノ者無御座候、御冠之儀諸家様御用共、私房之

限調進仕候儀ハ勿論、御法式ガ有之無之トモ、御大切

ノ御品ニ付、清淨潔斎仕入念調進仕候儀ニ御座候、度

々近來他職ノ者共法式モ不弁ル、細工仕、右体法式ニ

不相叶紛敷品依々売捌、又ハ市中貨物屋ニテ、近來貨

売等仕候ニ付、外方ニテ取扱候紛敷品迄モ、私方ニテ

仕立候様ニ相当リ、自然汚名ニ相成、職方ノ差支ニ相

成、元来手狹之家職弥衰微仕、先祖ヘ対シ候テ敷ケ敷

奉存候間、何卒以後御冠之儀ハ、私方ノ外売捌并市中

貨物屋ニテハ、貸売仕間敷候様、乍恐洛中洛外ヘ御触レ

ノ儀、町 御奉行所へ願出度候付、何卒志願之通相叶
候ハ、弥出精 御用大切ニ仕、無御滞相動家職永続
可仕候、実ニ洪大之御慈悲伝子孫、難有仕合奉存候、
何分此段宜敷御^マ之程偏ニ奉願上候、以上、

御冠司

安政七年正月

木村近江介印

廣橋前^{〔光盛〕}大納言様

御雜掌中様

坊城中納言様

御雜掌中様

二四四 参考 江戸両城焼亡記

天保九戌年三月十日

西丸炎上、御台所ヨリ出火、奥向不残、十五年目、

但嘉永五子年迄、

天保十五甲辰年五月十日

御本丸炎上、九年目、

但嘉永五子年迄、

嘉永五壬子年五月廿二日晝寅剋

西丸炎上、坂下御門ヨリ出火、御殿向不残卯刻鎮火、

天保九戌年ヨリ十五年目、

同十五辰年ヨリ九年目、

同年十一月廿八日晝

紅葉山御宝蔵御焼失、

安政六己未年十月十七日、申ノ中刻ヨリ

御本丸不残炎上、

天保十五辰年五月ヨリ十六年目、

二四五 御本丸焼亡後落書

大手下馬札へ^{張紙之由}

御用之外出火無用、

御老中門前へ^{張紙}

火事差出度モノ在之候へハ、伺之上可差出事、

用水桶に江戸の水

^{フシロ}御城へまては気が付ぬ

二四六 清国語学館創設

達志館

右ハ、此節唐通事学館被召建候ニ付、館名右之通相

唱候様被仰付候条、唐船改役へ申渡、可承向々へモ

可申渡候、

九月

伯耆 島津久福

従来唐通詞・朝鮮通詞ノ二ツアリ、唐通詞ハ数十家アリト雖モ、各一家ヲナシテ門人ヲ教習セリ、然ルニ近年外国船来ルコト頻繁ナルカ故、其通弁ハ僉唐通詞ヲ以テシ、不通不弁ナルカ故、尚ホ人員ヲ増サムカ為メ、初メテ館ヲ設ケ教育セラル、ニ至レリ、名ツクルニ本記ノ如シ、館地ハ城南高見馬場三官橋通ニ新設セラレ、教長加納某ナルモノヲシテ館中ニ居住セシメタリ、○朝鮮通詞ハ伊集院苗代川村朝鮮人種ノ中、所好ノモノヲシテ其職員タラシメタリ、是文禄ノ役ヨリシテ今ニ至リテ異ナルコトナシ、

二四七 参考 寺島宗則自記鈔

萬延元年庚申

春、米國ニ幕府ノ使節村垣淡路守等出發、福澤諭吉等之レニ随行ス、又勝麟太郎咸臨丸ヲ以テ桑港ニ航ス、此等ノ外国行アル毎ニ之ヲ羨聞ス、三月三日午後急報江戸ヨリ来リ、幕府大老井伊掃部頭暗殺ニ遇フト、此後幕政衰ヘテ勤王ノ諸藩跋扈セリ、七月江戸ニ至リ、蕃書調所ノ官宅ニ入ル、調所初ハ飯

(東京都千代田区)
田町九段坂下ニ在リ、後ニ飯田町狙橋ヨリ西ナル永井(尚志)
玄蕃頭ノ住セル官邸ニ転シタル時、宗則横濱ヨリ帰京ス、此時南部彌八郎余カ寓居ニ食客タリ、栗田浩蔵及宮本某等ハ生徒タリ、

二四八 当時鹿兒島米価

一 庚申、此度ヨリノ初秋世評田島殊ノ外宜、近年無之三年分モ可出来ト申触候処、当夏霖雨降続キ、殊ニ八月末ヨリ長雨ニテ取揚候処、去秋ヨリモ実ノリ不宜、又粟ノ穂ハカラ立宜候ヘトモ、是モ秋ノ長雨ニテ実ノリ不宜、惣テ去年ヨリモ不宜由申事ニテ候、
現米十六貫文ニ相成候由、買入ハ真米拾七貫文・赤米十六貫七百分ニテ候、

申十月廿二日

朱書七八貫五百文、後廿貫文イタシ候由ニ候、重富・垂水ヤシキ杯八十八貫五百文、千石馬場八十八貫文ニテ候、

十一月十日方、真米十七貫五百文ニテ候、

申十二月初方、十七貫文杯イタシ候、三盃入一俵五

貫文入ニテ、

酉五月迄押通、米穀直成不相替候、

庚申十一月初日、四文錢一文ニ付六文ツ、ノ直成ニ

被仰出候事、

以上幾十貫文・幾文ト唱フルハ、寛永通宝ノ以數唱ス、該錢一枚ヲ一文トス、然ルニ本藩ハ他藩ト異リテ、九十六文ヲ以テ一百文ト算シ、一貫文ハ九百六十枚トス、故ニ算術上四ノ加減アリ、他藩ニ於テモ間ニ八九六ノ數ヲ以テ一百文ト唱ヘタルモアリ、

二四九 有馬新七建言

乍恐謹テ奉言上候、

今般自

主上御剣打方之儀、

金剛定院様御受被為在、則〔資興〕

勅意御奉戴、早速波平〔安政元年〕へ被仰付成就〔就カ〕之上献上相成候、右

勅詔相下り候発端、先年御炎上ノ砌、聖護院宮へ

御遷幸被為在候節、近衛殿ヨリ金拵之御太刀〔波平〕被奉為

御慰被為備

叡覽候処、別テ被為叶

勅慮、是非為御打被遊度、幸 近衛殿ニハ薩摩へ由緒

有之事情間、御注文被遊度トノ御事ニテ、

順聖院様御在世中、既ニ可被下

勅詔之処、御逝去被為遊候ニ付、金剛定院様被為蒙

仰、直ニ御受被為在、御成就〔就カ〕ノ上野村助七宰領被

仰付、上京仕廿日余ヲ経候テ、大和介受領被 仰付候

為御体〔礼カ〕

主上へ一振献上、外ニ〔允条尚忠〕関白殿下並伝奏衆迄一腰宛都

合七本被差上候、左候テ御注文ノ 御剣折角御拵方仕

居候内、此節之御太刀為勝出来候段、近衛殿ヨリ被達

叡聞候処、

叡感不鮮別テ御待詫、度々

宸翰ヲ以、近衛殿迄御催促被為在候程之御事ニテ候

処、此節 金剛定院様御逝去ニ付、御剣献上之儀難相

成、且自 太守様御拵之上献上可相成筈候へ共、是以

難相成候ニ付、為受領ノ御礼献上可相成御刀迄モ都テ

致宰領、早々罷下候様豊後一名ノ問合相達、則御留守

居伊集院太郎右衛門ヨリ原田才輔〔保光〕へ引合候処、才輔モ

別テ致仰天、左様ノ御訊ニ候ハ、何レノ筋右ノ御問合

御預リ、近衛殿へ程能御都合不仕候テハ相濟間敷候

ニ付、御渡相成候様申出候処、御問合ノ儀ハ、豊後殿〔島津久直〕

ヨリ別段ノ訊ヲ以被仰遣候儀ニ候間、難相渡トノ事候

処、才輔ニモ不埒〔保光〕ニ存シ、是迄右様ノ御用向モ度々取

扱仕候処、何レケ様御大事ニ付テハ、時々御問合御渡

相成来候ヘトモ、難被相渡トノ事候ヘハ、此節ノ御取

次ハ、御断申上候外無之段申出候処、太郎右衛門モ差

当手段ニ迫リ、左様ノ訳ニ候ハ、御問合写文ノ処不

苦トノ事ニテ、前条為受領ノ御礼献上可相成刀迄モ致

才領、罷下候様ニトノ文面相除候テ相渡候ニ付、則

近衛殿老女花枝ト申方ヘ取次、右ノ趣及演説候処、花

枝儀モ別テ相疑、此一条ハ、以

勅詔被 仰出候御事候処、宰相殿御逝去被為成候由、

及御断候訳甚以難心得、奉対

至尊奏聞難被成、実以違

勅ノ罪ニ相当リ可申、併何分形行御披露可遂トノ事ニ

テ、其段 近衛殿へ申上候処、甚御立腹被為在、宰相

殿逝去ニ付、献上御断ト申訳無之、決テ子細可有之候

間、明白ニ可申上旨御達相成、才輔モ差当致当惑申上

候ハ、外ニ子細ハ有御座間敷、私愚察仕候処、当分ニ

之儀^{一筋ニテ、新機ノ時宜ニ相及候訳也}テモ可有之段御執成仕候ヘトモ、御納得無之、当座推

量ノ申分ニテハ御取揚難被遊、何分子細御聞届被為在

度トノ御事候由、併為受領之御礼献上相成候御剣ノ儀

ハ、既ニ御受取相成居、御拵懸ノ御剣ハ御預置、御都

合次第以 思召御献上可被成トノ御事ニテ御座候由、

右ニ付テハ、乍恐

順聖院様

朝廷御遵奉之 御趣意ハ勿論、 金剛定院様ニモ

勅意御奉戴深被為尽其心、於江戸表御拵用之地金等極

々最上ノ御品御撰、折角御都合可然様ニトノ

御趣意ニテ、野村へ幸領被 仰付、上京仕候訳ニ可有

御座、且亦

太守様ニモ

順聖院^(様脱力) 御深志被遊御継述、勤 王之御志趣御卓立、

既ニ難有以御書取奉謹承ノ御趣ニ有之、殊ニ右様御剣

打方被為蒙

勅詔候儀、御国家之名譽ニ被為在候処、一奸之所為ヲ以

前条御国辱相釀候儀、上下之名分ヲ乱リ、奉輕蔑

朝廷、加之

御代々様奉汚御積徳、千載ノ下御家ノ御瑕瑾無此上、

実以難尽言語重罪ニテ、被為対

近衛殿候テモ御不都合之御儀ニテ、何共恐入候御訳合

ニ御座候、尤花枝儀、全体

禁中へ相勤居、不一通才器器量之譽モ有之候女ニテ、

当分ハ、近衛殿老女相勸候へトモ、御機密之御用向御委任被仰付、兼テ

玉座近ク罷出候者ニ候由候へハ、前条ノ次第則奉達

天聽ハ按中ニ可有之、然ハ一奸之所爲ニハ御座候へト

モ、乍恐

太守様 思召ヨリ被 仰出候 御趣意ト相成、御違

勅ノ御汚名ヲモ被為蒙候御訳合ニテ、兎角被為對

朝廷夫形難被召置、且亦

太守様ニモ御伺ニモ不及執計候儀ニモ御座候ハ、全

奉欺 君上候儀ニ御座候へハ、吃度御糺明有之、正大明

白名分ノ上ノ御処置ヲ以、相当之御刑罰ニ被処、早々

朝廷へ御断被為在候様有御座度、余リ厳重苛酷ニ過候

様ニテハ、大身之者モ有之、彼是御斟酌之御訳ニモ可

被為在カト奉存候へトモ、賞罰ハ天下ノ公法、国君ノ

私シ賜フ訳ニ無之、況乎

太守様御趣意云々被 仰出候上ハ、被為對

朝廷候テハ勿論、御家之御為、重罪ノ者姑息之御仁愛

ヲ以被為捨置候テハ、以來如何様之御嚴令被為下候共

被相行候訳無之、尤人心一同乍恐難奉承服、彼力重罪之

所行ニ付テハ、一日片時モ不被忍黙視、是非相当之御取

扱有御座度伏テ奉願候、左候テ前条之通一日モ早ク

主上御安慮相成候様、御断不被 仰上候テハ、不相濟

御儀ニ御座候、故ニ嫌疑ヲ被為憚候御訳合無之候へト

モ、別段為御断重立候御方被差立候ニ付テハ、御差障

之御訳モ可有之候間、幸京都御留主居松元十兵衛へ來

春交代被 仰付置候へトモ、御免相成、右之代堪其任

候人柄御撰挙、早々出立被 仰付、篤ト

御趣意御内喻被為在、上京之上御拵掛リノ 御劍、再

度御拵方御願相成、御献上有御座度奉存候、且當時非

常之折柄、何レノ筋往々有志ノ者不被居置候テ、不相

叶御儀ト奉存候、前後無此上ノ機會御座候ニ付、弥

御趣意奉汲請、且名義ノ弁別有之候人物能々御吟味有

御座度奉万願候、兎角御手許ノ極罪人明白之御処置被

為在候テ、

朝廷御遵奉ノ 御趣意相貫、名実致一致、世人ノ耳目致

一新、天下万世ニ亘リ不可疑ノ御美事可有御座度奉存候、

右様御国家御機密相関候御処置之儀迄奉申上、僭偷之

罪幾重モ奉恐入候へトモ、此節ノ儀ニ付テハ不可已之

御大事ニテ、臣子ノ至情拱手誠黙難罷在、不奉恐万然

此段言上仕候、恐惶々々謹言、

(萬死カ)

申十一月十四日

右一同ヨリ申上候筋ニテ、谷村(託カ)へ詫候、其後豊賊御城代迄御差許相成候迄ニテ、別段ノ御処置無之候、

〔石室秘稿有馬新七建言(国立国会図書館所蔵)有馬新七先生伝記及遺稿にて補註〕

二五〇 江戸本丸落成式

十一月六日(久世周、老忠)大和守殿御渡、明七日触

大目付へ

来ル九日 御移徙ニ付、

御本丸へ出仕之面々、六半時登 城候様可被達候、

十一月

右之通従公儀被仰渡候条、御先規之通取調可被申出候、

留守居役
所日記

二五一 大艦ニ用ル国旗及ヒ帆布布令

十一月六日、大和守殿御渡、来ル九日触

大目付へ

大艦ニハ御国惣印日ノ丸幟相立、

公儀ニテハ中帆ノ柱へ白紺布吹貫引揚、帆ハ中黒相用

候積先年相達置候処、向後御国惣印ハ白地日ノ丸ノ幟

綱へ引揚、帆ハ白布相用ヒ、

公儀御軍艦ハ、中黒ノ細幟ヲ中帆柱へ引揚候間、諸家

ニ於テモ大艦出来次第、家々ノ船印

公儀御船印ニ不紛様取調、雖形ヲ以可被相伺候、

右之通去未年相触候処、向後帆ハ白布又ハ帆中へ其家

々之印、或ハ紋付候共不苦候、尤御国惣印白地日ノ丸

ノ旗綱へ引揚候儀、並家々船印等之儀ハ、先達テ相

触候通可被心得候、

右之通可被相触候、

十一月六日

右通従公儀被仰渡候条、御船奉行へ申渡、水軍方へモ

早々相達、諸所津口番所其外不洩様可被相達候、

申十二月

御家老座印

国旗旭章ヲ用ルノ原因ハ、安政元年六月斉彬公、閣老阿部正弘

ニ就テ、雖形ヲ以テ御建言ノ事実ハ、斉彬公史ニ記シタルカ如

シ、茲ニ略ス、

二五二 外国人途中行逢ノ令

十一月七日、(安藤信雄、老忠)對馬守殿御渡、九日触

大目付へ

外国人途中行逢候節、讓合相互ニ不作法無之様可致旨、去未年相触置候趣有之候処、諸藩ノ内ニハ兎角心得違之者モ有之哉ニ相聞、如何之事ニ候、向後右様ノ輩於有之ハ、糺之上急度可及沙汰候間、以後心得違之者無之様、能々主人々ヨリ可被申付置候、

右之通可被相触候、

十一月七日

右通從公儀被仰渡候条、不洩様向々へ可被相触候、

十二月

御家老座印

別紙之通從公儀被仰渡候ニ付テハ、御屋敷内上下共ニ、外方ニ於テ外国人へ途中行逢候節ハ、成丈ケ道ヲ譲リ、不作法之儀共屹度無之様可相心得候、万一此内ノ如キ(在勤廳方ノ小吏中村彦太郎、品川ニ於テ外国人ノ飼狗ヲ殺シタル始末前卷ニ記ス)途中爭論ケ間敷儀共、重テ到来候テハ御難題相成事条、其旨厚ク相心得候様向々へ不洩様可被相達候、

申十二月

攝津喜入久高

二五三 鉄錢鑄製及価格布令

十二月十四日大和守殿御渡、来ル十六日触

大目付へ

世上通用之為於銀座精鉄錢吹方被

仰付候付、右精鉄一文ニテ並錢四文ノ代リ相用ヒ、来ル十七日ヨリ在来ノ真鍮錢取交通用可致、兩替等百文錢・真鍮錢・一文錢同様相心得可申候、

右之通相心得、国々ニ至ルマテ無差支様可令通用モノ也、

右之通御料・私領・寺社領共、不洩様可被相触候、

十二月

右之通可被相触候、

別紙之通從公儀被仰渡候条、諸郷・私領へモ申渡、向々へ不洩様可被申渡者也、

申十二月

御家老座印

二五四 藤堂高猷其他推任叙

二五四ノ一
十二月十六日

出格之

思召ヲ以

中将

高猷攝津藩主
藤堂和泉守

其方儀、此上昇進之難被及御沙汰筋ニ候得共、家督
以来多年精勤国政向行届、廉立候御用度々被相勤、
其上伊勢

神宮御警衛、京都表援兵之儀、彼是心配御奉公筋之
儀、厚心ヲ被用候ニ付、出格之

思召ヲ以、今般中将被

仰付候条、以後之家格ニ不相成ハ勿論ノ事ニ候、

右於御白書院縁頼老中列座、大和守申渡書付相渡之、

別紙之通、御吹聴相成候間、先規取調御祝詞又ハ被進

品無手拔取計可有之候、此旨申達候事、

申十二月十七日

攝津 全上

二五四ノ一
保科家推任叙

十二月十六日

別段之

思召ヲ以

中将

(全書書志)
松平肥後守容保

其方儀、末年若之儀ニ付、昇進之難被及御沙汰候得
共、常々心掛宜家風嚴重相守、家政向諸事行届、其
上祖父以来引統御警衛御用相勤候ニ付、別段之

思召ヲ以、今度中将被

仰付候条、出格之儀ト被相心得、此上弥相励候様可
被致候、

右於御白書院縁頼老中列座、大和守申渡書付相渡之、
前書同文略ス、

二五四ノ三
山内家昇進

十二月十六日

別段之

思召ヲ以

侍從

(山内書範、土佐藩志)
松平土佐守全上

其方儀、年若之儀ニモ有之、昇進之御沙汰ニ難被及
候得共、大坂表御警衛被

仰付置候儀ニ付、別段之

思召ヲ以、今度侍從被

仰付候儀ト相心得、御警衛向弥々入情相励候様可被

致候、

右於御白書院縁頼老中列座、大和守申渡書付相渡之、
前書同文御間柄之御事故、御先規ヲ以テ取計候ハ勿論、
御家老御使者ヲ以テ御喜ヒ、又ハ御直御參邸等モ自然

被為在候御事候ニ付、万端無手拔様取調可被申出候、

申十二月十七日

攝津 全上

者勤之格合早々取調可被申出候、

申十二月十七日

攝津 全上

二五四ノ四

五島家叙爵

十二月十六日

五島兵部

〔備カ〕
讃岐守ト同

其方儀、容易ニ叙爵難被

仰付筋ニ候ヘトモ、二百年來唐船方御無滞相動、且

居所富江之儀ハ、長崎表之海口要害之場所ニ付、心

力ヲ尽シ守衛向厚ク世話致候趣心掛格別宜、殊ニ近

來外国船屢渡來致候ニ付テハ、領分離島之儀、

御国威ニモ拘リ候ニ付、出格之

思召ヲ以、諸大夫被

仰付候事ニ候条、可被存其趣候、

右於御白書院縁頼老中列座、大和守申渡書付相渡之、

別紙之通被仰付候ニ付テハ、兼テ御出入ハ勿論、御先

代様ヨリ御由緒モ有之、殊ニ当時海防向又ハ長崎御警

衛等之儀ニ付、別段御依頼之訳モ有之候事故、先規ト

テモ有之間敷候ニ付、此節柄ニ準シ被進品、又ハ御使

二五五 参考 川崎道民外国事情報告

萬延元庚申正月、外国奉行為応接亜米利加

國工被差遣候役人ノ内ヨリ江戸表へ來状写

以幸便致啓上候、皆々御壯健珍重存候、然ハ正月廿三
日神奈川出帆、伊豆海ノ崎ヲ過候ヘハ、海面内海トハ

事替リ波浪荒ク、長サ四拾間余有之乗組大艦昼夜揺動

強ク、蝦夷辺ヲ過候節ハ、波ニ船ノ動キ候事東西ヘ五

六尺宛傾候程ニ存、船ノ頭ヨリ先へ揺動イタシ、膳ニ

向ヒ喰事ハ迎モ出來不申、打臥候俣ニテ粥ヲ喰シ居ヨ

リ、剛藏・本藏大ニ弱リ、一句モ出來不申、安郎右衛

門同様ニ有之、這廻リナカラモ鑑吉一人ノ事モ度々有

之、手元箆筒杯細引ニテク、リ付ケ置、夫ニテモ引出

シ飛出シ、乾物杯モ有之候ヘトモ、取出事不相成、漸

々二千里外太平洋海へ乗出シ候處、水ハ黒綠色、目ニ遮

リ候モノハ海辺一種飛上リ候モノ而已是ハ万次郎漂流記ニ、
所謂七郎ト申鳥獸

此所波ノ高低有之、高キ所ハ五六丈、低キ所ハ老丈余

リ有之、然ル處正月廿七日大惡風留マ、ニテ、船ノ揺動甚シ

ク、潮多クホウハタン(Constance 暹米使節の米国船艦)ヲ打越候次第、船ハ丈夫ニ付ケ置候空船一艘流失致候程ノ儀、乍然船中異人必死ノ働キニテ、無難ニ有之、尤ホウハタン覆没儀ハ決テ無之由、異人申聞候間、此上右様ノ儀有之共、必定無難ノ事ト被存候、日々雞肉・豚肉等ニテ馳走、至極親切ニ世話致呉候義、逸々断モ相成兼是ニハ当惑致候、只飲水一人ニ升ヲ限り、右ニテ何モカモ用弁候事故、ウガヒノ水ヲトリオキ、雪隠ニ相用ヒ、水ハ追々鉄氣有之色赤ク、粥ハ茶粥全様ノ色ニ相成、(奥力)氣有之候テ違却ノ事ニ御座候、乍然是マテ薬一貼モ不相用、難渋中モ実録ニ一日ニ詩作一首ツ、愚案仕候、二月七日船中石炭・薪水差支、サフラン迄ハ迎モ参リ兼候ヨシニ付、江戸ヨリ三千里余船路ニテ、二月十四日サントウイス(ホノルルカ)ホノヲル港へ入津致候処、見物人如山、男ハ色黒ク赤髪ニテ巨腹ニ候、女ハ跣足ニテ、江戸ニテ申サハ、色氣違ノ如ク、乞喰ノ女頭ニハ美毛ヲ重ネ、鉢巻イタシ居、言語更ニ不相分、尤亜・英・佛三ヶ国支那工向商賈居住致シ候ユへ、奇麗ナル家作モ有之様子、拙者並御目付・外国奉行ヲ四人宛車ニ乗セ、二疋ノ馬ニテ走ラセ、馬ノ行義ヨク駈出シ候ニハ面白覺申候、旅宿大

キナル家ニテ、何レモ堂官ノ如ク、百人マテハ人数一旅宿ニテ相濟、二階並外ノ方間配リ罷在候、園中ニハ珍シキ事ハ朝顔・菊・鳳仙花咲ミタレ、人參・大根・隠元・薩摩芋沢山産出、西瓜・真桑瓜ナトハ江戸ニテ調タルコトク品有之、且凝水モ有之、四季混同給ニテ暑ヲ覺へ候程ノコトニテ、物ノ高直ナルコト炭一俵(江戸松炭俵)半ドル(日本)、隠元二三把半ドル一枚、ぼら一尾(一俵二俵)、宿代一人トル一枚ト申コト、尤日本人ヲ目サシ高直ト申訊ニハ無之、洋海ノ孤島便利ノ地故ト被存候、夜分ハビイトル障子樓ニテ故弓ナドナラシ、相案居候モノモ有之、目ニ遮リ候モノ珍ラシキコト多ク候ヘトモ、時候不宜、猶乗船サンフランシスコへ旅行ノ積、夫ヨリカリホルニヤ掛、華盛頓へ出向候間、多クハ閏月末ニテ条約取替モ濟可申見込ニ有之候、幸便次第又々可申入候、帰府ハ如何トモ差急キ候積ニ候ヘトモ、凡七八月頃ニモ可相成候、此程ハ家来一同病氣モ宜シク、至極元氣ニ相成候、安心可被下候、右申述度如此御座候、親類其外エモ書状差出度候ヘトモ島程不能其儀、今日此書状野川・川上・星野・太田ナトへ為見可申、猶跡後便へ昨日入港、差テ認兼候間御判断可被成

候、以上、

二月十五日

二五六 前全父へ送レル書簡

一 筆啓上仕候、暖和ノ砌ニ御座候処、皆々様益御機嫌克被遊御座恐悦奉存候、小子ニモ無事罷在候間、乍憚御休意思召可被下候、

一 廿二日横濱出帆後先々無事、然シ廿四日五日船中一同絶食ニ御座候処、廿七日稀成烈風ニテ、余程難渋仕候ヘトモ先々無事、翌朝ハ穩ニ相成候ニ付、皆々大悦ニ御座候、其後二月朔日又々烈風ニテ、是又大ニ驚候ヘトモ、二日ニハ平ニテ一同安心仕候、然シ船中一同病人モ無御座候、

一出帆後最初サンフランシスコエ当参リ候処、前又両日大風ニテ、石炭不足ニ相成候ヘハ、サントイスエ当船路ヲマケ、二月十四日彼島エ着船仕候、尤寒暖計七十二度ノ暑ニ御座候ヘトモ、日々雨天ニテ小袖羽織位ニテ宜シク候、即上陸イタシ旅館エ参リ、見聞イタシ候処一々奇々、乍去周匝百五十里ノ小島ニテ、人家モ多分ニハ無之候、野菜物ハ

チサ・西瓜・キク・唐モロコシ

右ノ品々マテ、小兒ノ啼声ハ少シモ変リ不申候、見物ハ山ノ如ク、都下老若男女群集イタシ出申候、尤モ此地ニ七日逗留仕候テ、サンフランシスコエ出帆致候等ニ御座候、

一 御屋敷ノ人々ハ皆々御壯健御座候間、右ノ趣宜御伝声可被下候、右ノ外イマダ申上度儀御座候ヘトモ、急々廣東エ出帆有之候ニ付、先為御安心荒増申立候、何レ目出度帰朝ノ上、万々可申上候、恐々謹言、

二月十五日咲

川崎道民^{（勤佐賀藩医）}

御尊父様

尚々七月前後ニハ多分帰国ニ可相成ト奉存候、左様御承知可被下候、

二五七 当時外国人ニ対スル巷説

萬延元年庚申七月廿四日、関東表大風、江戸大名邸諸所破損、亜人並唐人共富士山ニ登リ、或ハ大山ヨリモ富士ニ登リ候処、唐人ハ大山限リニテ、精宗折節富士ニ登ル事不能、亜人ハ是非富士ニ登ラントテ半腹迄差越候処、俄ニ暴風吹来段々怪我人等モ有之、漸ク下山

イタシ、皆肝ヲ潰シ候由、

異人富士山登リハ廿四日前ニテ、江戸ヨリ三人、下田ヨリ六人、都合九人ニテ相願、廿五日出立シ、祈禱ヲイタシ登山イタシ、誠ニ日本ノ名山ニ登リ嬉シキトテ終夜十二発ノ鉄砲ヲ打候ヨシ、星山良兵衛江戸出立前、彼方ヨリ飛脚着ニテ弥登山イタシ候トノ嘶ナリ、
(道島正亮日記)

二五八 小野友五郎米国ヨリ通信

萬延元年四月十六日、左之書翰到来

アメリカ国カリホルニヤ、サンフランシスコヨリ

(広屏、軍艦操練所教授方)
小野友五郎

正月十二日品川ニ於テ咸臨丸御船ニ乗込、同十三日加奈川ニ罷越、巫人乗組相成、十六日相州浦賀へ罷越、水其外積込、同十九日昼後同所出帆、夫ヨリ大島沖ヨリ太平洋ニ出、二日半ニテ蒸氣相止メ、帆計ニテ航海仕、北緯四十三度迄登リ、洋中風ハ南西ノ方多ク、風キ候事ハ少ク、平均一日六十里位ニ候、二月廿五日夕ヨリ蒸氣仕掛、翌早朝山ヲ見候処、巫国カリホルニヤ、サンフランシスコノ出鼻ヨリ続キ候山ニテ、同日昼

過サンフランシスコ湊へ着岸仕候、船中無滞、私儀

不快等モ無御座、無異儀罷在候間、乍憚御安意思召可被下候、且出立之節ハ上ヨリ拜領物仕、難有仕合奉存候、御序モ御座候ハ、御噂被成下候ハ、難有奉存候、

一 日本地方千里程出候処ニテ、巫国之商船へ出会、船ハ

至テ早ク歩行候様子ニ付、日本国咸臨丸サンフランシスコへ罷越候間、同所奉行へ伝言相頼候処、此船ヨリモ早く着相成、ホーハタント申外國奉行乗組ノ船ハ、
(Cowland)

正月廿二日出帆之処、途中ニテ石炭少ク相成、サント

イスト云フ島ニ立寄候由ニテ、今日着岸相成、日本人

二面会仕、咸臨丸至テ評判宜敷御座候、日本人両船共皆

無事、今頃ハ病人モ無御座候、若御懇意之仁モ可有之

候哉ト申上候、帰国之程ハ日数未タ相分リ兼候ヘトモ、

見込ヨリ早ク相成可申奉存候、諸色高直、日本品格外

安ク困リ入候次第ニ御座候、

右之段申上度如此御座候、恐惶謹言、

三月九日

二五九 無名落シ文

奉申上候、私祖父儀ハ生国越前ノ者ニテ、江戸表へ罷

出居候内、裏店住居ニテ渡世仕居候処、親共代ヨリ相
応ニ取続、江戸市中表店住居仕、其後私ニ至リ相続仕
来、御当地繁昌仕候ニ付テハ、御蔭ヲ以テ身分相應ニ
売買仕罷在候処、今般神奈川横濱ニヨイテ、外国人交
易御差許相成、就テハ私儀、同所ニ引移渡世仕候程余
力モ無御座候ヘトモ、渡世品持参仕候テ横濱表へ罷越、
相應ニ利潤モ御座候テ、毎度往来仕候内、次第ニ外国
人共へ懇意出来、弥以渡世品売捌都合ニ相成大慶仕候
処、夷人ニ懇意深く相成候ニ付、格別ニ利潤ヲ得サセ
呉候テ、別テ難有事ニ思ヒ、夷人共ノ意ニ随ヒ、ハカ
ラスモ彼宗旨等ノ咄承候処、難有宗旨ニテ風ト存込、
弥以異国随仕ニ候、然ルニ私同様ノ向モ凡ソ二十四五
人ハ御座候ヘトモ、ソノ者名前住所モ不承候ヘトモ、
江戸表住居之者モ両三人ハ御座候様子ニ御座候、其余
ハ近郷ノ者ト奉存候、然処今度江戸
御城御焼失ニ付、心付候ハ、是迄日本御国之
御高恩ヲ受乍罷在夷ニ随候ハ、恐入候次第ト改心仕、
是迄彼国ノ内存承リ候テハ、身ノモ余立勿体ナク、
私身ノ科御免被成下候様
神々様へ御託申上候ニ付、夷国存込ノ処承知仕候文申

上候、

一 夷国役人存込ハ、イギリス国ノ女王杯ノ存念ヲ継候由
ニテ、夷人ハ初發アメリカ国ノ役人ヲ日本国へ渡シ候
テ、日本国強弱相試候処、兼々承候ト違ヒ、思ヒノ外
弱キ国ニテ候由、

一 兼々承知之通、日本国ノ金銀大方掘尽シ、当時ハ国々
払底ニ相成、其上日本奢侈増長致シ、政府・大名トモ
困究ニ及ヒ候間、此時日本ハ奪ヒ候機会ト存込、種々
謀ヲ以七八分ハ仕寄せ候由、

一 日本役人ハ大方力ノ程モ相分、政府ノ内証モ差積、金
銀ハ政府・大名ヨリ町人ノ手ニ渡リ居候間、此時政
府・大名ノ金銀取出シ、此上政府・大名疲弊ニ為致候
積之由、

一 町人ハ沢山ニ金銀ヲ所持之者有之候ヘハ、欲深キ町人
共故夷国ヨリ利潤ヲ得サセ候ヘハ、手ニ付候事ハイト
安ク候、其上ニテ日本ノ金銀外国へ不殘奪取候ヘハ、
日本ハ骨ト皮計リニ可致由、

一 五七年ノ内ニハ日本十分オトロへ候所ニテ、難題申立
候ヘハ、大方ハ夷国ノ申候ニ可相成候、夫モ不承知申
候ヘハ、軍艦ヲ以日本中海岸エ差向、戦争ニ及候ハ、

- 三四年ニハ日本國中飢渴ニ及候間、弥以軍艦數百隻差向候へハ、日本ハミジント相成、政府ハ元ヨリ京都迄皆押潰シ、夷国ヨリ政府ヲ立、我分国ニ可致ト存込候由、
- 一私共同シ存込ニテ、外国宗旨難有存居候者有之故、此度御本丸御焼失モ、右ノ余類仕業ニモ可有御座被存候、夷人存寄モ 御城焼払ヒ、次第々々ニ大名方ヲモ焼払候へハ、万端入用金銀政府・大名ヨリ出、其金銀大方ハ町人ノ手ニ渡リ候間、町人サヘ手ニ付候へハ、日本ノ金銀ハ皆外国ノ者ト存居候由、
- 一日本ノ品々夷人ノ用品ハ、金銀・五穀・金物類迄ニテ、其外ノ品々ハ、外国ニテ又々外々へ遣シ候計ノ入用ニテ、今ノ所ニテハ何品ヲモ交易イタシ、日本ノ品払底ニ為致、諸国ノ金銀町人ノ手ニ渡サセル積ノ由、
- 一未タ日本半分ハ存込ノ通ニ從ヒ不申、今戰爭ニ及候テハ、外国丸勝ト申訳ニハ不參、乍去今ニモ日本ヨリ戰爭ニ致シ候へハ、其内ニハ日本疲弊ニ及ハセ、末ハ我國ノ物ニ可致候へハ、戰爭ニ及ヒ、其上日本ヲ奪候へハ、夷国ニテモ雜費夥敷故、次第ニ謀ヲモ押付候様ノ手段ニ候由、
- 一日本ハ欲深キ国故致易ク、支那ハ日本程欲深キハ無之候へ共、夫サヘ廿年程ニテ大方手ニ付候間、夫トハ日本謀易ク有之由、
- 一日本ハ神国・武国、官トイヘドモ、當時ハ上下奢侈ニ及ヒ、武ハ薄ク、戰爭ハ殊外嫌居候間、尚以謀安ク、其上火術之業未熟故弱国ノ由、
- 一日本ハ四方海ニテ候へハ、我同盟ノ国々ヨリ四方海面へ軍艦ヲ居置候へハ、日本ニ軍艦無之故、海面通路ヲ不為致、諸方ノ運送陸路計ニ有之候間、人力次第々々ニ疲レ申候間、戰爭ニ及候へハ、猶以テ早く奪ヒ候事致易ク有之由、
- 一第一日本人ヲ追込候様子ハ、神国ト雖モイカ程神様ヲ祈候テモ、金錢ノ出来ルト申事ハ無之、外国ノ宗旨ハ神様ヨリ尊ク、金銀ハ居ナカラ自由ニ手ニ入、思フ事不叶ト云事ナシ、是夷国ノ宗旨ノ尊キ所、夫ヲ日本人ハ役ニモ立ヌモノヲ神様々々ト難有狩、智恵ノナキ日本人ナリト申居、次第ニ日本人民夷宗ニ引込可申候、
- 一右之通申聞セ、此外様々ノ事申聞セ候へトモ、何分聞取難ク、右ノ次第ハ漸ク聞取、又ハ手マネニテ致シ見セ候間、聞取申候、其余ハ手真似ニテモ聞取兼候事多ク御座候へトモ、右之条々篤ト相考候へハ、誠ニ恐シ

苦心底、右ニ随ヒ候ハ

御国恩ヲ忘却仕候儀、勿体ナク存付、改心仕心底有之、
偏ニ申上候間、私罪科御免被成下候様奉願候、

十二月

二六〇 佐久間修理作

永思賦

稟二氣之靈秀兮、生神州之衍沃、際昌運之嘉会兮、浴
皇化之優渥、雖寒微而在遠兮、敢忽拜忘恤、愾犬羊之
闕我兮、慨弥縫之未密、窮人理之終始兮、究物情之源
流、省反否於泰繫兮、倣覆遜於臨繇、借浮雲而上征兮、
睨山海之疆理、指伝溢之險夷兮、數出沒之島嶼、忽翺
翔而逾遠兮、託迅編而周流、歷五州之離合兮、知坤輿
之若繆、乃至赤泉之野兮、憑高丘以四望、氣霧決其蔽
海兮、日月黜其罔光、自英戎之構乱兮、歲四周而未靖、
壯者糜爛而膏土兮、老弱哀号而悲哽、何周孔之土疆兮、
罹醜虜之蹂躪、事必有所其繇兮、宜訊審而思慎、彼伯
昉之傑起兮、于窮髮之荒穢、運宏規於邃測兮、收低邦
之精芸、造巨艦与皇殿兮、嚴守禦之戎衛、竟警内而威
外兮、垂偉績於百代、惟神州之遠躒兮、位万邦之元首、

雖疆宇不甚郭兮、極民物之富有、沉君臣之凶治兮、夕

惕厲而如慄、舍己私以從人兮、仰神聖之前烈、宜鑒

西清之致嶼兮、思夷主之樹基、起城趾之岌嶷兮、範神

器而成堤、抗靈威於異域兮、流美利於海涯、夫重明之

燭幽兮、周姦惡之靡容、苟謀猷之云滅兮、何神人之不

從、嗟吾生之側微兮、抱此懷而君、漠絕声而竄端兮、

傷初志之靡蕪、欲進取以敵詞兮、孰能聽而為媒、慨歎

唱而撫劍兮、心惴惴而永思、斟酒醴以澆情兮、審鬱々

而弗舒、

信州真田侯産 佐久間修理

〔增訂象山全集・象山淨稿(京都大学所蔵)にて補註〕

二六一 災孽掃除ヲ伊勢大廟ニ祈ラセ玉フ

方今蛮夷ノ事情人心不和ノ時節、去月已来彗星出現、
加之異病流行、旁深被惱

宸襟、依神明冥助早攘災孽、於万里底静謐四海弥天下
泰平、

宝祚延長武運長久万民娛樂ノ御祈、一七ヶ日ノ間一社
一同可抽丹誠事、

二六二 攘夷論者熾ニシテ洋風忌避ヲ知ルノ一端

建言五通

二六二ノ一

口上覚

(分べル銃ノ通唱)

(洋式ノ砲師)

此節劍銃御切縮ノ由ニ付、成田正右衛門ヨリ承及候趣

御座候、就テハ劍銃ノ儀ハ、西洋ニテハ數百年ノ間実

用ニ相用ヒ候テ、不便ノ廉御座候ヘハ、早速改革仕、

火繩筒并礎石筒等ニ發明仕候ヘトモ、未十分無御座候

ニ付、當時ノ雷帽銃ニ發明仕、専ラ實用ニ相用候由、然

処此方ニテモ、此以前ヨリ吉野原其外諸郷方々廻動調

(鹿兒島市)

練被仰付、自身ニ負ヒ越シ、山野峻難ノ場所ハ勿論、

甲冑モ着用調練、又ハ船并夜調練ヲモ被仰付、実場同

様ノ經驗仕候得共、長短輕重ニ付テハ、更ニ不便ノ廉

無御座、便不便ニ付テハ修行ノ精粗ニ御座候半、將又

短筒ニテハ二列ノ兵隊ヲ配布仕候得ハ、前列ノ害不少、

夫ノミナラス玉利キモ不宜儀ニ御座候、乍併新舶来ノ

短狙筒ハ、製式別段ノモノニ御座候、殊ニ劍筒製式ノ

儀ハ、去ル辰年

(統脱九)

順聖様舶来雷帽銃見本トシテ、態々御差下シニ相成、

以來右通リニ製作相成候様、

御沙汰ノ趣モ被仰渡置候ニ付テハ、前件申上候通、実

場同様ノ經驗ニモ相用ヒ、且ハ御手本筒マテモ被相下

(名御持)

置候儀ニモ御座候間、相成ル儀ニ御座候ハ、当分通被

(統脱九)

召置候様御座候者、一同難有奉存候、此段乍恐奉申上

候、以上、

申二月(十一九)

礮 永 孫四郎

沖 直次郎

稻留 源左衛門

愛甲 新 助

本田 彦次郎

市來 宗 七

兒玉 雄之助

二六二ノ二

劍銃製造方之儀ハ、先年来分テ御手ヲ被為付、殊ニ去

(安政三丙辰)

辰年、從御手許御見本トシテ、雷帽銃被相下、右ニ

(名銃ト統)

基キ製造可致旨被仰渡置候、然処今般切り縮メ方被仰

付候テハ、別段厚キ御吟味之訳被為在候上之御事トハ

奉察候ヘトモ、御先代様右通被仰出置候趣モ有之候ニ

(倉形)

付、銃ノ長短ニ就テ利不利之訳共、其主任ナル砲術館

ヘモ篤ト評議被仰付候上、御達之訳モ無之、左様之御

沙汰振モ全ク無之候ニ付テハ、職掌ニヨイテ黙止難罷

在候ニ付、館中之人数厚ク及議談候処、是迄製造ノモノハ全ク西洋製ニ則リ候ニ付、其量目等銃身ノ重量随分重目ニ有之、夫ヲ御達通りノ尺度ニ切り縮メ候ヘハ、少シハ輕目ニモ可相成候ヘトモ、僅ニ毫挺ノ分量二三百目程ノ減量ニテ、取扱方ノ便不便ニ格別相拘程ノ事ニモ無之、尤長短ニ依リテハ、玉利キノ遲速・遠近、射擲ノ優劣ハ大ニ差違有之、俗人・素人ニモ長短ニ依リ玉利キノ違ヒ有ルハ、能ク相弁ヘ居候事ニテ、別ニ委敷申上ルニモ不及、殊ニ此度成田正右衛門ヨリ、積年試験実測之次第ハ、申出通之儀ニ御座候、申上ニモ不及事候ヘトモ、銃ノ製作ハ玉目ノ大小ニ依リテ、厚薄・輕重・長短ノ作法、至テ綿密ニ試験之法度有之モノニ候、夫ヲ無暗ニ切り縮メ候テハ不釣合ヲ起シ、命中又ハ玉利キノ良否ニモ第一相拘リ候、夫ノミナラス、装薬等ノ手續中不都合ニ相成リ、旁实用ニ適ヒ申マシク、西洋ニ於テ数年実戦ニ試験イタシ製造致候モノニテ、此方座上ノ論ヲ以テ定メタルトハ、同日ニ論スベカラサルハ無論ニ御座候、若又長銃ニテハ不得手ノ人モ御座候ハ、其輩等ハ長短共ニ打試、数百回被仰付候ハ、練熟ノ上ハ必定、当今之俥ニ被召置度ト申出ルニ相違無御座ト奉

存候、其上御先代様分テ被仰渡置、見本銃マデモ被相渡置候儀ニ御座候間、願クハ此涯切り縮メ方御猶予相成リ、試験実測方ニ御手ヲ被為付度奉存、此段言上仕候、以上、

集成館並砲術館掛御徒目附勤

萬延元年申十一月

市來正右衛門旧名

二十六ノ三
此節銃御切縮並胴乱御拵替之儀、被仰渡趣承知仕候ニ付、早速切縮方不仕候テ不叶儀ニ御座候ヘトモ、右製式ニ付テハ、去ル辰七月上順聖院様舶來雷帽劍銃江戸ヨリ御差下シ、以來右通製作相成候様分テ御沙汰之趣、当館へ被仰渡置候、然ハ切縮方ニ付テモ、全体之割合旁別テ綿密之法則有之候ニ付、成田正右衛門並砲術館へ猶又吟味仕候処、第一筒之重真長短輕重等之作法有之、尤兵隊編制之訳合モ有之事候ニ付、輕便ノミノ事ニテ御切捨相成候テハ、重目等少々手輕之方ニハ可罷成候ヘトモ、聊ノ減量ニテ二列三列取扱ニテハ、纒ノ長短ニテ利用ノ優劣ハ、格別ニ有之マシク、就テハ短筒ハ一己ノ体打込モ玉利不宜、殊ニ隊中誤発ノ懸念モ有之事ニ御座候、右等ノ儀ハ成田正右衛門ヨリ委

細申上候通ニ御座候、左候テ切縮ノ儀モ、同人ヨリ奉
伺置候段承及候、右ニ付テハ前件申上候通、御先代
様御手元筒マテモ被相下置、右ヲ見本ニイタシ、追々御
出来相成候処、不容易御訳合トハ深ク奉汲受候ヘトモ、
前文ノ次第御座候ヘハ、直様夫形切縮ヲモ難致奉存候
間、今一往奉伺候、何分之御沙汰承知之上切縮ニモ取
掛申度奉存、此段私共吟味之成行不顧恐奉申上候、以
上、

申十一月 大砲鑄製方掛 御役々

二六ノ四

此節劍銃切縮方被仰渡之段承及、乍恐愚昧之私、是
迄見聞仕候趣、且ツハ取扱之利害得失之形行、左ニ

申上候、

劍銃ハ皇朝廷元三年、西蕃^{フロシエ}李漏生^{リロウセイ}国創製之器械ニテ、

諸邦へ流布仕、文明十三年ニ至リ、木架ヲ製シ火索機

ヲ施シ、文祿頃迄相用來候処、点火之誤、風雨之憂屢

有之不穩候間、砲機ヲ發明仕、將亦寛文十一年、銃頭

ニ劍ヲ装シ騎兵之捍禦ニ相備へ、刀槍之而用ヲ相兼、

軍器之最ニ用來候ヘトモ、未タ十分ノ全備ト申訳ニ

無御座候間、頃歳ニ至リ雷發機ヲ發明仕候処、風雨之

憂全無御座、且狙射の密ニテ、殊ニ些少ノ装薬ヲ以、
遠距ニ彈達仕、旁簡易冗費不大形御座候付、西洋一般
ニ右之製式ニ改革仕候テ、専ラ軍用ニ供シ申候、尤銃
架ノ長短ハ、往古ヨリ至当今數百年実戦ニ相用、不便
ノ廉御座候ヘハ、早速便利ノ製式ニ改革仕候儀、銃式
ト同様御座候由承及申候、既ニ御国へ御買入相成候劍
銃モ、僅ノ年間ニ、種々ノ製式相變シ候品參リ候、是
ニテ其形状被相察申候、乍然當時和蘭陀ニテハ、一般
ニ製式相定リ居候由、勿論各国ニテ兵制之差異有之事
御座候間、自ラ劍銃製式モ小異ハ有之儀ニ候ヘトモ、
和蘭陀翻譯書ニ書載候各国手銃部隊用ノ製式ハ、大率
三尺三寸ヨリ短筒無御座、且彈量迄モ大同小異ニ御座
候、尤装薬之激力ト銃之重量、彈丸量並銃之長短ハ適
度有之、其適度ヲ失候ヘハ、却テ彈丸遠達不仕、余リ

長筒ハ騎隊^{騎隊}ヲ捍禦仕候ニハ宜敷、且的実ハ密ニ御座候

ヘトモ、軀幹^{軀幹}矮弱之者ハ操用ニ勞苦仕、其上照準托臂之

時、銃之中重点前身ニ有之、依テの密ナラサルモ御座

候、夫ト申候テ短筒ヲ以テ狙射仕候ニ、仮令多量ノ装

薬ニテ放發仕候共、却テ近距ニ彈着仕、殊ニ二列之兵

隊ヲ配布仕候ニ、前列ノ者ハ後列砲火之為ニ災害セラ

レ候憂有之、且敵砲ニ先ヲ挫カレ候儀疑無御座候、現在長筒ノ彈利キ宜敷事ハ、人々承知ノ前ニ御座候、尤彈利ニ付テハ新古之差別有之杯ト申事ニハ御座候ヘトモ、強テ其通ニモ不參候哉、和蘭陀ニテハ、壹万放之後火門ヲ改メ、式万四五千放ノ後ハ、其銃ヲ廢シ用ヒ不申候由、且三十年ヲ經候ヘハ供用不仕、佛朗西ニテハ五十年、英吉利ニテハ十二年ヲ經候ヘハ、是亦廢シテ軍用ニ供シ不申候由御座候ヘハ、頗ル新古之差別ニテ、彈利キノ良否ハ可有御座共難被申御座候、斯申候ヘハ、西洋ニ相泥ミ申様御座候ヘトモ、曾テ左様ニテハ無御座、彼邦數百年実地ニ携用仕候テ、損益ハ現在目撃仕、夫故匠工モ精神ヲ凝シ、兵卒ハ猶更夫々之上官ニ至ル迄、自己之身命ニ係リ候事故、精微ニ吟味ヲ經候テ製造仕候利器ヲ以我ノ軍器ニ用候事、此方ニテ艱苦発明候ヨリ余程ノ捷徑ニ御座候半、彼ノ長ヲ採リテ我ノ短ヲ補ヒ、彼ノ制ヲ以テ彼ヲ制候ハ、誠ニ蓋世之愉快ナル事ニ御座候、尤兵器之便不便ニ依テ、上ハ國家ノ興廢ニ関リ、下ハ万民非命之死ニ臨候儀ニテ、誠以不輕事御座候、將又於御国モ、此已前ヨリ吉野原數度之訓練、其外諸郷方々廻勤被仰付候テ、(城北三里大瀧園)白金坂・内

重富ニ越ル峻嶮ノ地 (大隅国并付郡ノ地名) 之浦峠其外紫尾・高鼻等之峻難之地ヲ自身負越シ、又ハ甲冑着用ニテノ訓練、並船打夜訓練モ被仰付、実場同様之試験モ度々仕候ヘトモ、長短輕重ニ付テ更ニ不便之廉無御座候、乍併 皇國之人体ニ不応トノ御事ニテ、惟便捷而已ヲ宗ト被成候儀御座候ハ、此涯屹ト訓練方実意ニ稽古被仰付度、左候ヘハ自然ト便捷可成儀ニ御座候、先年来船ノ銃ハ當時ノ銃ヨリ余程寸延ニテ御座候ヘトモ、真実稽古仕候ヘハ八年若矮軀之者迄モ便捷容易ニ取扱出来候テ、却テ短銃ハ手続之工合惡敷罷成場合御座候、僅ニ四五寸短縮相成候テモ、不練之者便捷ニ取扱出来候トハ難被申奉存候、便不便ハ練磨之功拙ニ有之、銃ノ長短ニハ有御座間敷、夫故 (鳥居清 定院様 宗形) 順聖院様深 御配慮ヲ被為盡、訓練方盛ニ被仰付候儀ニ可有御座ト、乍恐奉存候、方今彼此ノ形状ヲ熟察仕候ニ、誠ニ不等閑時節ニ御座候間、第一ニ訓練方出精仕候様、御指揮被為成候方、万全之御処置ト奉存候、訓練ハ武備ノ最要ニテ、不練ノ兵ハ陣列不整ニシテ敗レ易ク、攻候テモ取ル事ナラス、守リ候テモ堅固ナル事ヲ得ス候ヘハ、是則以不教民戰、是謂棄者ニ御座候、如何成長將ニテモ、勝ヲ取候事不成ハ勿論ニ

御座候、夫故往古ヨリ武備ヲ唱候者、調練ヲ最要ト仕候儀ニテ、調練成候ヘハ、万人モ一人ヲ指揮仕候ト同様ニ御座候半、調練不相整候テハ、是迄積年之御威徳ヲ相失ヒ、且ハ過大之失費被為及候詮モ不相立、誠ニ千載之遺憾御座候、所謂千百人列陣ニ勇者不得進、怯者不得後、只是一斉揺進、一人回首大衆同疑焉トイヘル程調練成候テ、適宜之兵器ヲ携候ハ、天下ニ独立可仕儀無疑御座候、誠以当節柄不容易儀ニ奉存候付、不顧愚考之形行奉入御聞候間、前後御取捨被為加、万全之長策相立候様奉仰望候、以上、

十一月

冲 直次郎

二六二五
此節劍銃切縮並胸乱御拵替之儀、集(鹿尾島)成館へ被仰渡候由、右ニ付砲術之儀ハ、先年 金剛定院上様厚以 思召御流儀被召建置、其後砲術館並大砲鑄製場御取建被仰付、追々過分之劍銃御出来相成、先年於磯御茶屋下戦兵七百人余、甲冑致着用、劍銃調練被仰付候儀モ有之、金剛定院様肝付表御巡見之節、於福山原砲術調練被遊御視、同所ヨリ人数三拾人御巡見先へ被召連、於諸所調練被仰付、其外西目下湯筋多人數廻勤等被仰

付候節モ、一同劍銃並胸乱迄モ自身ニ持越タル儀ニ御座候、殊ニ吉野原調練モ度々有之、其上 順聖院様益御流儀盛大ニ御取起シ、於二之丸御庭劍銃現(マ)打調練、且於犬追物場御役人限調練被仰付、不容易御場所柄ニテ、誠以御手厚キ御事御座候、右旁之儀ハ、御両殿様專ラ実場之御用相立候様ニトノ御趣意、深 思召被為在、段々御沙汰ノ趣モ承知仕居申候、尤劍銃ノ儀モ、先年順聖院様為見本、江戸表ヨリ被差下集成館へ、以来右之御手本通相拵候様トノ趣、被仰渡相成居申候、就テハ当分ノ劍銃ニテ、実用向何ソ不便ニ候廉全無御座候、元来劍銃之儀ハ、隊列ヲ組候テ一声ニ放射イタシ、敵陣ヲ打崩シ、手詰ニ相成候テ、騎兵ヲ防ニハ長筒之方利用ニ御座候、毬打ヲ仕ニハ臆中ニ筋ヲ立(施条銃)矢利モ宜様拵タルモノニテ、長短種々有之事ニ御座候、尤取扱ニ付テハ練不練ニ相拘候訳ニ御座候、旧弊之儀ハ時勢之御变革被為在モ自然之理、御尤之御事奉存候ヘトモ、右様之儀ハ兼テ練熟イタシ相心得居候者へ、御吟味不被仰渡候テハ、多年致修行候者安心不仕儀ニ御座候、乍恐 御先代様御遺徳モ空敷罷成候訳ニモ相當リ、人心致疑惑候基ニテ、此節柄之儀御座候付、是

迄被定置候儀ハ其通ニテ、万端 御先代様御趣意通、
調練等ノ儀モ嚴重被仰出度儀ト奉存候、何共奉恐入事
御座候ヘトモ、右旁ノ訳合ヲ以、劍銃並胴乱御拵替之
儀、都テ今形被召置、左候テ切縮ノ御入費ヲ以、新規
ニ製作被仰渡、猶又追々出来重候様奉歎願候、乍恐私
儀、御流儀砲術御預被仰付置候付、不得止事砲術書籍
方掛ヘモ申談、此段手扣書ヲ以奉訴候、以上、

安政七年庚申十一月

成田正右衛門_{之正}

以上建言書ニ就テ、当時攘夷論者ノ熾ナルヲ知ルヘシ、何事モ
外国ト云ヘハ、忌避スルノ風アリテ、利害得失ヲ顧ミサル、是
ヲ以テ知ルヘシ、而シテ文久三年癸亥ノ夏、英艦ト戦ヒ倏チ悔悟
シテ、再ヒ洋式ヲ用ルニ到レリ、其事实ハ英艦襲来ノ部ニ詳記
ス、

〔表紙〕

忠義公史料

市來四郎編

萬延元年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執筆史料」
〔紙数五十三枚〕の記載あり〕

目録

〔参考〕鹿兒島ノ形況大久保利通日記鈔

櫻田事件ノ始末

伊地知貞馨自記鈔

水戸藩勅書奉還ヲ否トシ遂ニ櫻田ノ挙ニ及ヒタル概略

浪士品川駅会議ノ始末并ニ湊屋其他申立書

以上五条

二六三 参考 鹿兒島ノ形況大久保利通日記鈔

一 三月廿四日町田内膳出立有之、同廿五日朝稻三益被召〔件悉〕

列、〔鳥津左衛門、當時國老上意、中途ノ實後松崎驛ヨリ御引揚シノ途申〕 左州出立、皆御中途迄也、〔前夫久美、國老〕

一 川式部、書役岩山八郎太召列出府之由、

一 三月廿四日郡山一介、町人波江野休右衛門・池田藤太郎召列出立也、他領天草並長崎へ御用之名目ニテ、実〔上町人〕

ハ浮浪士ノ挙動伺之由、〔熊本県〕

一 同頃高崎善兵衛出立、筑前・肥前其外御用有之ト之事、〔高橋鹿兒島士、小監察〕

一 米御買入欺之由、

〔鹿兒島士、小監察〕

一 宮原甚五兵衛同所町人兩三人召列出立、郡山同断之由、

一 江戸守衛人数、御城下六拾六人位、諸郷四十八人近々出立被仰付ト之御達シ有之候由〔江戸邸守衛〕

一 關山糾儀、全体江戸詰被仰付置、来月六日頃出立之賦〔金生、番頭〕

一 〔有志中有望ノ人ナリ〕

一 閏三月初日晝、〔伏見藩邸在勤〕 田中直之進着、〔田中直之進謀助〕

一 田直〔於大坂、関東事変承リ、則上京之処、姦手探索〕

嚴重、徳佳〔徳田善兵衛力〕 へ面会モ不調、地蔵堂へ入候処、是迄幕手

相廻リ居、不得止 御所ヲ志シ差越候得共、中々蹈入〔京都〕

事不相叶、空敷大坂之様罷下候処、木傳・田仲等ノ進〔木場伝四、田中休左衛門〕

メニ依り罷下り候由、

一 所司代酒井若表(若狹守忠義)向嚴重威ヲ張り、尤国元人数多ク取寄

セ候由、高松ハ京ノ人数引取り、関東之方へ多人数取

寄候由、江州ハ勿論ニテ日々五十人位ツ、毎日駈登リ、

別テ騒動之由、尤大坂・伏見之間、浪人体之者ハ勿論

通行甚六ヶ敷、水人ハ切捨、薩人ハ御屋敷へ引合之上、

無相違ハ差通スト云程之事情由、

一 只今之処、先奉擁 主上抔トノ御危難ハ不被為在由、

何分ニモ姦魁打倒シ候故、余程勢ハ挫ケ候由、夫丈ハ

安堵之事情得共、何分跡之処如何可成行敷、此機ヲ以

大挙不相調儀、千載之遺憾ト云フベシ、

一 閏三月二日 太守様御安着、今晚直ニ谷(谷村要之助)へ大宅ニ於テ

取会云々存慮及弁駁候事、同四日頃兒(兒玉雄一郎)へ差越、得ト及

談合打合セ候事(兒玉ト談話ノ事柄知ルニ由ナシト雖、前

文ヨリ推シテ考フルニ、大挙云々ヲ久光公ニ促スニ他ナカラ

ム乎)

一 同六日關山出立(晝夜兼行セシト)

一 同九日土屋着、三月十八日江戸着、同廿二日出立之由、

一 堀仲モ大坂ニテ交事承知、金子一条ニ付汾陽(十兵衛)・松元(久高)ハ

云々之訳有之、早々関東ヲ志シ駈下り候、則喜入(當時江

戸詰家老 懸、當時天下之形勢御国元之事情云々ニ付、受御内命

出府、且 順聖公御深慮為 天朝国家、御終生御配慮

被為在候義、篤ト事実及演說候処、存外ニ感服被致、

此上ハ無疑心志見抜、先ハ正論ニ相違無之由、

一 比節交事ニ付テモ、喜入至極差ハマリ、御屋敷中手当

向ハ勿論、雄助儀ニ及極々入念、坂口へ直ニ言合、叨

リニ繩ヲ掛ケサル様ニト之事迄相達シ、何ク迄モ主意

汲取、内場之所置可致之存慮ニ候由、

一 一挙ニ付、関老脇坂ヨリ西筑右衛門迄内諭之趣ハ、此

節御参府御延引相成候テハ、決テ都合不宜、尤薩州之

義武名無隱事ニテ、此節之義ニ付御延引ニ付テハ、御

比興ニモ可相当候ニ付、是非御参府有之度演達有之候

由、勿論井伊家之義ハ、幕ヨリ嚴重御当り相成、万一

水戸家ヲ恨ミ事ヲ起シ候得ハ、井伊家夫限断絶之事情

ニ付、相静リ候様ニト之事ニテ、若哉押寄候時宜モ有

之候ハ、打亡シ候様御手当人数へ御当リニモ相成居

候由、依之御国之義全ク御難題無之ト之事情由、右之

次第飛脚ヨリハ難申上候ニ付、堀上(急キ致帰国候様、

喜入(全考)ニハ御参府相成宜トモ不被申、亦御参府不相

成候テハ無限事ニテ、是以宜トモ不被申、何分御裁断

次第ト之考之由、

一防公^全へ拜謁、関東一挙之事体、且閣老内達ノ趣迄詳悉遂言上候処、御参府之義ハ御扣之思召候由、万一御参府相成候得ハ、人数二三百モ御引列レ不相成候テハ難相濟御趣意候得共、当分ニテハ御扣へ被遊、幕へハ嫌疑ヲ御避、随從之姿ヲ見セ、変之時宜ニ依リテハ、堂々勤 王之御忠誠可被爲尽、其内ハ可成御沈静被遊居ト之御返事、当分ニテハ平穩之形候共、詰ル所乱ヲ引候ニハ相違無之、只今通ニテハ何分御道中ハ勿論、御登城之処甚御懸念之由、御沙汰被遊兼候得共、乱ニ相成候得ハ、一凶之御裁断被爲出来候ニ付、実ハ乱ヲ御好ミ被遊候トノ御意モ有之由、其余略ス

一雄助^全一条ニ付テハ、汾陽^全上杯モ是非無事之処相働キ、大坂ニテ亡命、行衛不相知訳ヲ以テ、及御届候筋御留主居三人ニテ談合、其通ニテ書附モ出来居、汾陽出立後大坂御留主居徳尾^全、自分ニ難題相掛候半ト之臆病ニテ、書面認替有リ筋ニ罷下候旨及御届、則幕ヨリ追手掛り候訳ニ候由、右ニ付木傳上^全・田中^全・徳尾上^全へ激論イタシタル由候得共、中々不聞入、当分別テ不和之由、雄助出立後右様追手相成候ニ付、木傳上^全則船仕立

罷下リ、右之趣雄助杯へ無事帰国イタシ候様取計度、徳尾上^全へ及相談候得共、却テ難事可致到来ト之事ニテ不承知、木場一身ノ決心ヲ以如何様共御断申上候間、是非々々及論談^{初カ}候得共、是以不相成候由(俗人ノ徳尾一身ノ榮枯ノミ何ソ大事ヲ為サン哉)、
田直大坂へ参候節モ、万一モ幕ヨリ手ヲ掛為致切腹差出セト之義、御留主居申事故、是以本・田兩人ニテ及激論候由、

一有村次左衛門一挙之節、比類ナキ勇功ハ如何様次第二^{前条カ}テ、分テ哀之一卷^{マキ}ハ、日下部裕之進亡父ノ訳ニ依リ流罪被仰付、当分入牢之由、就テ裕之進母儀并妹共ニ貞節之女ニテ、兼テ伊三次之志ヲ受ケ、無限災難ニ処シテ、尋常婦女子之顔ヲ成サス、一志確乎トシテ動カス、裕之進右之次第^{伊三次}及ヒ候ニ付、是非有志ノ人ヲ養テ娘ニ嫁センコトヲ願ヒ、同志堀上^全へ此事ヲ謀ル、堀是ヲ次左衛門ニ告クト雖云々、決死之我ヲ以テ、他家ヲ継ク事本意ニアラザルヲ以諾セス、堀実ヲ告ル事能ハス、裕之進未タ落着セサルヲ以テ、其意ニ応シ難キ旨ヲ母儀ニ通ス、其后裕之進叔父何カシ等ヲ以、切ニ請フトイヘトモ同事ヲ以テ答フ、然処何月何日頃、俄然トシ

テ頻リニ此ヲ請フ、其故ハ娘或ル夜亡父嚴然トシテ枕上ニ来リ、次左衛門ヲ養フテ、汝ヲ以テ是ニ嫁セシメント夢ム、是ヲ母ニ語ル、母儀是ヲ聞テ願意愈切ナリト、然リトイヘトモ次左衛門更ニ諾セス、事ヲ左右ニ託シテ固辞ス、娘又同夢ヲ蒙ル事再ヒ、母儀如何トモスル事能ハス、既ニ一挙期定前夜、諸同志日下部氏ニ会ス、時三月二日也、廟議已ニ熟シ客散後、母儀有村兄弟ニ用有ルヲ以是ヲ留ム、兄弟再ヒ就席問其故、母儀告ルニ以前事、次左衛門莞爾云、不肖之某ヲ養ハセラレン事、身ニ余リ忝ク存ストイヘトモ、此儀ニ於テハ更ニ難諾、勿論明日ノ挙ニ趣候得ハ、再ヒ帰ラサルノ身ニ候間、尚以御断リ之段申述候処、母儀云、妾婦人ノ身トイヘトモ粗其故ヲ知ル、然リトイヘトモ亡父靈夢ノ訳モ有之、是非共故主ノ意ヲ達スル迄ニ候、ト云ヒ其志ヲ御汲受ナキニヨヒテハ不及是非ニ付、此席ヲ御立セ申事ハ不相成ト、涕泣シテ相迫リ候故、次左衛門情義難黙止、快然トシテ夫程之思召ニ付テハ、随分底其意候段相答ヘ候処、母儀喜悅不斜、娘ヲ呼テ盃ヲナサシメ、仮ニ夫婦ノ契リヲ結ヒケル由、母子共誠ニ無双ノ貞節故、兼テ大義之訳モ関リ知り、一挙前日也

廿八日也

敵之登城ヲ伺ヒ、且三日之登城有無・時刻等探索ノ為間諜ヲ勉メラレシ由（日下部妻百方力ヲ尽シタリト）、娘ハ一七日前ヨリ神仏ニ誠願ヲ込メ、大志ヲ遂ケ給フ様ニト日参致サレシトソ、然ル処一挙容易ク仕果シ、次左衛門戦死イタシ候処、母子之悲哀無申計候得共、義ニヨヒテハ断スル処尋常ニアラス、此ハ娘ノ心底一生再嫁セサルノ決定ニテ、母子共其志操動カスベカラス、一次左衛門和歌ノ贈答モ有之ケル由、娘平日軍書ヲ好ミ、大抵アラユル書ハ歴見シケルトソ、草紙本杯ハ好マザル由（前ニ海江田信義カ妻、故アリテ今離別トナリシト云）一右追々委敷探索可記置候、承候形行記置也、実ニ大事ニ臨ミ次左衛門ハ、鬼神ヲ動カス勇烈ノ士ニシテ、如此ヤサシキ振舞尋常之及フ所ニアラス、堀部氏ノ古事シタルナラムトイヘトモ、恐ラクハ其下ニ立ス、

岩かねも砕けざらめや武士の

國の為めにと思切る太刀

此一首有村次左衛門腰ニ提ケシ胴乱ニ入レ居候由、

春風にさそはれて散る桜花

とめてとまらぬ我がおもひかな

兼清

君か為つくす真心天津日の

雲の上まで匂ひ行らん

〔マツ〕
日下部氏娘

右二首一挙前夜、日下部氏ニテ贈答ノ歌ニ可有之、追

テ日下部氏ヨリ有村氏へ送ケル短冊ノ内ニ有之候、

我袖のかはく間もなく春雨の〔シカ〕

降るたひことに故郷恋しき

兼清

此一首兼テ読置シ歌ト相見へ、右同断之内ニ有之候、

〔大君の愛御心をやすめつゝ鬼住園に桜かりせん脱力〕

水府

佐野竹之助〔光明〕

右佐野竹之助日下部氏ニ潜居致居候由、年二十一歳、

器量拔群ニテ、兼々次左衛門ト莫逆ニテ、我レ奸首

ヲ得ン、彼得ント争ヒシ由、佐野重創ヲ蒙リナカラ

脇坂へ出、一人ニテ申開キイタシ、即晩死去之由、

一又三月十九日定式飛脚着、関東ノ形勢先ツ平穩之由候

得共、井伊掃部頭思召之訳有之、御役御免被仰出候由、

〔矢和守〕
一久世様御老中御再職之由、

一井伊家老木俣右京ト申者近日出府、是迄岡本半助等之

説寛怠也ト、至極激シ急迫之論ヲ成シ候由、仍テ家中

両説ニ分レ候向ニテ不穩向之由、

一勢揃杯イタシ候風説有之、

〔大久保日記（東京大学所蔵）・大久保利通日記（日本史籍協会蔵書）にて補註〕

二六四 櫻田事件ノ始末

二六四ノ一

三月三日五ツ半時比外櫻田ニテ騒動之風聞書

御大老井伊掃部頭様御登 城之御途、徒党之者十八人

拔身ニテ身支度イタシ、御乗物へ目懸、御駕籠脇之衆

へ切懸ケ、即死手負人有之候、殿様御生死確ト不相

分、徒党人数名前左ニ記、

〔風統、三上藩主〕

遠藤様、辻番所へ上ル

薩州様御家来

〔必〕
有村治左衛門

右掃部頭様御供頭服部三郎右衛門之首持参之由、同日

夕方相果ル、但シ同所ニテ、

同人所持之品

宍分銀ニテ八ツ、式分金四ツ

老朱銀十、百文銭一枚

刀備前長船清光

脇差平打ニテ無銘

水戸殿御家来

御老中
脇坂様へ届出ル

佐野竹之助(光明)

黒澤忠三郎(勝寛)

蓮田市五郎(正亮)

齋藤監物(二徳)

○廣岡與次郎(子之次郎政則)

大關利與次郎(正)

山口辰之助(正)

横山彌一郎(五六郎直忠)

○森五郎右衛門(鈴随)

鯉淵要人(有良)

唐木松之助(正)

横田市藏(稲田重藤正辰)

増子金八(誠)

○關鐵次郎(鉄之介遠)

海後崎次郎(遠藤宗親)

○高橋多一郎(愛猪)

○林忠右衛門(以徳)

右○印水戸表へ走り之者、右徒党人数十八人、

井伊掃部頭様御家来

即死七人、手負十七人、御駕籠之疵十八ヶ所有之由、

二六四ノ一

水戸殿家老衆へ相達候書付

今三日、水戸殿家来之者多人数、掃部頭登

城途中短筒等相用及乱妨、怪我人等モ有之候付テハ、

此上夫々心得違之モノ可有之モ難計候間、追テ相達候

間、昼夜共居屋敷・下屋敷等門々出入ノモノ厳敷相改、

正敷重役之者相詰候様可被心得候事、

(徳川慶徳)
尾張殿
(徳川茂承)
紀伊殿

但同文言御城付へ

二六四ノ三、松平親良、竹葉藩主

只今大隅守門前ニ於テ、何物トモ不知拔身ニテ、井伊

掃部頭様御供中へ切掛候様子、怪我人等モ余程可有之、

窓下故見候者モ御座候、尤股引着用旅人体之者倒レ相

見へ、怪我人等ハ其御供之内連歸り候哉ニ相見へ申候、

追テ書面御届可申上候得トモ、先此段不取敢申上候、

以上、

松平大隅守家来

三月三日

奥津三左衛門

二六四ノ四

松平肥後守 (容保、会津藩主)

酒井左衛門尉 (忠亮、庄内藩主)

松平越中守 (定敬、桑名藩主)

大久保準之助 (忠礼、小田原藩主)

今朝掃部頭殿登 城掛ケ、水戸殿家来共及乱妨候付テハ、此上水戸表ヨリ若多人致出府候儀モ有之候ハ、時宜ニ寄沙汰可致候間、早々人数差出候積リ、兼テ手筈可被申付置候事、

三月三日

二六四ノ五

細川越中守へ (香麿、熊本藩主)

水戸殿家来

佐野竹之助

大關利與次郎

森五郎右衛門

黒澤忠三郎

蓮田市五郎

齋藤監物

右吟味中、其方へ預被 仰付候間、手当其外委細之義ハ、池田播磨守へ可被承合事、

三月四日

二六四ノ六
一定式御役人様之外御登 城無御座候、此段申上候、以
上、

今朝井伊掃部頭様御登 城之途中、松平大隅守儀御屋敷前御通行之節、何者歟乱妨之振舞仕、掃部頭様御供方へ手疵等負、即死人等モ有之趣ニ候、追々風聞承合候処、慥成義相知兼候処、下座見外山代右衛門左之通申聞候、

一掃部頭様御供方 手負十七人、即死七人、同御供頭服部三郎右衛門ト申モノ首トラレ申候、

乱妨相働候者

薩州家来

有村次左衛門

水戸

黒澤

蓮田

齋藤

佐野

此四人手疵負、血刀ヲ携へ、脇坂淡路守様御玄関へ罷

出姓名相名乘、御届ニ罷出候段申述候処、御取次恐怖仕候哉罷出不申、折節御門ニ罷在候下座見三好覺之助ト申モノ、罷出候様子承リ候間、御取次へ申達、四人御上ケ被成候間、疵所等ハ手当被成遣候旨、夕刻町奉行所へ御渡ニ相成候、

廣岡五郎次郎（子之次郎）

大關利與次郎（利七郎）

山口辰之助

横山彌一郎（形）

森五六郎

鯉淵要人

廣木松之助（種）

蓮田市藏（重）

増子金八

關鐵之助

海後崎次郎（總務之次郎）

高崎多一郎（騎八稱ノ誤）

林忠左衛門

右十三人前書同様、徒党之内ニ有之段、四人之者申聞

名前書留、

一八代洲川岸ニテ、兩人死シ罷在候義相尋候処、徒党人数之内深手ヲ負、逆モ助リ兼申候付、同士之内トゞメ

サシ候由、

一遠藤（風起）但馬守様御屋敷際へ相果候者ハ、有村治左衛門ト

申モノニテ、首ヲ携居候ヨシ、

但此首彦根御供頭服部三郎右衛門之首ナル歟、

一刀ニテ切候計ニモ無之、手鎗ニテ突候哉、掃部頭様御駕籠鎗跡拾ケ所計突候故、掃部頭様ニモ数ケ所之深手被為負、御存命モ無覺束ト承リ候段、代右衛門申聞候、右代右衛門申聞候趣ニ御座候、此段申上候、以上、

三月三日

島野十郎右衛門

二六四ノ七

龍之口雅楽頭許借屋敷辻番廻リ場之内ニテ、今朝五ツ時過、年齢廿七八位、侍体之男、馬乗袴ヲ着シ、大小共鞘計差、咽喉ニ疵有之、相果居候脇ニ大小共身落有之候故、辻番人申出候間、早速役人共見届候処、相違無御座ニ付、其俣番人附置申候、

右死骸如何可仕哉、此段奉伺候、以上、

酒井雅楽頭家来（忠頼）播州姫路

三月三日

宮崎嘉兵衛（地九）

二六四ノ八 (四ノ七)

今朝五ツ時過、南御門へ怪敷体ニテ六七人通り候付、
番人追々差留ニ罷出候処、欠ケ出候付、猶人数差出候
得トモ手廻リ兼、跡ヨリ附ケ行キ候処、馬場先御門へ
掛リ候テ、夫ヨリ脇坂様へ罷出候ヲ見届ケ引取申候、
其外張番所前十二間程先ニ、血付候木綿合羽有之候、
此段御届申上候、以上、

日比谷御門当番

片桐石見守内 (貞忠)
和州添上郡小泉

三月三日

篠田甚左衛門

二六四ノ九

今朝五ツ時比、御門御橋の方ヨリ、疵請候侍体之者四
五人西番所へ罷越、内藤紀伊守殿へ案内致候様申聞候、
然処御役人様方御登、城懸ケ下座中ニ付、下陣の方へ
相下ケ置様子可承心得ニテ、少々相下リ居候様申聞候
処、其俣当門外へ欠ケ出候間、追懸候得トモ、何方へ
参リ候哉、相知不申候、此段御届申上候、以上、

馬場先御門当番

戸田七之助内 (忠行)
沼方野州足利

三月三日

生浪蔵人

二六四ノ〇

掃部頭昨日登、城之節、於途中狼藉者御座候処、右ハ
水戸殿并松平修理大夫殿御家来之趣相聞申候、掃部頭
ニモ手負候程之儀ニ付、昨夕分テ御達モ御座候得共、
何分家来之者共、此俣暫時モ難罷在、御取押ニ相成候
者共、子細柄為心得度旨一同懇願仕候間、何卒御憐察
被成下、願之通被 仰付候様仕度奉願候、以上、

井伊掃部頭内

申三月四日

岡本半助

同道人

相馬隼人

右御付札

書面之儀ハ難引渡筋ニ候事、

二六四ノ一

三月九日、御預替相成候、尤細川越中守儀へ御預ニ
相成居候モノトモ、

松平稠松様へ (利同)
富山藩主

大關和七郎

黒澤忠三郎

本多主膳正様へ (康徳)
江州膳所

仰付候、

蓮田市五郎

稻葉伊豫守様へ豊後臼杵(編通)

森 五六郎

堀丹波守様へ越後村松(置休)

杉山彌一郎

田村磐次郎様へ(通頭一關藩主)

森山繁次郎(致徳)

右之通御預ヶ替ニ相成候事、

二六四ノ二
掃部頭様へ相渡候書付

此度不慮之次第、家来末々迄如何計残念ニ可存卜、無
此上御心勞被遊候、及乱妨候者共ハ御大法有之、急度
御詮義被成候事ニ候条、万一家来共騒立候様有之候テ
ハ、天下動乱ニモ可及、其方家之儀ハ格別之訳柄、殊
ニ当節御役ヲモ勤、格別出精
御為一途ニ心得候義、兼々 御力ニモ思召候程之義ニ
付、家来共ニ到迄心得違之者有之間敷候得共、万一粗
忽之族有之候テハ、家柄ト申実以不相濟事ニ候間、国
家之御為ニハ為捨儀ト厚相心得、家来末々ニ至迄相忍、
動揺不致候様幾重ニモ取鎮メ置、御下知相待候様被

二六四ノ一三

惣人数姓名

○大關和七郎(増美)

廿六才

○森 五六郎(直長)

廿一才

△黒澤忠三郎(勝算)

三十四才

佐野竹之助(光明)

山口辰之助(正)

廣岡孟次郎(子之次郎改則)

○杉山彌一郎(当人)

廿七才

増子清三郎(盛)

廣木松之助(有良)

○森山繁之助(致徳)

廿六才

△齋藤 監物(二徳)

三十九才

二六四ノ一四
今朝登 城掛、外櫻田松平大隅守前ヨリ上杉彈正大弼
辻番所迄之内ニテ、狼藉者鉄砲打掛、凡二十人余拔連
駕籠ヲ目懸切込候付、供方之モノ防対イタシ、狼藉者
打留、^(各人脱力) 其余手疵・深手等為負候ニ付、悉ク逃去申候、
拙者モ捕押方等指揮致候処、怪我致候ニ付、一ト先帰
宅イタシ、尤供方始即死手負之モノ別紙之通ニ御座候、
此段御届御達申候、^(申力)

深疵 日下部三郎右衛門 ^(令其御供頭)
手疵 片桐権之丞 ^(良敷)
即死 河西忠左衛門
即死 澤村軍太 ^(六)

薩州御家来
有村治左衛門 ^(八)
△蓮田市五郎 ^(正吏)
廿八才

薩州御家来
有村治左衛門 ^(八)

手疵 ^(疑居力) 榊尾猪三郎
全 ^(四日死力) 小河原秀之丞
全 柏原徳之進 ^(脱力)
即死 加田九郎太 ^(正徳)
全 永田太郎兵衛
手疵 草刈鋏五郎
全 松尾貞之丞 ^(進)
全 萩原吉次郎 ^(五)
全 ^(六日死力) 越名源次郎
薄手 元持基之丞
薄手 渡邊泰吉 ^(森太)
全 藤田忠蔵
全 ^(全脱力) 水谷求馬
手疵 ^(六日死力) 岩崎徳之丞 ^(進)
薄手 草履取 吉田左助 ^(六)
手疵 陸尺 彌右衛門
全 全 勝五郎

即死四人
右掃部頭様ヨリ御届書之写

^(番号二〇六に同文あり)

二六四ノ五

右小林半六次男榮治郎ト申者、當時松平大隅守様御屋敷ニ罷在、當時御同所様表御門番相動候由ニ付、右同人へ昨日之騒動始末承リ合候処、其節同人ニハ詰合無之候処、右騒動之由承早速御門へ相詰候処、最早掃部頭儀ハ御落命之義ニテ、御駕籠ハ陸尺体之モノ三人計參リ、血ニ染候士一人付添、御屋敷へ持込候ヲ見請候由、右初発之始末、跡ニテ其節御門へ詰居候者へ承リ候処、左之通、

一掃部頭様御登城之節、見物人之士ト相見候人数ハ不相分候得共、松平大隅守様御屋敷東北角下水溜り有之候辺ニ罷在、且又八九人程御同所様表御門辺ヨリ、見物体ニ見セ、蓑笠或ハ手傘相用、袖武鑑ヲ持參り候者モ有之、御駕籠左右へ附添罷越、表御門ヲ過ル間モナク鉄砲ヲ打放シ、トタンニ右下水辺ニ罷在候者共、一同御先へ切掛候ト、御駕籠脇ノ衆右御先之騒動ニクラマサレ候哉、御駕籠ニ附添候モノ御先ノ方ヲ重々防キ候ヲ、右八九人之モノ御駕籠ヲ刀ニテサンザン突候上ニテ、掃部頭様ヲ駕籠ヨリタブササ持チ引出シ、未出切り不申内、慥ハ不相知候得トモ、右八九人之内何歟申

掛候テ首切落シ申候、右タブササ持引出シ候節ハ、最早御命ハ無覺東見請候得トモ、事ニ寄候ハ、全御絶命ニモ無之候哉之体ニモ相見得候由、乍併此儀ハ慥ニ相分不申候、右首切落シ候ト、直ニ骸ヲ土足ニテ踏立、サンサンニ切り候由、首ハ右八九人ニテ持退、跡ハ散々ニ相成候由、騒動中之義ニテ、右八九人ノモノ其場之始末相分兼候由、夫ヨリ前条申上候始末ニ相成候ト申事ニ御座候、此外ニモケ条可有御座候得共、全ク榮治郎ヨリ承り候丈ヲ申上候、以上、

清水領作

二六五 伊地知貞馨自記鈔

萬延元年正月十八日、貞馨助教(舊名彌仲左衛門、後小太郎、次郎、伊地知社之丞)ニ擢テラレ(猶十五、高崎)、(當時夜久念)君句読師頭取ヲ命セラレ、学校変革ノ担任ヲ令セラル、(難助、次左)是春忠義公ノ參府ニ当レリ、故ニ水戸藩引合、有村君兄弟・田中謙介君等決挙ノ事ヲ具陳シ、其備ヲ為シ玉ハント請フ、政府疑フテ信セス、時ニ久光公天下ニ尽シ玉ハントノ御内旨アリテ、有志ノ輩徒ニ死ニ就クハ惜ムヘシ、之ヲ留ル能ハサルヤト問ヒ玉フ、对テ曰ク貞馨ヲ出シ玉フ時ハ必ス此挙ヲ止メント、久光公之ヲ(當時久光公國政ニ)

專任セス、茂久公補佐ニ止マレリ
政府ニ議シ玉フ、政府ノ人以謂ラク、蓋シ此事アルニ

非ス、只之ヲ口実トシテ出府ヲ謀ル者ナリト、因循決
セス、因テ復タ久光公ニ白ス、公決断シテ竟ニ出府ヲ

命シ玉フ、是ニ於テ二月二十二日鹿兒島ヲ発ス、大坂
ニ至ルヤ既ニ三月三日ノ奏報達セリ、中途ニシテ帰ル

ヲ欲セス、昼夜兼行江戸邸ニ至リ、御家老喜入攝津君
ニ面シ、国元ノ形勢ヲ略陳シ、国家ノ為ニ尽力アリ度

旨ヲ乞ヒ、留ル十余日ニシテ帰り、伊地知正治君是ヨリ先
京師ヨリ
帰リ訓導師
ヲ命セラル・高崎五六君等ト議シテ、館中ノ役員黜陟、学
制変更等ニ從事シ、當時茂久、此書、明治四年ニ記シタル故如此
忠義公ノ命ヲ以テ月二三回同席、

山之内作次郎君ト輪番ニ薄暮ヨリ登城シ、君前ニ於テ
貞観政要ヲ講セリ、

一 貞馨此時ニ至ルマテ家兄君ト同居セリ、家狭クシテ教
示等ヲ為シ能ハサルヘシトテ、藩ヨリ特別ヲ以テ金百

円ヲ賜ヒ別居セシム、故ニ宅地ヲ鹽屋ニ購ヘ別居ス、
利通

一 貞馨ノ未タ高崎君ト帰国セサル前ニ、大久保君主任ト
ナリ、有志諸君ト議セラレテ、斎彬公無社ノ号照國公ノ御遺志ヲ継キ、

三ヶ国ヲ以テ天下ノ為ニ尽サント計画セラレ、密ニ其
旨ヲ久光公ニ献言セラル、政府其他俗吏ノ疑フ所トナ
リ、志ヲ果サ、ルヲ得ス、已ムヲ得サレハ決拳スヘシ

ト内定アリ、久光公夙ニ之ヲ聞キ、手書ヲ以テ諭止シ、
暫ラク時節ヲ俟ツヘシト内示シ玉フ、是ヲ以テ諸君沈
静シテ其期ヲ俟タル、

二六六 水戸藩勅書奉還ヲ否トシ遂ニ櫻田ノ挙ニ
及ヒタル概略

萬延元年二月、武田正生書ヲ慶篤ニ呈シテ曰ク、
勅書ノ事タル特使ヲ以テ直チニ京師ニ奉還シ、一藩ノ
意見ヲ陳述スヘキ旨、去冬既ニ令アリ、爾后已ムナキ
事情ニ由リ幕府ニ還納スヘシト云フ、夫斯ノ 勅書ハ
天下ノ為メ徳川家ノ為メ、深キ 叡慮ヲ以テ下シ給フ
所ノモノ、宜ク速ニ遵奉シテ事ヲ成スヘキニ、勢ノ已
ムヲ得サルアリテ終ニ今日ニ遷延シ、還却ノ命ヲ受ル
ニ至レリ、事誠ニ 叡慮ニ背戾シ、輔幕ノ道恐クハ立
タサラン、当時老公京師ニ関説シテ、 勅書ヲ請フノ
議ヲ受ケリ、而ルヲ今空ク還納シテ、公武鬯ヲ開キ不
測ノ変ヲ生セハ、則 叡慮一朝水泡ニ帰シ、老公ノ冤
千載雪キ難ケン、是ノ如キハ、豈臣子ノ為スヘキ所ナ
ランヤ、然ルヲ彼等并伊、安藤等及ヒ高松侯往々説ヲ作シテ曰ク、今ニシテ還納
セスンハ禍難両公ニ及ハント、是真ニ一時ノ俗見ト謂

フヘキノミ、勅意固ト幕府ヲ輔クルニ在リ、是レ幕府ノ尤敬承スヘキノシテ、万隔離ヲ生スルノ理ナシ、今之ヲ還納セハ却テ讒口ニ陥リ、両公ノ禍難ヲ引ン欺、若シ夫レ奉還ノ命ニ違フヲ憂フハ、特使ヲ以テ事情アリ返納遷延ニ及フ旨ヲ陳シ、後ニ命ヲ奉スヘシ、今然ラスシテ之ヲ幕府ニ還納スルハ、事体如何ト考量スルノミ、(賴房、光國)威義両公以來世々京師ヲ尊崇スルノ家風一朝ニシテ廢絶ス、是レ臣子ノ痛心慨歎ニ堪ハサル所、願クハ一時ノ利害ニ拘セス、名義ヲ全シ、天下後世ヲシテ我家風ヲ欽慕セシメンコトヲ務メ、幕府ニ向テ具状スル所アレ、(堂上)教孝之ヲ聞テ曰ク、事迫レリ、然レトモ一姦魁ヲ墮セハ則事成ル、何ソ深ク意トスルニ足ラント、(電種)日夜愛諸等ト謀議シ籌策已ニ熟ス、水戸藩、死事録愛諸等亦其徒ヲ鼓舞ス、是ニ於テ四方ニ流寓スル者皆爭テ来リ聚ル、曰ク、今 勅書ヲ納メハ、水戸累代尊 王ノ名義ヲ壞リ、而シテ又幕府天下ヲ統轄スルノ權ヲ失フニ至ン、其關係スル所最大ナリ、臣子報國ノ情ヲ以テ論セハ、誓テ之ヲ納ム可カラス、苟モ 勅書國境ヲ出テハ我徒之ヲ奪ンノミト賜勅、始末、(長城)壯烈銳氣ノ徒憤惋ニ堪ス、城南長岡駅ニ在リテ 勅書奉上ノ日、之ヲ路ニ要シテ遮リ

止メント欲シ、来会スル者數百人、山口正吉・徳林以徳・大津之綱等之カ魁首トナル、有司百方力ヲ尽シテ鎮撫スト雖モ、衆論激動毫モ肯セス殉難、事蹟、是ヨリ先キ鹿兒島藩士議ニ与ル者、往々故アリテ西帰ス、堀貞馨、教孝ニ告テ曰ク、少ク期ヲ緩フセント、教孝報シテ曰ク、若シ此機ヲ失セハ大事恐クハ去ラン、一姦ヲ屠ルカ如キハ、吾藩ノ壯士以テ之ヲ弁スルニ足レリ、勅 王ノ舉ニ至テハ敢テ之ヲ貴藩ニ仰ク、諸君請フ善ク之ヲ処セヨト、幾クモ無ク貞馨亦國ニ帰ル、独有村兼武次左衛門弟兼清次左衛門ト留テ江戸ニ在リ、乃議ヲ決シ將ニ明年三月三日ヲ期シテ事ヲ舉ントス、兼武等乃之ヲ鎮西同盟ノ士ニ告ケ、以テ後図ヲ為サシム、是月愛諸其子諸徳ト先ツ發ス云々(大久保利通日記ニ参照シテ、企図ノ一旦タニアラサリシヲ知ルヘシ)

二六七 浪士品川駅会議ノ始末并ニ湊屋其他
申立書

二六七ノ一

ツル本ヲウタ 湊屋ヲコト
蕪ノ紋 有 村
ツル本テツ 同 ヲコマ

島羽織 茅 野

サガ屋ハマ

三好様

サガ屋ヲカメ

茅 野

覚

一惣ノ金拾一兩貳分一朱三百四十文

内金八両二分壹朱内ニテ受取候、

内金三両ハ京橋ヨリ使ニテ受取候、

二六七ノ二

水戸殿家来

三郎太夫厄介之由

元金八郎ト申候由

増子清三郎

一歳三十四五才位、

右同断出奔イタシ候

關 (遠) 新兵衛

一歳三十五六才位、

一唇厚キ方、

一丈並大ブリ候方、

一(齒、耳等)ハ・ミ、常体、

一顔色白キ方、

一眼大キク、スルトキ方、

一言舌低キ方、

一眉色コキ方、

元鐵之助ト申上、三好貫ト変名イタシ居候由、

右同断出奔イタシ候

廣木松之助

一歳式十四五才位、

右水戸殿領分神職之由

海、後崎助

一歳三十式三才位、

右御家来之由

岡部藤助厄介

岡部三十郎

一歳三十四五才位、

右ハ関東御取締御書役中川孫市様ヨリ御調有之候、

閏三月六日七ツ半時

行司

新坂和屋甚吉

亀平屋銀二郎

二六七ノ三
扣へ

一使ニ参リ候女、

一歳四十位、

一中文、

一赤顔、

一木綿帯着類モ、引ハキ、リンバ下駄傘杖ヲ付キ、

一又三通手紙持参、古風呂敷持参相渡シ候品、

一風呂敷包一ツ、

一式尺程ノ油紙包一ツ、

但白サヤニテ可有之哉、

右ハ預置候品直様相渡申候、手前ヨリ之金三両受取書差

遣シ候、

申三月三日九ツ時

右ハ北神田様御調ニ付、手先芝又カ徳ト申人ニ申上候、
(姓名註スヘシ)

三月十六日

二六七ノ四
覚

薩州浪人

一有村雄助同人相、

一歳二十七八才位、

一中文ヤセ形、

一眼大キク丸ク、眉フトクアツキ方、

一鼻常体尖キク、

一顔アヲ黒、ピン少々ハゲ、

一白ツカ大小、

右申三月十六日

関東御取締

關敵四郎様ヨリ申上候、

佐竹様御家中之由(偽称)

一三好貫、
(因違)

一歳三十七八才位、

一中文フトリ候方、

一丸顔色白ク、

一鼻筋通り口ピロ赤ク、
(ル)

一眼ホソクスルトキ方、

一ピンノ毛アツク言葉少々鼻ニ掛ク、

右同断之事

一茅野吉之助、

一歳三十二三才位、

万延元年 (1860)

一 中文ヤセ形、
一角カラ、
(顔平)

一 眼大キク青ヒゲ、

一 顔色アサ黒ク、

一 鼻常体口大キク、

一 言葉鼻ニ掛ク、

一 カミノ毛常体、

二六七ノ五
覚

未八月十三日

佐竹様御家来之由 (全上)

三 好様

相舟

同 廿八日

同

先方ヨリ使モノ兩人侍ニテ参候、

同十月三日

右御同人

同

申二月朔日

有村様

茅野吉之助様

鶴本屋

二月十八日

右御兩人様

湊屋

五ツ半時御出ニテ御
歸リ、

内有村様ハ夜九ツ比御出ニテ
御歸リ、

御歸リ、

翌十九日

茅野様計リ

湊屋

昼後歩行ニテ御歸リ、

同 廿日

有村様

茅野様

外 老 人

右之内一丁ハ 本ノマ、

式丁ハ マ、

夜九ツ時比

茅野様御一人

(有村ナラン)

但廿二日朝カゴニテ三田迄

御歸 (薩州鄰近)

同廿三日

同一人

七ツ時比駕籠ニテ帰ル、

残り十四人之儀ハ

七ツ半時過不残周防屋迄相帰リ

有村様
三好様
茅野様

申候、

以上佐竹家ト唱ヘタルハ一時変称ナラム、

三好様
茅野様

二六七ノ六
乍恐

鶴本屋

奉申上候、当三月二日夜、佐竹様御家来之由ニテ、三

同廿四日

有村様

茅野様

好様ト申候方ト茅野様ト申候方外十五人様、昼七ツ半

新宿ハナシ有之候(新宿遊様)

三水

時ヨリ六ツ半時迄ニ追々御出被成、宿内相摸屋へ案内

但昼後三人様步行ニテ御帰リ、

三月二日夜

三好様

仕候処、四ツ比ニ相成、駕籠三丁三枚ニテ手当イタシ

茅野様

候様御申被成、少々手間取宿内迄御帰リ被成、少々御

外拾六人様

立腹之様子、其内駕籠出来三枚ニテ拾三丁ハイツミハ

金拾壹両二分毫朱三百四十文

シ、二丁ハ浅草カミナリ門前迄、其内一丁ハ深川浄心

佐竹右京大夫様御家中ノ由

寺裏門前迄之由、

惣人数 拾七人

四ツ時半帰り、

右ハ三丁共上下ニテ、追々立カヘリ申候、

内三人、

八ツ時頃立帰、尤駕籠上下之由、

一御両人ハ四ツ半比步行ニテ御帰リ、一人ハ七ツ半比駕

四ツ時過步行ニテ帰ル、

籠ニテ芝七曲リ迄御帰リ、残り十四人様七ツ半過、サ

同二人

台物五枚アツラヘ置可申様、下女へ申付被成候、右五

枚ノ内へ取置候処、十四人ニテ酒喰被成候内夜明ニ相

成、大雪フリ出シ候処、下駄ハ皆々有之候へ共傘無之、

傘拾二本買遣シ申候、皆々下駄ニテ、ハカマキナガラ

六ツ半時、拾四人共御帰ニ相成申候 (愛宕山ニ集リシナラム)

一御出被成候時、馬ノリバカマ一ツ買調呉候様御申被成

候へ共、宿内ニハ無御座候間、御断申候処、立テ買呉

候様被申候間、近所古着屋聞合一ツ買遣シ申候、

右申三月二日夜

水戸浪人中

二月朔日

薩州様御屋敷

有(次左衛門)村様

(川辺元善)内田萬之助

佐竹様御屋敷之由

外御一人様

鶴本屋

右五ツ半比駕籠ニテ芝迄御帰、

二月十八日

右御兩人様

湊屋

夜八ツ比有村様御一人駕籠ニテ御

帰り、

二月十九日

佐竹様

湊屋

神明前ヨリ御上屋敷迄使出シ候、

昼後御帰り、

同 廿日

有村様

佐竹様

茅野吉之助様

外御一人様

二六七〇

拾八九位

式十三位

三十七位

三十五六位

惣髪

坊主

(川本惟一)豊後邦之助

(黒沢保高)吉野政助

(小田朝徳)浅田義助

(高畑胤正)相見卯之丞

(河野通恒)三島三郎

(平山繁義)細谷忠齋

イナバ屋

半助ヨリ

湊屋

昼ヨリ夜五ツ半比三人共駕籠ニテ御帰り、

同廿一日夜

芳之様一人

湊屋

三田迄駕籠ニテ御帰り、

同廿三日

有村様

茅野様

三好様

湊屋鶴本

夜五ツ半比駕籠ニテ御帰り、

同廿四日

有村様

吉之助様

湊屋

昼後三人御帰り、

三月二日夜

三好様

茅野様

外拾五人様

サガ屋

五ツ半比ヨリ追々御出、サガ屋六

半比ヨリ内三人上下駕籠ハ立帰り

内二人四ツ半比歩行ニテ御帰り、

内一人七ツ半比芝七廻迄駕籠ニテ

御帰り(有村ナラン)

佐久間町新道板ベイ・神成門(マゴ)・深川浄泉寺前迄、

去秋比度々御出外ニ御連レ有之候、尤薩州様御家来堀(伊)

仲左衛門様(地名)へ申出可申上候(堀云々解セス)

糺合方

佐竹様御屋敷之由

原様

市様

三月二日酒喰旅籠代

ノ金拾両三分ト百七十二文

内金八両式分一朱、兩度ニ受取ル

外金貳両三分ト百七十二文

外ニ金一分三朱、馬乗袴一ツ

外六百六拾四文、傘拾本

惣ノ金三兩ト二百四拾文

此処へ金三兩也、京橋ヨリ書付添御遣シ、使人ハ

尾張町二丁目カ、銀座二丁目カ、番太郎女房之由、

万延元年 (1860)

尤三日九ツ半時年齢四十位、

二六七ノ八

水戸家来

三郎太夫厄介之由

元金八郎ト申候由

増子清三郎

一歳三十四五才位

水戸家来ニテ

出奔イタシ候由

關(運)新兵衛

一歳三十四五才位

同断

出奔イタシ候由

廣木松(省息)之助

右關新兵衛

一歳三十五六才位、

一唇厚キ方、

一文並フトリ候方、

一齒耳常体、

一顔色白キ方、

一眼大キクスルトキ方、

一言葉低キ方、

一眉毛ウスキ方、

元鐵之助ト申候、三好貫ト変名イタシ居候由、

右同断

一歳二十四五才位

廣木松之助

水戸殿領分神職之由

海後(經職之介宗親)崎助

一歳三十二三才位

同岡部藤助厄介之由

岡部(宗吉)三郎

一歳三十四五才位

右ハ関東御取締御出役中川孫市様ヨリ御調有之候、

三月六日七ツ半時比

二六七ノ九

覚

二月廿日湊屋へ参リ候名前不分 一人

一歳二十一才位、

一中丈小フトリ、

一色白丸顔、

一言葉鼻ニ掛ク、

三月二日夜、丸ニ桐ノ紋ノ羽織、

茅野吉之助

一歳三十二三才位、

一中文ヤセ形、角顔色アサ黒、

一眼大キク、言葉鼻ニ掛ク、

三月二日夜、丸ニ蕪ノ紋ノ羽織、

三好 貫

一歳三十七八才位、

一中文フトリ候方、

一色白ク丸顔、鼻スヂ通り鼻高ク、

一眉コク口ロビロ赤ク、

一カミノ毛アツキ方、

一言葉少々鼻ニ掛ク、

一眼常体スルドキ方、

薩州

有村 勇助(雄)

一歳二十七八才位、

一中文ヤセ形、

一顔長クアサ黒、

一眼大ク鼻スヂ通り、

一白ツカ大小、

元水戸様御家来之由、当時浪人罷在候者多人數、御府内ニヲイテ不容易所業ニヲヨビ候モノ共、御召捕相成候得共、其場ヲ逃去リ候者モ有之哉之旨ニテ、関東御取締御出役中様御越相成、茶屋・旅籠屋共へ立寄り、酒食遊興等可致モ難計、右ニ付疑敷者休泊イタシ候ハ、其段早速可申上旨御嚴重被仰付候間、茶屋・旅籠屋一統申合、主人ハ勿論下男女迄モ無洩急度相心得、如何敷モノト見請候ハ、其段可申出候、右様申談置候上ハ、利欲ニ泥ミ夫ト心付候トモ見逃シ、等閑之取計方有之、後ニ於テ相顯候ハ、其筋相糺シ、御嚴格之御沙汰ニモ可相成、左候上ハ其者而已ニハ無之、同渡世一般之相統方ニモ抱リ候間、相互ニ心附可申、一体銘々渡世筋之儀、仮令人相見印等無之候トモ、風体言語等都テ形容ニ依リ見誤候儀ハ、極テ有之間敷候ニ付、向後不取締無之様相心得、正路ニ渡世可致候、右御申渡之趣逐一承知奉畏候、若心得違等閑之儀モ有之候ハ、何様申立ラレ候共一言之儀申立間敷候、依之連印差出申候処如件、

安政七申年三月

二六七ノ一〇
乍恐以書付奉申上候

一 小林藤之助御代官所武州荏原郡品川步行、新宿八十八店駕籠昇渡世、仲右衛門奉申上候、

当三月二日夜、同宿直八地借水茶屋渡世友八方ヨリ被相頼、駕籠差出候義有之哉之旨御尋ニ御座候、

此段当三月二日夜四ツ時比、駕籠三丁大急ニテ相雇度由、右友八方ヨリ申越候間、即刻右之通差出申候、

一 老挺ハ、和泉橋通り佐久間町左駕籠屋横町新道ニテ下

シ、相待居候内、無程小風呂敷包一ツ、脇差程之油紙包一ツ持参イタシ、尚又八半時右友八方へ立戻り申候、

一 一挺ハ、淺草雷神門外ニテ下シ相待候内、田原町之方

へ式町程行候哉ト思候時分、刀ヲ持参リ、八半時過右友八方へ乘戻り申候、

一 一挺ハ、前同所へ下シ、同刀持参、夫ヨリ深川浄心寺

へ相廻リ、門外へ下シ暫時相待居候趣申聞、同寺門内へ立入、無程立出、曉七半時比右友八方迄乘戻申候、

一 右友八方ヨリ同月三日曉七半時、駕籠一丁差出候儀申越候間、即刻差出、芝七曲リニテ下シ(有村次左衛門ナ

ラン)、駕籠昇共ハ立戻申候、

右御尋ニ付奉申上候、以上、

御慈悲之御沙汰奉願上候、以上、

小林藤之助御代官所

武州荏原郡品川步行新宿

八十八店駕籠昇渡世

安政七申年三月十二日

仲右衛門印
五人組 直八印

南

三御廻り方

御役人中様

二六七ノ一一
乍恐以書付奉申上候

小林藤之助御代官所武州荏原郡品川步行、新宿直八地借水茶屋渡世友八頼ニ付、代悴半助奉申上候、

当三月二日夜、侍体之モノ多人数、同宿旅籠屋へ案内

イタシ候哉之旨御尋ニ付、始末左ニ奉申上候、

此段私儀年来薩州様御屋敷へ出入罷在候処、去未八

月十三日夜、始テ同家中糺合方ト唱候学問所ニ罷在

候(忠ハ仲ノ懇)堀忠左衛門殿同道ニテ、佐竹様御家中之由三好賈

殿、并同家中之由原又市ト申者名前ニテ、式人都合
四人連ニテ罷越シ、止宿案内可致旨申聞候間、宿内
家持旅籠屋忠右衛門方へ案内仕候処、翌朝出立仕、
其後同月廿八日三好貫殿一人罷越、前書忠右衛門方
へ止宿、翌朝出立仕候、

同八月廿九日夜、右三好貫殿一人罷越シ、同宿家持
旅籠屋甚七方へ止宿被致、翌朝出立仕候、

一同十月三日、右三好殿外ニ名前不知モノ一人同道ニ
テ、前書忠右衛門方へ止宿被致、翌朝出立仕候、

一当申二月朔日夕刻、薩州様御家来目附書役有村勇助^屋
殿同道ニテ、佐竹様御家中之由茅野吉之助殿、右兩
人罷越、同宿内庄藏地借旅籠屋ヨシ方へ止宿、同夜
五ツ半時後出立仕候、

一当二月十八日、右兩人同宿家持旅籠屋彌三郎方へ止
宿仕候内、有村殿一人同夜五ツ半時出立、茅野殿儀
ハ翌十九日滞留イタシ、有村殿方へ迎使差出シ候ニ
付、昼八ツ時比罷越シ、夕刻兩人共出立仕候、

一当二月廿日、右有村勇助殿・茅野吉之助殿・三好貫
殿都合三人連ニテ、前書彌三郎方へ止宿イタシ候内、
有村殿ハ同夜五ツ半時比出立、三好殿・茅野殿ハ同

夜九ツ時比、同宿庄藏地借旅籠屋ヨシ方へ宿替ニ相
成、翌朝私宅へ立戻リ休足罷在候処、右有村勇助殿
罷越シ、右茅野殿兩人ニテ、前書彌三郎方へ止宿イ
タシ、三好殿ハ少々不快之由ニテ、私宅ニ休足致居、
同廿四日昼八ツ時三人トモ出立仕候、

一当三月二日夜六ツ時比、侍五人何レモ年齢三十前後
ト見受候、三好殿ハ參リ居不申候哉ト之旨相尋候間、
未タ御出無之由相答候処、然ハ跡ヨリ參リ候筈ニ有
之候間、暫時待合セ可申ト一同休足致居候内、無程
三好貫殿・茅野吉之助殿等被參、追々侍又ハ脇サシ
計リ帯居候者一兩人打交リ、都合拾七人罷越シ、同
宿家持旅籠屋忠右衛門方へ案内イタシ、食売女買上^{メシ}
ケ、右酒食中、同夜四ツ時比駕籠三丁相雇候様申
聞候間、同宿八十八店駕籠昇渡世仲右衛門方へ申遣
候処、夫々罷越シ、三人共追々曉七ツ半時比迄ニ私
宅へ立戻リ候ニ付、右仲右衛門方へ尚又案内仕候、
一右十七人之内、二人ハ同夜四時過歩行ニテ立戻リ、
一人ハ曉七ツ半時駕籠ニテ、芝七曲マテ相送り申候、
残り拾四人ハ翌曉七ツ半時過、右忠右衛門方出立、
私宅へ立戻リ酒食イタシ、朝六ツ時過一同立帰り申

候、尤雪中ニ付傘十二本買調具候様申聞候間、則買

調差遣シ申候、

一風呂敷包一ツ、

内（長い股引）バツチ・懐中物・衣類等ニテ有之ベク哉、其儀

ハ睨ト見留不申候、

一油紙包一ツ封印付、

但長二尺程白サヤ脇サシニ有之ベク哉ト存候、

右式品預ケ置申候、

右之内一人馬乗袴一足買調具候様相頼ミ候付、北品川

宿之内馬場町ニテ、代金一分式朱ニテ買受遣シ申候、

金拾毫兩二分毫朱ト三百四十文

右拾七人酒食旅籠代

内金八兩二分毫朱請取、

残金三兩之儀ハ

翌三日昼九ツ時比、京橋銀座二丁目番人女房之由申シ、
年齢四十位ニテ三好殿ヨリ被相頼候由ニテ、金子入手
紙持参イタシ候間、受取則預リ置候式品相渡申候、

右御尋ニ付奉申上候、以上、

御慈悲之御沙汰奉願上候、以上、

小林藤之助御代官所

武州荏原郡品川步行新宿

直八地借

水茶屋渡世

友八煩ニ付

安政七申年三月十二日

悴半助印

右

直八印

南

三御廻り方

御役人中様

以上湊屋等ノ書類ハ、現在所有主ヨリ水戸家編輯委員服部敏氏
入掌セラレシヲ騰写、参考ニ供ス（明治廿四年三月）